甦るクンダリニー・ヨーガ文明

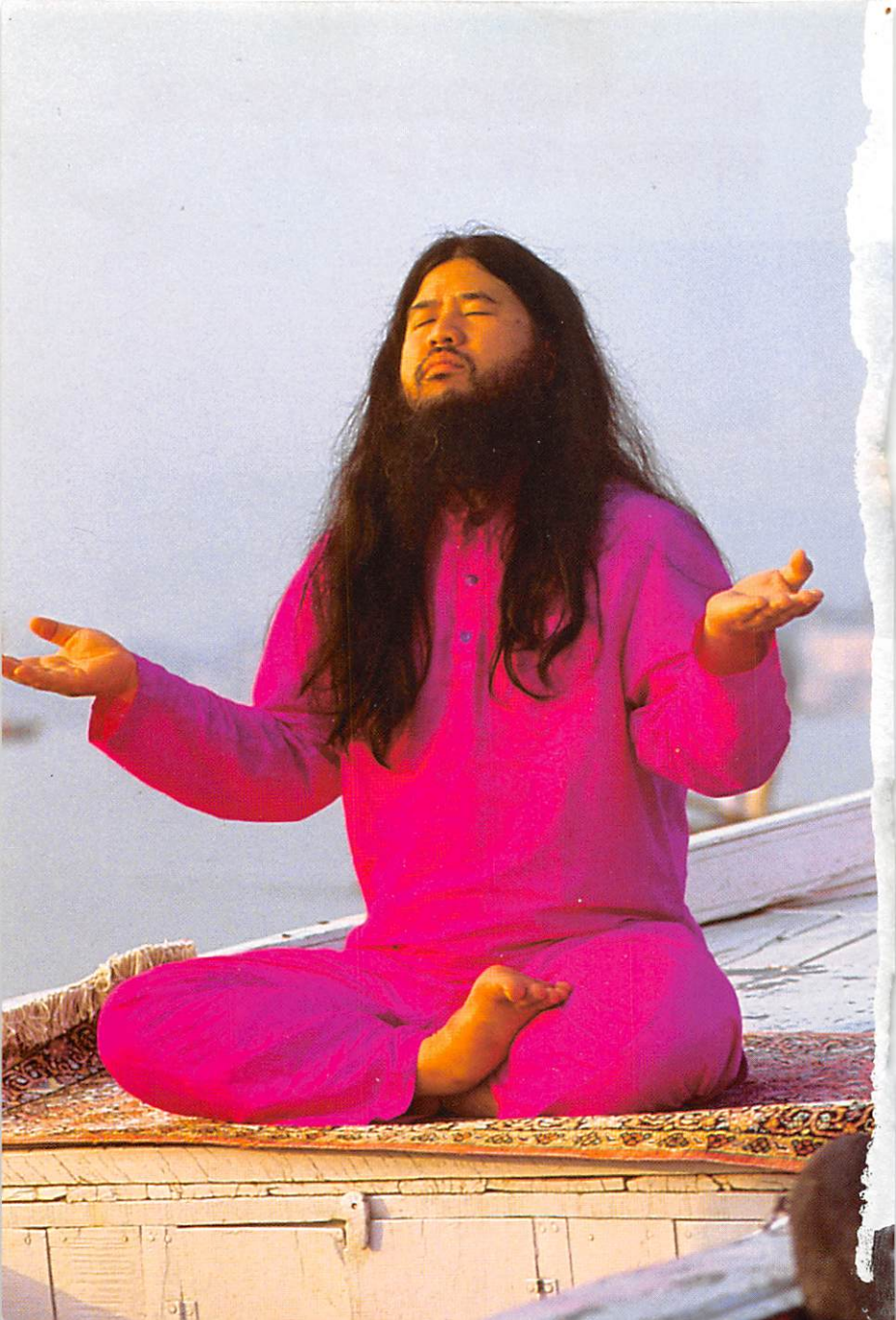
古代エジプトの秘儀を解く

麻原彰晃

甦るクンダリニー・ヨーガ文明

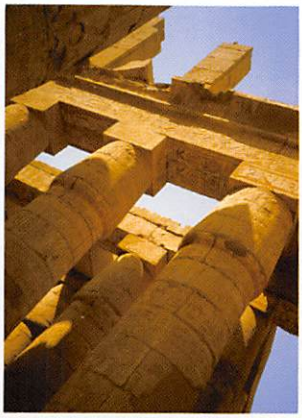
古代エジプトの秘儀を解く

麻原彰晃



遺跡が語りかけてくる——神秘の国エジプト

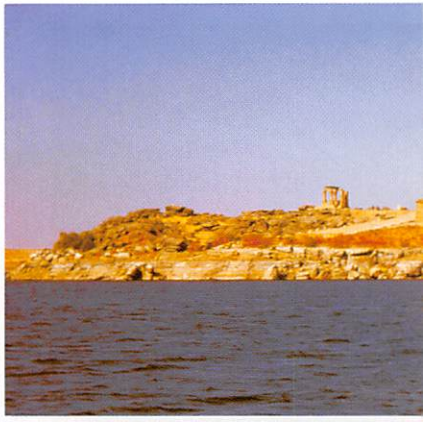
巨大な古代遺跡は、もの問いたげに訪れる人を見下ろしている



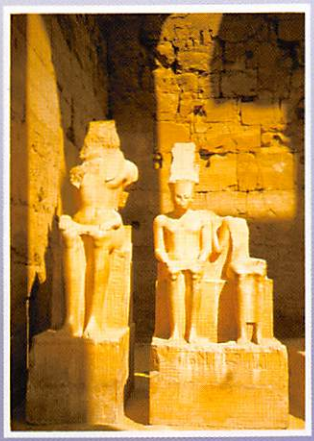
アメン大神殿列柱室のパピルス柱
ここにもヒエログリフが……

ヘビと太陽を戴いた
トトメス3世のレリーフ

カバの置物――古代文明の謎の鍵を握る蓮の花が刻まれている



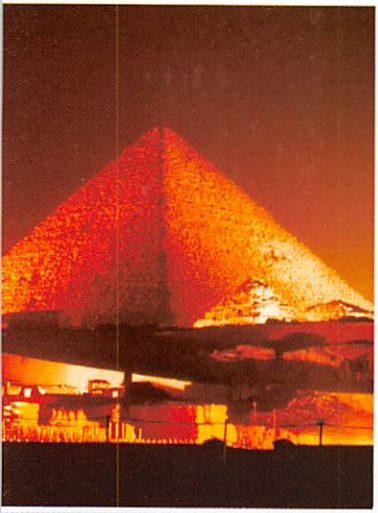
ナイル河に臨むカラブシャ神殿



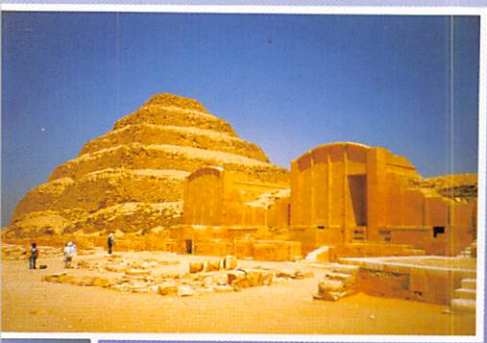
王の彫像は悠久の時の流れを見つめてきた

SOLVING THE MYSTERIES OF ANCIENT EGYPT

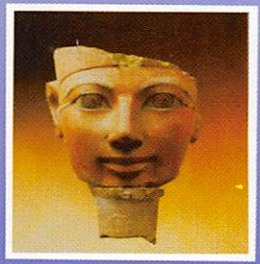
解けた
ピラミッドの謎



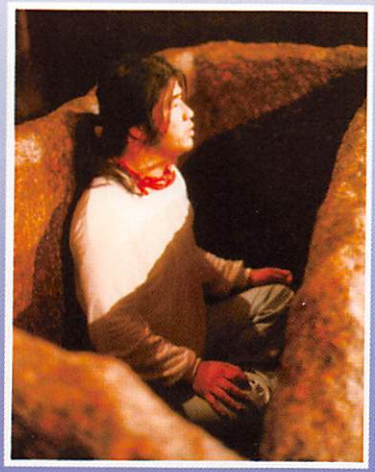
ピラミッド文明が花開いた第四王朝時代。
しかし、エジプトの衰退はこのときに始まっていた



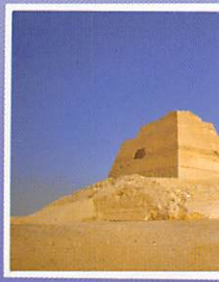
ジェセル王のピラミッド
世界最古のピラミッドは、5000年の時を経て
その封印を解かれた



古代エジプトの象徴、クフ王の大ピラミッドとスフィンクス



クフ王のピラミッド内部の棺の中に入り瞑想をされる尊師

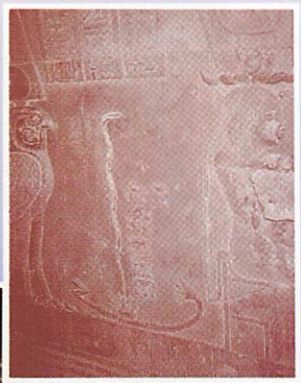


設計のミスのために、時代の波に洗われて崩れてしまうピラミッドもある

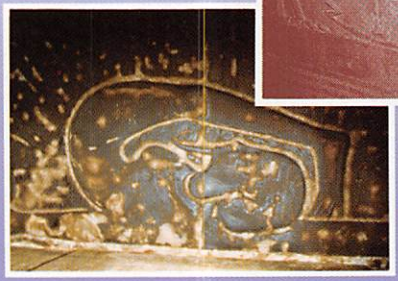
SOLVING THE MYSTERIES OF ANCIENT EGYPT

甦る
クンダリニー・
ヨーガ文明

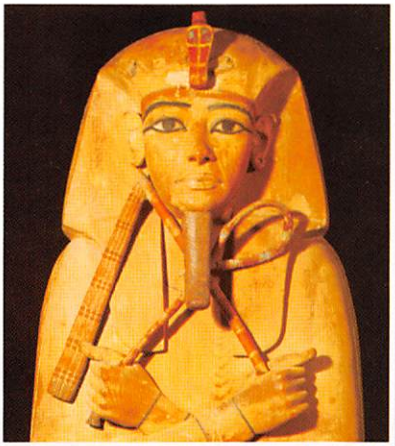
クンダリニー・ヨーガの象徴、三本の蓮の花が描かれた柱



蓮の花から立ち昇るヘビとヨーガの逆転の体位"ビパリータ・カラニー"を刻んだレリーフは、クンダリニー・ヨーガ文明を立証する雄弁な証言者だ



ハトホル神殿のヒエログリフは、驚くべき事実を雄弁に語ってくれた

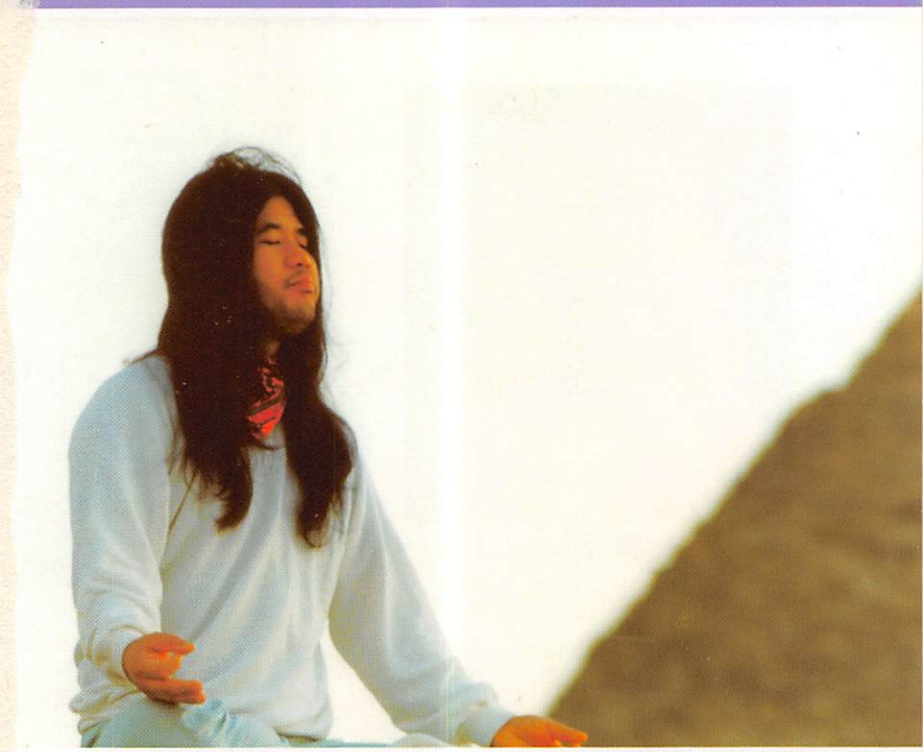


額の位置のヘビは何を語っているのか？

ヘビの巻きついた太陽が天高く昇ってゆく――まさにボアのイメージだ

SOLVING THE MYSTERIES

OF ANCIENT EGYPT



はじめに

ヨーガは、インド独特の宗教であるかのように一般的には思われている。しかし、史実を垣間みると、現インドが、インド・ヨーロッパ語族に属し、紀元前十五世紀にアーリア人が原住民を支配したことによって、インド宗教文明は大きな転機を迎えたということになっている。

このことから見てもわかるように、今のインド宗教文明というものは、インドの地からスタートしているのではないのである。

本書は、インド宗教文明の源がエジプトに起因するという大

胆な仮説を打ち立て、それを証明せんと試みた、意義ある一冊である。

四年前、わたしは、わたしを守護し導いてくださっているシヴァ大神の霊的示唆を受け、わけもわからないままにエジプトへと飛んだ。そこでわたしが見、そして感じ取ったものは、意外にもはるかインドのヨーガ文明に通じる秘儀と神秘の数々であり、また、そこで実に多くのものを得、後の活動に大きく生かしていくに至ったのである。

本書は、当時「エジプトの秘儀を解く」というタイトルで、オウム真理教の機関誌『マハーヤーナ』に数回に分けて連載した記事を、一冊にまとめたものである。

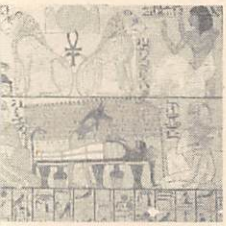
――すべての魂が覚醒へと至ることを願って――

一九九二年春

麻原彰晃

甦るクンダリニー・ヨーガ文明

古代エジプトの秘儀を解く



◆KUNDALINI CULTURE REVIVES◆

SHOKO ASAHARA SOLVES THE MYSTERIES OF ANCIENT EGYPT.

第一章 ピラミッド、それはアストラルへの入り口……12

◆シヴァ大神は示唆した——「エジプトへ飛べ！」
◆砂漠にそびえる古代の叡智
◆解けたピラミッドの謎
◆神秘の石はここにもあった！
◆身体を包むマントラの大音響
◆神々の黄昏——エジプトの栄光と衰亡
◆イムホテップ、それはわたしだった！
◆ピラミッド建造——集団ポアの場
◆大宇宙占星学が明かす設計の謎
◆ポア装置は救済の決め手だ！

第二章　古代エジプトの贈り物……42

◆幸福へと導く驚異のエネルギー

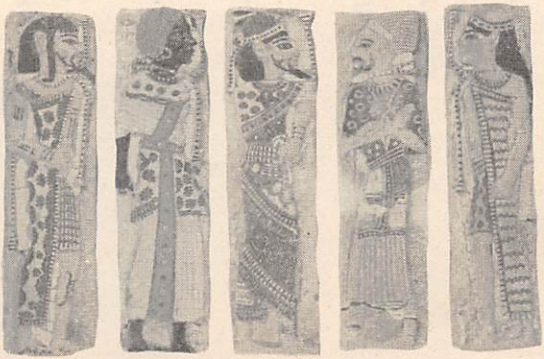
◆神秘のパワーはヒヒイロカネを超えた！

◆潜在意識をつかめ

◆顕在意識は悟りの障害

◆暴かれる潜在意識の煩悩

第三章　コプト教の秘儀……58
◆秘儀を伝える異端のキリスト教
◆リトリートがあった！
◆アストラル・ヨーガこそキリストの教え
◆コプト教チャクラ開発の秘儀
◆シャクティーパットがキリスト教を超える！



第四章　宿命通は時空を超えて……76

◆現代考古学が立証した、ピラミッド＝ポア装置説
◆解脱の証明――「神」としての崇拝
◆アストラルの〝永遠の家〟
◆アストラル・ボディは光を超えた！

第五章　ハトホル神殿にヨーガの源流を見た！……90

◆覆されたヨーガの歴史
◆あっ、ビバリータ・カラニーだ！
◆誕生殿のヒエログリフ
◆象形文字は何を訴えるのか

第六章　ハトホルの壁に刻まれた秘儀……108

◆ヒエログリフは語る
◆それは、三管の覚醒に始まった
◆修行の進歩——神々の世界へ
◆解脱への分岐点
◆古代エジプト人の高き霊性
◆ヴァイブレーションの世界へ
◆新たなる贈り物

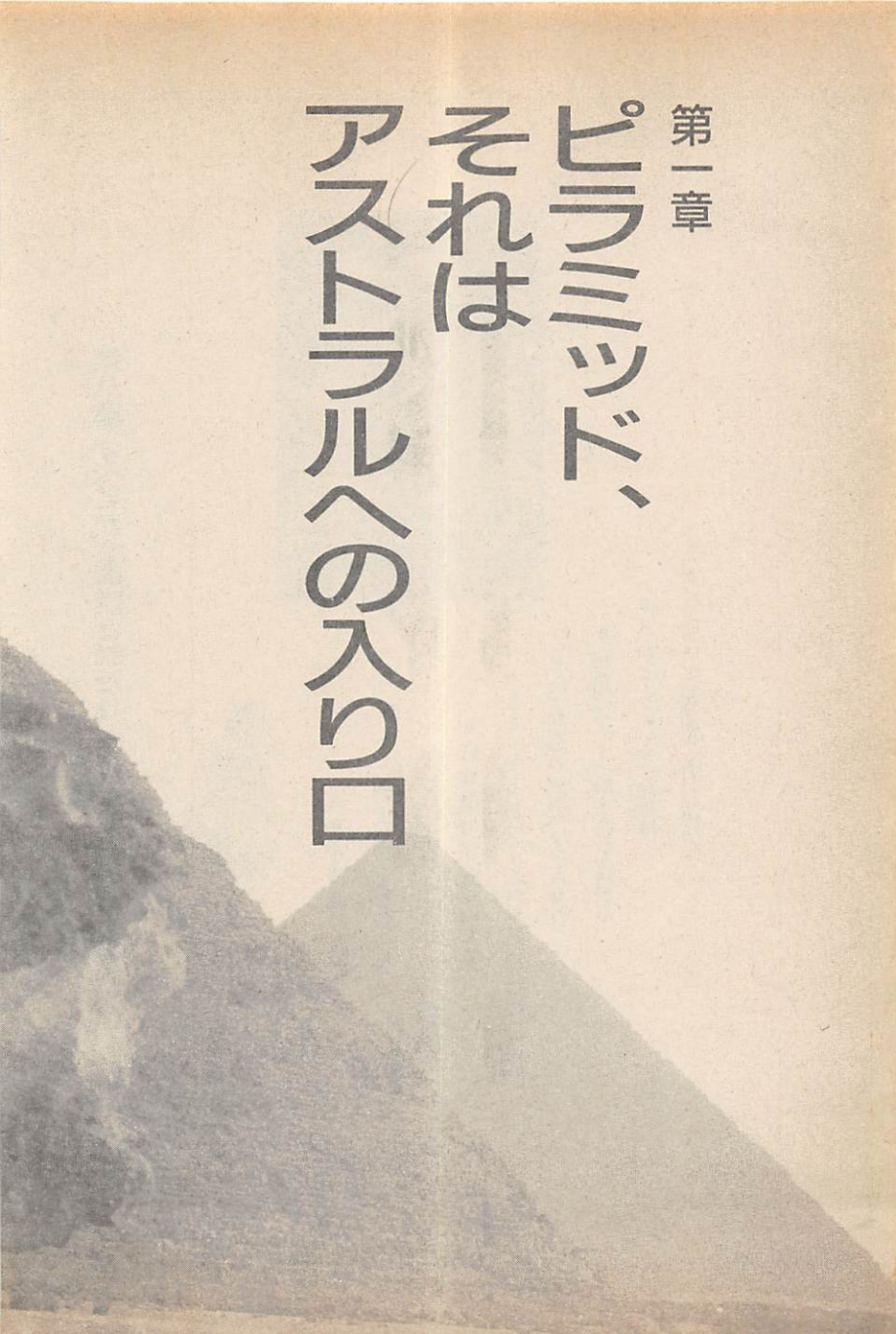
第七章　古代エジプト文明に潜むクンダリニー・ヨーガの秘密……134
◆結節を崩壊せよ
◆神々の声を聞け
◆守護神の妨害
◆思うがままの願望成就
◆魂の飛翔のとき
◆二つに一つ——仏陀か転輪王か
◆アストラルの危険な誘惑
◆最後の大難関

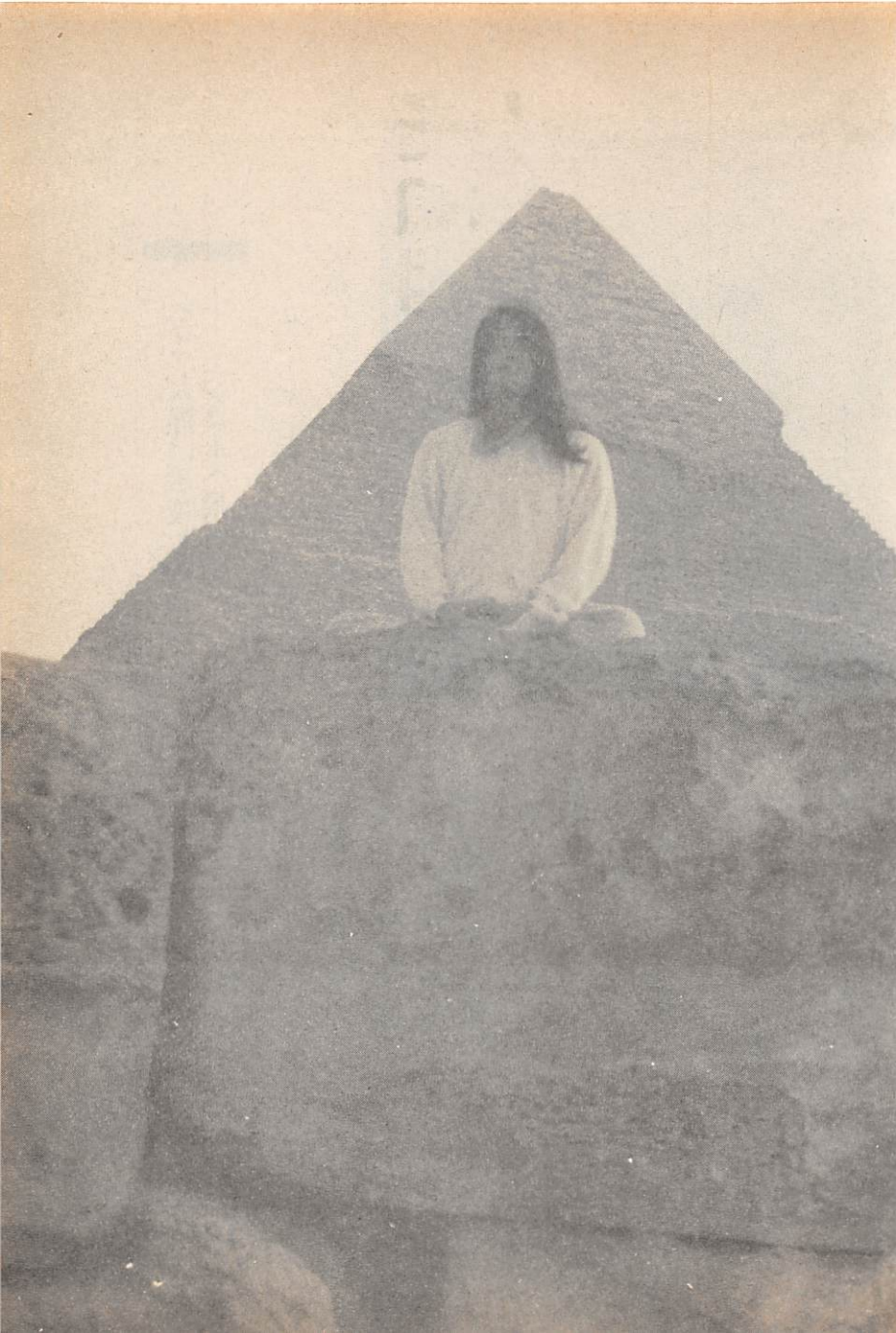
第八章 すべてが今解読された!! 古代エジプトからのメッセージ……160

◆守護神の嫉妬
◆大乗の修行の始まり
◆クンダリニー・ヨーガの成就
◆六神通の完成へ向けて
◆キリスト教と仏教の最終段階の違い
◆他心通の世界への入り口
◆宿命通——過去世を貫け
◆スポークが示す秘儀
◆すべてを見通す力を得て

第一章

ピラミッド、それはアストラルへの入り口

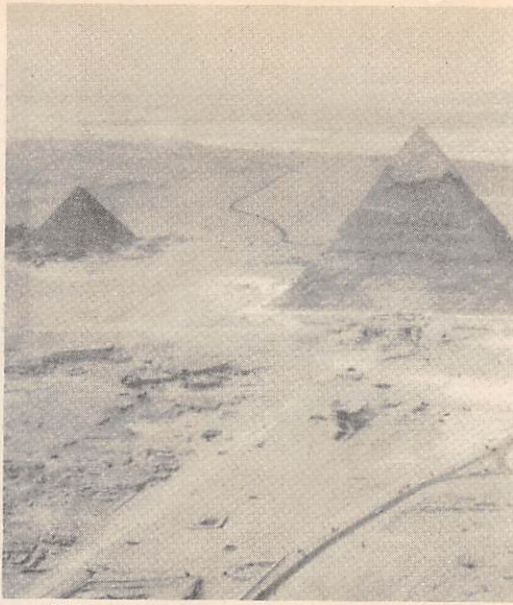




メンカウラー王のピラミッド

シヴァ大神は示唆した
――「エジプトへ飛べ！」

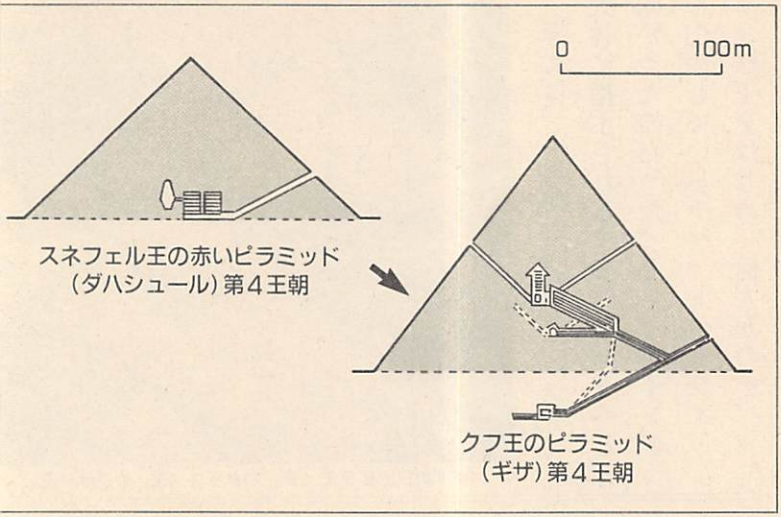
一九八七年七月、わたしはシヴァ大神にエジプトへと飛ぶよう指示された。なぜ今エジプトなのだろうか？わたしの修行はエジプトにはあまり縁がなさそうなのに、エジプトへ行けとは？　しかし、わたしのアストラル世界（異次元の一つ。ヴァイブレーション優位の世界）のグルであるシヴァ大神が意思されたからには、何かわけがあるに違いない。ひょっとしたら、今回もイニシエーション（秘技伝授）を得ることができるのだろうか？　わたしは運命を天に任せ、エジプトへと旅立った。二十九日のことである。



ギザの三大ピラミッド。右からクフ王、カフラー王、

思えば、半年前も同じようにシヴァ大神に指示されるままにインドへと向かったのだった。そして、インドに亡命しているチベットのダライ・ラマ法王をはじめ、何人かのチベット僧と語り合う機会を得たのだ。そのとき得た秘技伝授の方法や修行法は、わたしが法を説き指導している「オウム真理教」を飛躍的に進歩させたものである。特に、リトリートと呼ばれる個室修行を取り入れたことによって、弟子の中から多くの成就者が出た。もちろん、これで終わることなく、続々と成就者が誕生する予定である。

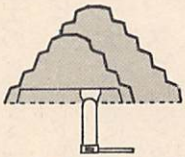
こんなに成就者が誕生することは、サキャ神賢（釈迦牟尼）の時代を除いて例のないことなのだ。これは、



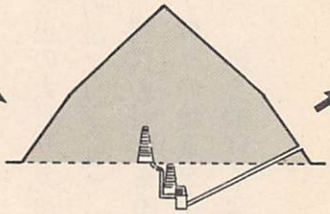
これから危機に直面しようとしている人類を救うべく、シヴァ大神が助けてくださっているからにほかならない。エジプトでシヴァ大神はわたしに何を知らせようとしているのだろうか？

砂漠にそびえる古代の叡智

エジプトの大地は、その九十パーセント以上が人間の居住を許さない砂漠である。砂漠と、ナイル川流域に限られた少ない緑が、不思議なコントラストを見せている。



ジェセル王の階段ピラミッド
（サッカラ）第3王朝



スネフェル王の屈折ピラミッド
（ダハシュール）第4王朝

ピラミッドの変遷

エジプト人の象徴ともいうべきピラミッドが点在するのは、ちょうど砂漠と緑の接点に当たる。一番古いピラミッドは、古王国時代・第三王朝のジェセル王の階段ピラミッドである。実に四千五百年以上もの、気の遠くなるような長い歳月、エジプトの変遷を見てきたということになるわけだ。

さて、最も有名なピラミッドといったら、なんといってもクフ王の大ピラミッドということになろう。クフ王の大ピラミッドは、エジプトの首

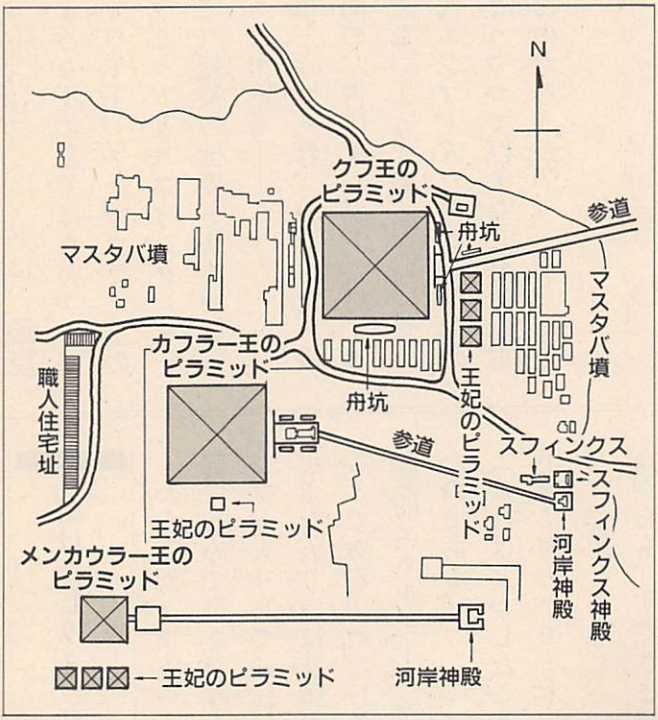
都であるカイロからほど近いギザという所にあり、すぐそばにあるカフラー王のピラミッド、メンカウラー王のピラミッドとともに第四王朝時代の三大ピラミッドとされている。なお、スフィンクスは、カフラー王のピラミッドの守護神と見られている。

しかし、クフ王の大ピラミッドは、いまだに多くの謎に包まれている。これらの謎は、現代の科学をもっても解明できず、数々の論議をかもし出しているのだ。例を挙げるならば、

・古代エジプト人がどのように巨大なピラミッドの石を切り出し、また、運んできたのか?
・本当にピラミッドは王墓だったのだろうか?
・どれくらいの年数をかけて造られたのだろうか?

といったような、初歩的なことすらはっきりわかっていないのである。

わたしが日本を発つわずか一週間前にも、早大ピラミッド調査隊の吉村助教授が新説を発表した。それは、今までの通説を覆すもので、次のような驚くべき内容であった。



ギザの三大ピラミッド配置図

――クフ王のピラミッドは、通説にあるような王の墓ではない。クフ王、カフラー王、メンカウラー王の三大ピラミッドとスフィンクスを一体として、死後の世界を立体的に再現したものである――

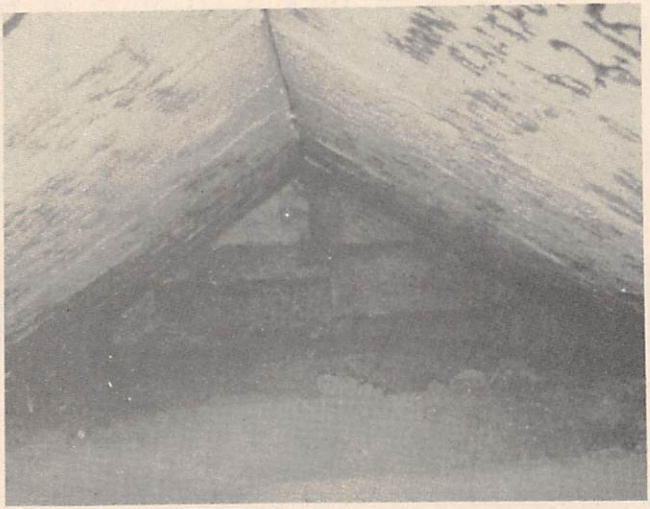
真相はどうであれ、わたしたち後世の人間の、古代エジプトに対する夢は尽きないようである。いったい、彼ら古代エジプト人たちは、何のために、どうやって巨大なピラミッドを造ったのだろうか？

解けたピラミッドの謎

わたしがクフ王の大ピラミッド内部に初めて足を踏み入れたのは、エジプト入りして三日目のことだった。小さな入り口に身体が入った途端のことである。わたしのクンダリニー（霊的エネルギー）が急激に上昇したのである。

（これはどうしたことだ？）

不意に何らかのエネルギーが、わたしに作用したらしい。わたしは驚きながらも、すぐさま精神統一をした。



大ピラミッド内の重力拡散の間の天井構造

そして、このピラミッドを形成している、約二三〇万個と推定される巨大な石灰岩の一つ一つに〝念力〟が込められていることに気づいたのだった。その念力は、石に強い上昇傾向のエネルギーを与えていた。数千年を経てなお衰えない念力のパワー。古代エジプトにどんな人が存在したのだろうか？

クンダリニーを上昇させる〝強い上昇傾向〟のエネルギーを持った石。この事実が、あるインスピレーションをわたしにもたらした。わたしは同行の村井君に声をかけた。彼は修

行者となる前は、ある鉄鋼メーカーの研究所で金属加工の研究をしていたという人であり、科学者としての立場からわたしによく有意義なアドバイスをしてくれていた。

「村井君、これはポアだよ。ピラミッドはポアのための特殊装置だったんだ。」

「はあ、ポアですか?」

彼はいつものポーカー・フェイスのまま、気のなさそうな返事をした。変なことを言い出した、とでも思ったのだろう。まあ、無理もあるまい。エジプトとヨーガの最終段階のポアは、普通だったらどう考えても結びつかないものだ。

ポアは、「意識を移し変えるヨーガ」ともいう。意識を肉体から抜け出させ、高い世界へと意識を移し変える技法である。高い世界とは、修行者のレベルによって違ってくるが、アストラル世界、およびさらに上のコーザル世界のことを指している。それらの世界で新しい身体（アストラル・ボディ、コーザル・ボディ）を持ち、活動することができるのだ。

このときの意識はずっと鮮明だ。

だから、もし、この世の肉体を捨てるときにポアを使ったとしたら、それはもう死とは呼べないものである。ゆえに、ヨーガ経典ではこれを〝死を克服する〟という言葉で言い表わしている。

神秘の石はここにもあった！

わたしはピラミッド内部の回廊を、奥にある王の玄室に向かって進んだ。急な細い回廊を上っていくと、天井が高く、ちょっと広さを感じる大回廊へと出る。大回廊をさらに上る。やはり急な斜面だ。これを上りきると「控えの間」があり、続いて「王の玄室」にと出たのだった。

王の玄室の大きさは、縦約十メートル、横約五メートル、高さは約五・八メートル。周りの壁がすべて花崗岩という、なかなか大きな部屋である。奥に花崗岩製の石棺がポツンと置かれていた。

石棺の斜め横には、大きな花崗岩の塊がある。なんでこんなところに……？　わたしは、その花崗岩が強い上昇エネルギーを出しているのが気になった。

村井君は、早速磁石を取り出して磁気を調べた。エネルギーの強い石は磁気を帯びているものだからである。オウムが修行に用いて効果を上げているヒヒイロカネの場合もその例に漏れず磁気を帯びているのだ。

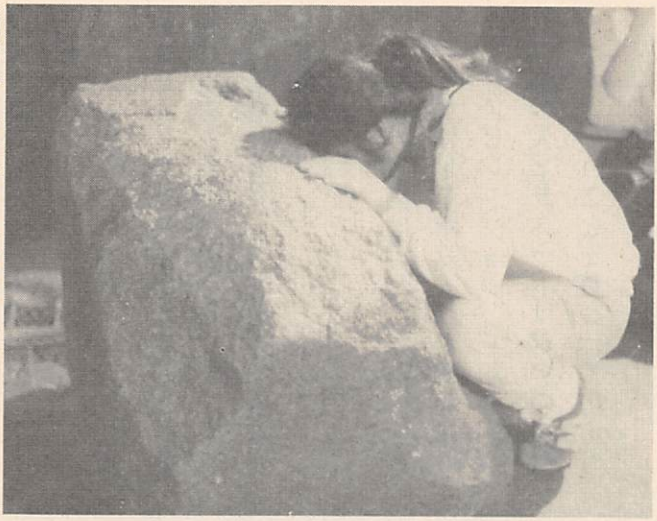
果たして、花崗岩にも磁気があった。村井君の磁石には実に九・三六度ものズレが出たのだった。

「この花崗岩は、ポアを助けるために使われたのに違いない。」

わたしは額のアージュニァー・チァクラ（チァクラとは身体にある霊的センターのこと。主なチァクラは七つある）の部位を花崗岩に当ててみた。その瞬間わたしのクンダリニーは、アージュニァーから頭頂のサハスラーラ・チァクラにスッと上がった。なお、石棺も弱いながら、同じく上昇傾向のエネルギーを感じることができた。どちらも、ナイル川上流のアスワン産と思われる赤っぽい花崗岩であった。

身体を包むマントラの大音響

次にわたしはマントラを唱え始めた。オウム真理教のグルヨーガのマ



花崗岩にアージュニァー・チャクラを当ててエネルギーを確認される尊師

ントラである。玄室内は音の反響がものすごく、わたしは自分自身がマントラの大音響に包まれてしまって、マントラと一体化したような感覚を覚えた。

実は、この玄室の天井には「重力拡散の間」というのがある。五個の大きな花崗岩が、空間を開けて重ねられた特殊構造で、上からの重圧を軽減するものとされている。しかし、わたしはこのマントラの響き具合を聞きながら、

（あの特殊構造は、重力を拡散させる目的で造られたのではない。音響

効果を高めるためのものだったんだ）と思った。

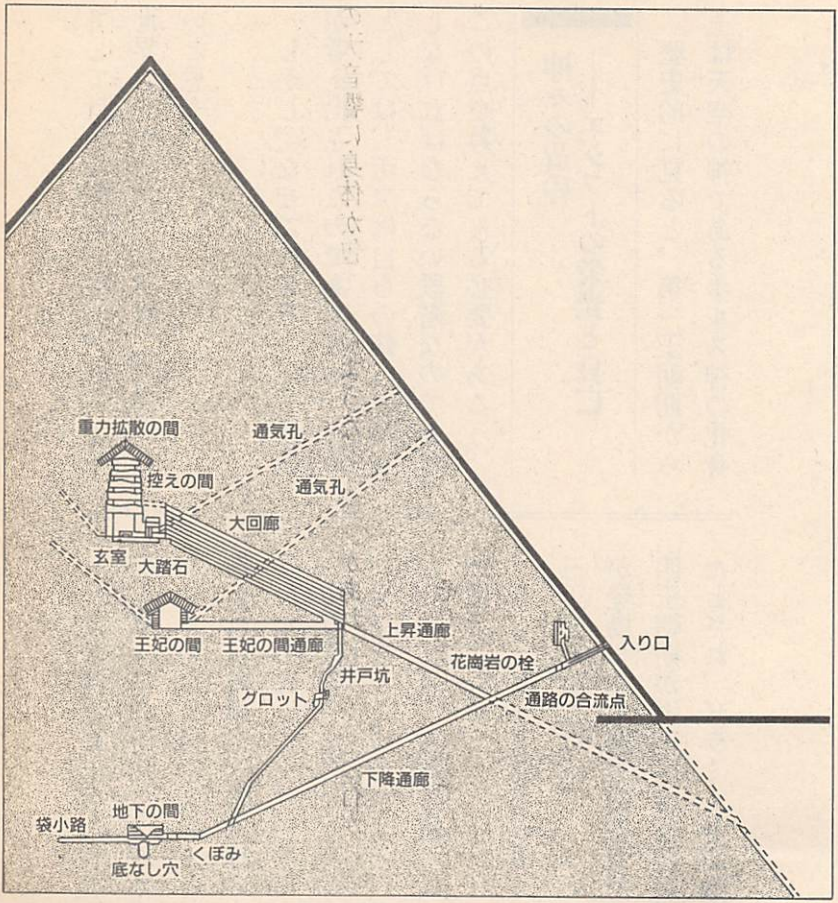
マントラは、クンダリニーを上昇させるために大変有効な手段である。特に王の玄室でのように、マントラの大音響に身体が包まれるようなら申し分ない。

これらの事実は、わたしがこのピラミッドに足を踏み入れた瞬間に得たインスピレーション、すなわち、クフ王の大ピラミッドはポアの装置だったということを裏づけているものではないか？

おそらく、こういうことだったのだろう。王は秘技会得者である神官から、ポアの秘技をこの玄室において伝授されたのだ。秘技の会得を助けたのがポア装置なのである。これがあれば、少々修行が遅れていても、ポアまで到達できそうである。

そして生前ここで秘技を会得した王は、死後この石棺に横たえられ、強い上昇エネルギーに支えられて、無事ポアに成功したのであろう。

ただ、このピラミッドのエネルギーは、中位アストラル世界に通じているようである。したがって、王がポ



クフ王のピラミッド内部見取り図

アして行った先は、中位アストラル世界の一つであったと見て間違いないと思う。

しかし、なぜこのようなポア装置が考え出されたのであろうか。正道としては、ポアは自らの修行で到達しなければならない段階なのである。この点を考えてみる必要があろう。

神々の黄昏
——エジプトの栄光と衰亡

歴史的に見ると、第一王朝期から王は天空の神であるホルス神の化身として崇拝されてきたのである。わたしは、この時代の王が本当に神であったのだと信じている。神、言い換えれば成就し、神同様の力を持っていたのだと——。わたしがそう言い切る根拠は、同じくエジプトで様々な発見をしたことによる。そのことについては、次章で詳しく述べたいと考えている。

さて、第一王朝から第二王朝、第三王朝と時代は下り、ついにクフ王が登場する第四王朝となる。この第四王朝期が古王国時代の絶頂期だったとされ、ピラミッド建造技術は最

主要なピラミッド

		王　名	地　名	一辺の長さ	高　さ	通称など
古王朝時代	第3王朝 (前2686頃 ～前2613頃)	ジェセル	サッカラ	140×118m	60m	階段ピラミッド
		セケムケト	サッカラ	120m	不明	埋もれたピラミッド
		カーバー	アル・アルヤーン	78.5m	不明	層状ピラミッド
	第4王朝 前2613頃 ～前2494頃	スネフェル(フニ)	メイドゥーム	145m	95m	いつわりのピラミッド
		スネフェル	ダハシュール	189m	101m	屈折ピラミッド
		スネフェル	ダハシュール	220m	約100m	赤いピラミッド
		クフ	ギザ	230m	146m	大ピラミッド
		ジェドフラー	アブ・ラワシュ	104.5m	45m	
		カフラー	ギザ	215m	144m	第2ピラミッド
		メンカウラー	ギザ	108m	67m	第3ピラミッド
		シェプセスカフ	サッカラ	100×72m	不明	マスタバ・ファラウン
	第5王朝 (前2494頃 ～前2345頃)	ウセルカフ	サッカラ	73.5m	49m	
		サフラー	アブ・シール	78.5m	51.5m	
		ネフェルイルカーラー	アブ・シール	106m	70m	
		ネウセルラー	アブ・シール	81m	51.5m	
		イセシ	サッカラ	78.5m	52.5m	
		ウナス	サッカラ	57.5m	43m	
	第6王朝 (前2345頃 ～前2181頃)	テティ	サッカラ	78.5m	52.5m	
		ペピ1世	サッカラ	78.5m	52.5m	
		メルエンラー	サッカラ	78.5m	52.5m	
		ペピ2世	サッカラ	78.5m	不明	
第一中間期	第7～10王朝 (前2181頃 ～前2040頃)	ネフェルカーラー	不明			
		イビ	サッカラ	31.5m	不明	
		イティ	不明			
		メリカーラー	サッカラ	約50m	不明	
中王朝時代	第11王朝 (前2133頃 ～前1991)	＊テーベ侯メンチュヘテプ2世が上下エジプトを再統一。首都はテーベ。 第1中間期以降、弱体化していた王権を復興。全エジプトの統治権を確立。				
	第12王朝 (前1991 ～前1786)	アメンエムハト1世	リシェト	78.5m	55m	
		センウセレト1世	リシェト	105m	61m	
		アメンエムハト2世	ダハシュール	50m	不明	白ピラミッド
		センウセレト2世	アル＝ラフーン	106m	48m	
		セウンセレト3世	ダハシュール	105m	78.5m	
		アメンエムハト3世	ハワラ	100m	58m	
		アメンエムハト3世	ダハシュール	105m	81.5m	
第二中間期	第13～17王朝 (前1786 ～前1567)	ケンジェル	サッカラ	52.5m	不明	

高水準に達している。

ところが、次の第五王朝になると、太陽神であるラーが最高神の座についた。王はもはや神ではなくなり、〝太陽神ラーの息子〟という地位に降格してしまう。それとともに、王の力も弱くなっていき、次の第六王朝は滅亡という運命をたどる。ここに古王朝時代は幕を閉じたのであった。

以上のような歴史の流れを見てみると、絶頂期だとされる第四王朝時代、すでに王の霊的ステージが下がり始めていたと考えても別におかしくはないだろう。神のレベルから落ちていく兆し、それが独力でポアできなくなっていた、ということだったのではなかろうか？　そして、ポ

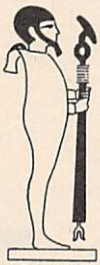
太陽神ラーのレリーフ

アをしても中位アストラル世界へ行ったにすぎない、ということになるのである。

なお、付け加えるならば、クフ王のピラミッドを秘技伝授の場と考えているのは、わたし一人ではないよ

ハトホル神

アメン神


プタハ神

オシリス神

ホルス神

ラー神（太陽神）

古代エジプトの神々

うだ。超常現象研究家であるマックス・トスは、ピラミッド時代への逆行催眠や超能力者から得たデータをもとに秘技伝授のストーリーを書いているが、他にも同じような説を唱える研究者がいるのだ。

イムホテップ、それはわたしだった！

しばらく経ってから、わたしはサッカラを訪れた。ここには、前にもふれたジェセル王の階段ピラミッドがある。エジプトにおける最古のピラミッドだ。

このピラミッドの前に立ったわたしは衝撃を受けた。わたしはこの六段の階段状のピラミッドに見覚えがある。いや、見覚えがあるどころじゃない。遠い遠い昔、わたしはこのピラミッドの設計をしたのだ。

ジェセル王の階段ピラミッド

わたしは修行によって成就する直前、宿命通という超能力を得た。これは自分の無数にある過去世を知る能力である。この超能力によって、わたしは自分がエジプトの宰相であったことを知ったのだ。もう四年も前のことである。このことは弟子たちにも話してあったので、知っている人は多いはずだ。

わたしの記憶はピラミッドを見て速やかに甦ってきた。ジェセル王の時代、わたしは宰相のイムホッテプ（当時の本当の発音はアインファテプだった）として王に仕えていたのだ。このときもわたしは秘技を会得し、成就していた。

わたしはジェセル王に修行の指導をし、王は徳をもって政治を行ない、神として崇拝されていた。だが、王は悩んでいた。

「死にたくない」とか「一人で死の世界に行くのはいやだ」とかわたしに何回となく言った。

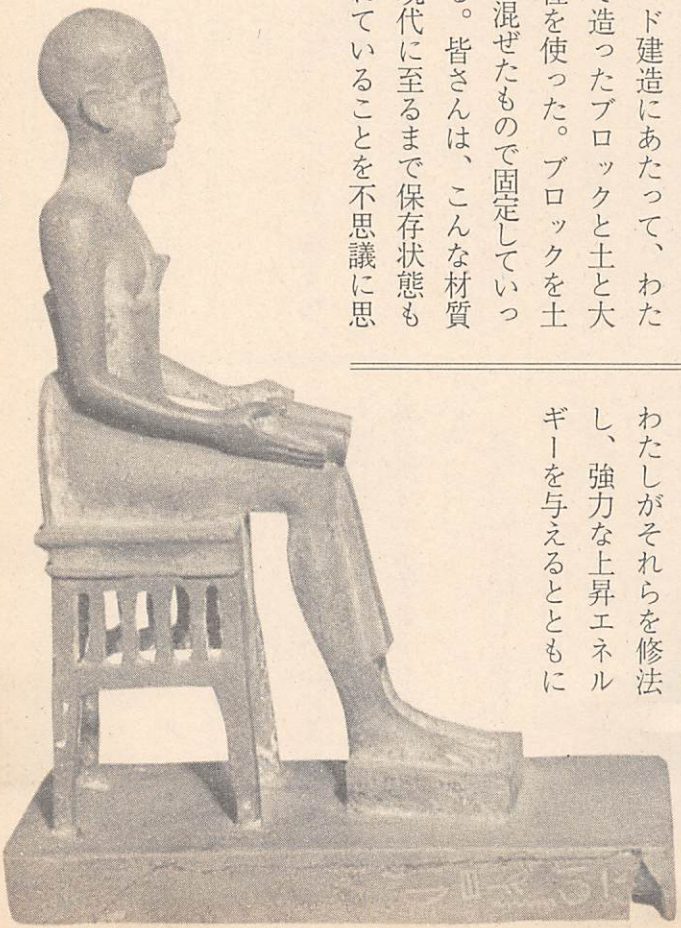
そこでわたしはまず王がポアの秘技を会得するための神殿を建てた。この神殿は今もピラミッドの東南に当時の名残を残している。ここは、現代の解釈では王の若返りの儀式であるセド祭を行なったらしいとされている。しかし、実際は少し違う。若返りというと、肉体的な若返りを思い浮かべてしまうだろうが、ここで王が行なったのは精神的な若返りの修行である。その最終目標はポアの会得であった。子供のように無垢の精神の延長線上にポアがあるのだ（チベット仏教でも〝童児の心〟の必要性を説いている）。

ピラミッド建造——集団ポアの場

一方わたしはピラミッドの建造にもとりかかった。王が死ぬときに、王妃や子供たち、そして高官たちを一緒にポアさせるためである。王と同時に肉体を捨て、高い世界へ行くというのは、王・追随者双方の希望だった。ちなみに追随者も神殿にお

いてポアの修行を行なっていた。

ピラミッド建造にあたって、わたしは粘土で造ったブロックと土と大理石の一種を使った。ブロックを土と大理石を混ぜたもので固定していったのである。皆さんは、こんな材質のものが現代に至るまで保存状態もよく残されていることを不思議に思うだろう。これは当時わたしがそれらを修法し、強力な上昇エネルギーを与えるとともに



イムホテップの像
多岐にわたる才能は古代エジプト人に尊敬され、工作の神として崇拝されるに至った

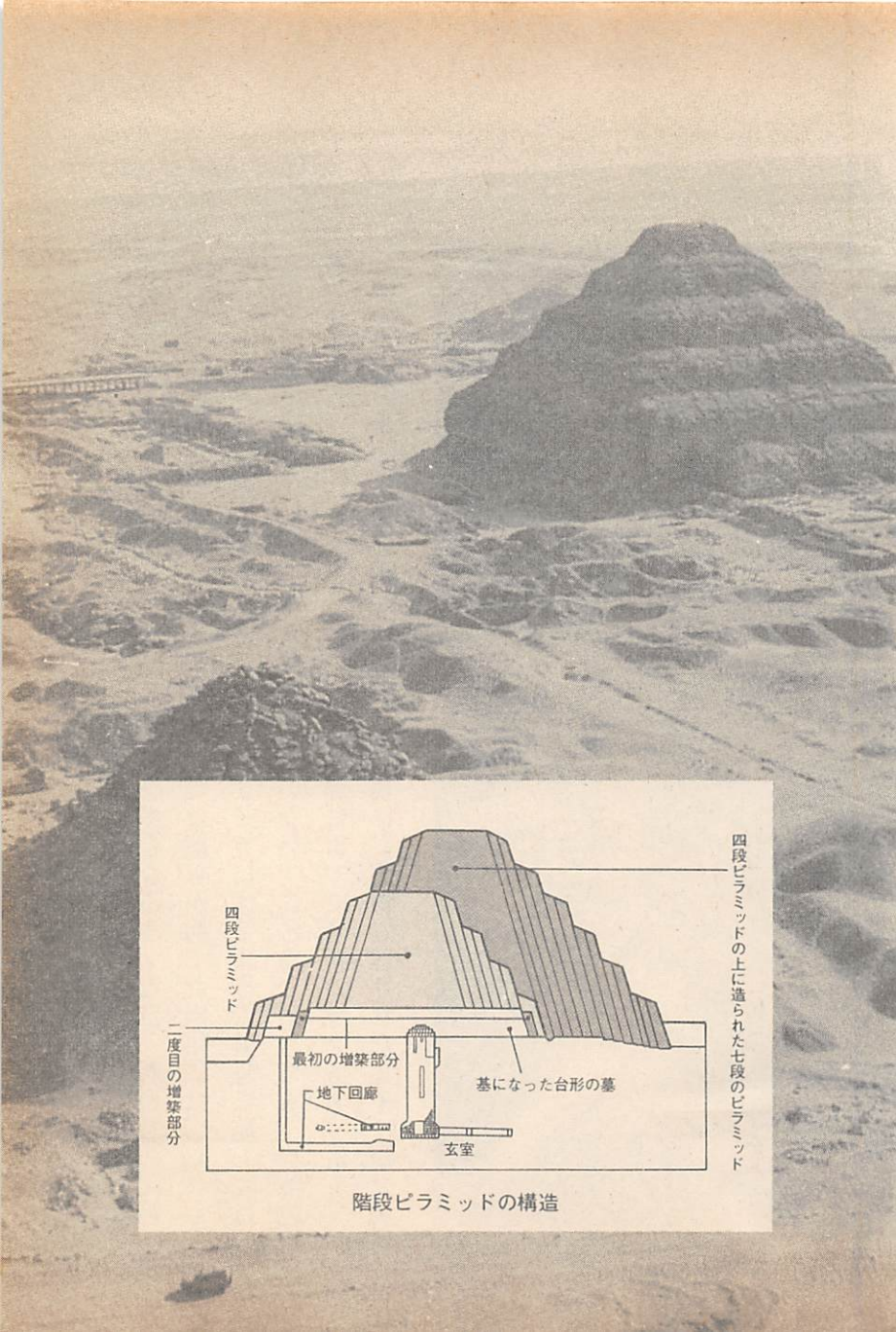
堅固にしたからなのである。この上昇のエネルギーについても述べておこう。このエネルギーはクフ王のピラミッドとは比べものにならないほど良質なものだった。

また、このピラミッドは、度々の設計変更が指摘されているが、これはエネルギーの状態を重視したためである。イムホッテプだったわたしにとって、ピラミッド建造は初めての経験だった。だからエネルギーをベストにするには設計変更もやむをえないことだったのである。

「玄室は地下にあるはず。南に入り口があるはず……。（南の入り口は高位の神霊を呼ぶためのものだ。）」

わたしの記憶は次々に甦ってきた。懐しさでいっぱいだった。わたしは村井君に、このピラミッドが、ジェセル王と近親者、部下の集団ポアのために造られたことを説明した。が、集団ポアを示すような資料がないという。

ところが帰国してから三週間ほど経った、つい昨日のことである。村井君から電話があった。J・P・ロエールの著書に興味深い記述があったのだと彼は言った。その内容とは



四段ピラミッドの上に造られた七段のピラミッド
四段ピラミッド
二度目の増築部分
最初の増築部分
地下回廊
基になった台形の墓
玄室

階段ピラミッドの構造

次のようなことであった。

「南側の回廊で三十体のミイラが発見された。これは中央の穴にあったものを、新王国時代に移したものと思われる。」

この事実が集団ポアを示す一つの証拠となろう。ただ、わたしの記憶では彼らが捨てた肉体には、だれもミイラにするような処理を施してはいない。ミイラといっても、自然乾燥によってできたミイラだと思う。現に、薬物処理されたミイラが登場

するのは、もう少し後の時代になってからだといわれている。

大宇宙占星学が明かす設計の謎

神殿が東南にありピラミッドが西北にあるというのは、大宇宙占星学の法則にのっとっている。大宇宙占星学とは、わたしが先ごろ発表したアストラル世界の運命学である。このことも、わたしの転生を裏づけるものとなろう。

参考までに書いておくと、東南は「意識を上昇させる」方角であり、西北は「王」「死後の世界」を意味している。北には葬祭殿を置いた。それは北が葬儀を意味するからである——ここまで書いて、わたしは重大なことを思い出した。

——わたしはピラミッドを中心として、周りにそれぞれの建造物を配置した。それは、それら全体で「宇宙」をこの世に表現するためだったのだ！——

ピラミッドなどを使って宇宙を再現したのはどうしてだろうか？

それはこういう理由なのである。この世にあるものは、すべてがこの世と同時にアストラル世界に存在している。例えばここに一冊の本があったとする。このときあなたのアストラル・ボディがアストラル世界へと行ったとしたら、そこでも同じ場所に同じ本があることに気づくのである。

——アストラル世界は、この世と同時に存在する異次元なのだ。この世に宇宙を再現しておけば、アストラル世界にポアした後に、その宇宙の法則にのっとった〝新人生〟を送れ

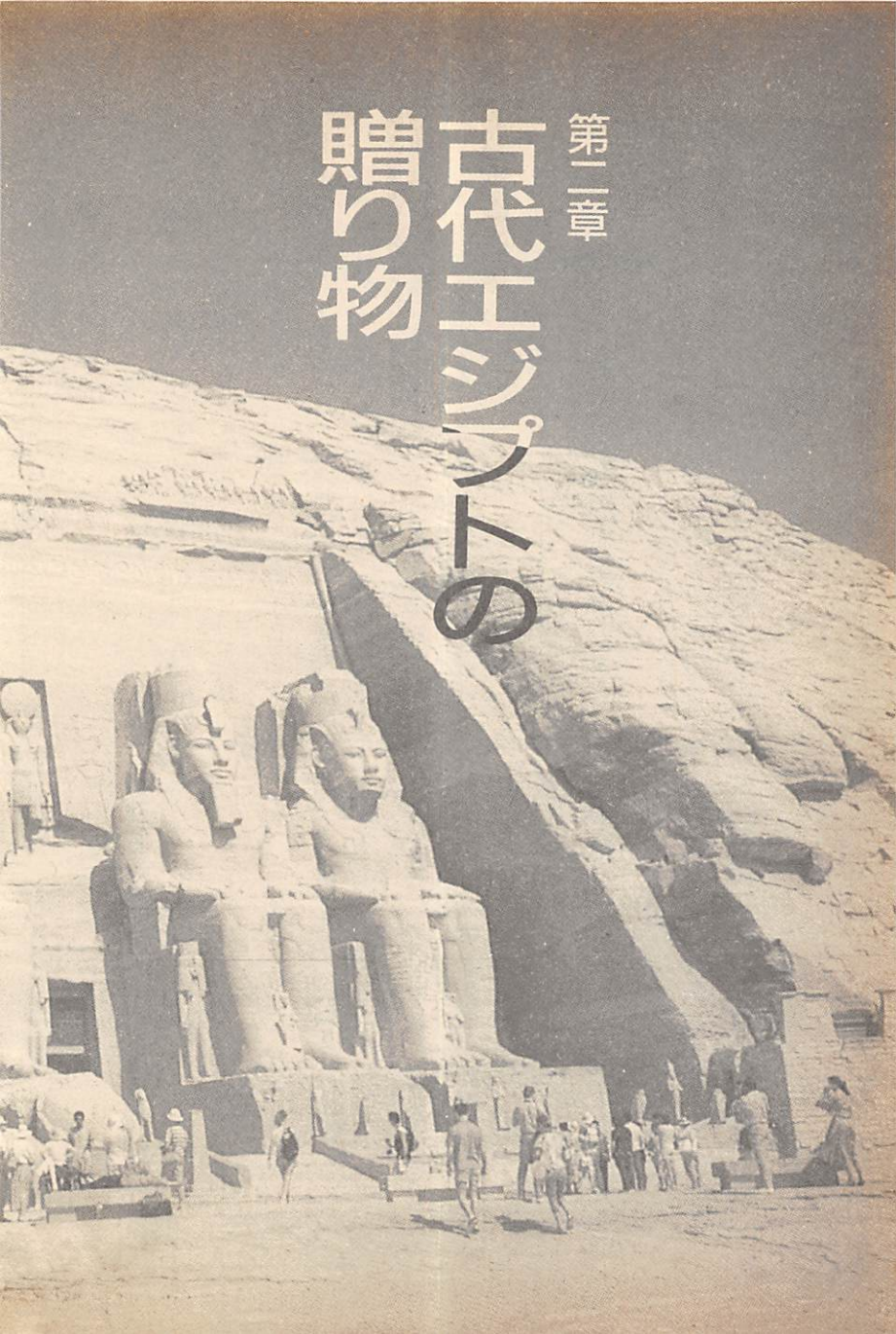
るのだ。なぜなら、これらがアストラル世界の家となるのだから。宇宙の法則にのっとった生き方（これは真理を知り、真理のままに生きるということ）は、幸福そのものなのである。わたしはポアした人たちのその後までを考えて、この構造にしたことになる。これこそ気配りの見本だといえよう。

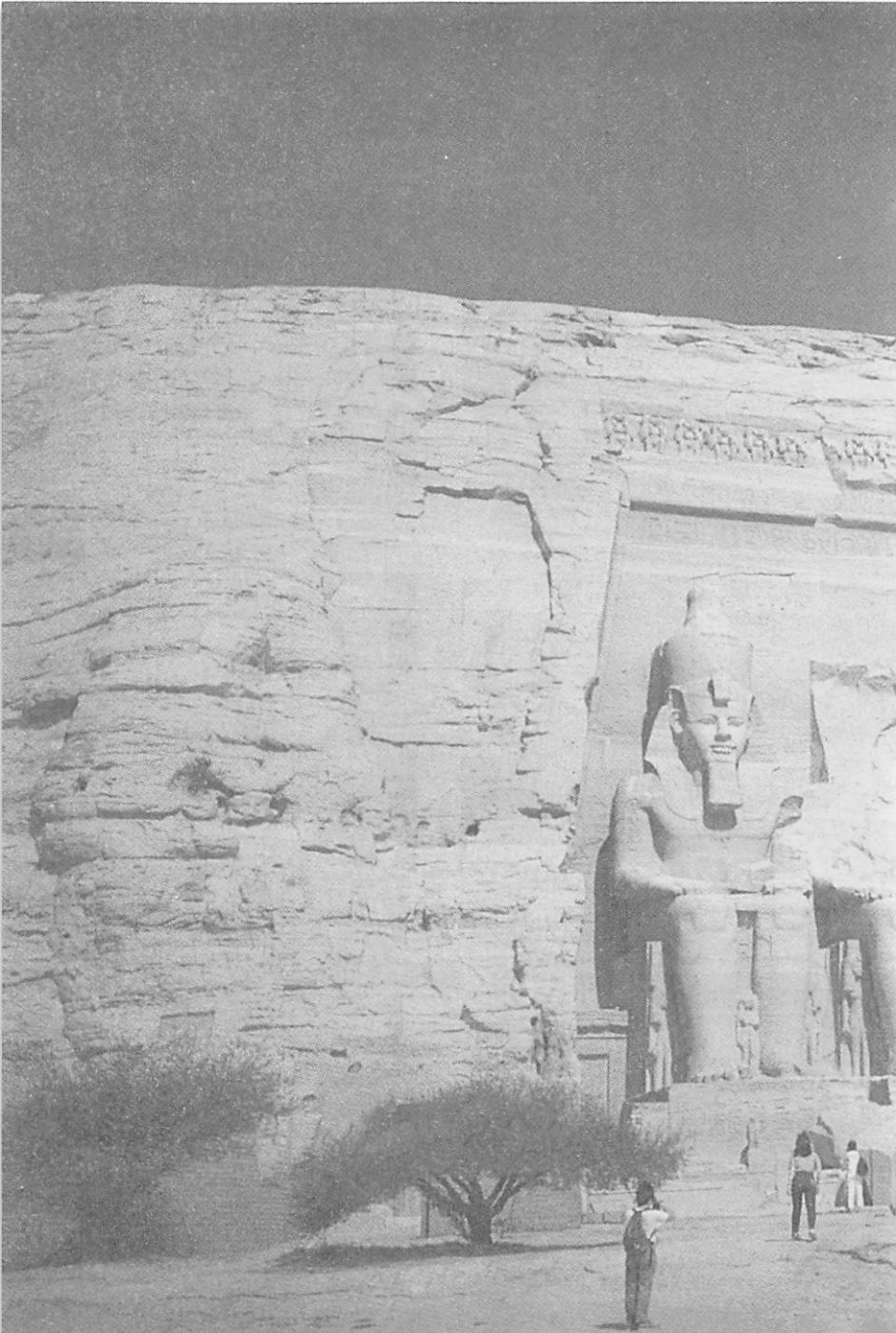
ポア装置は救済の決め手だ！

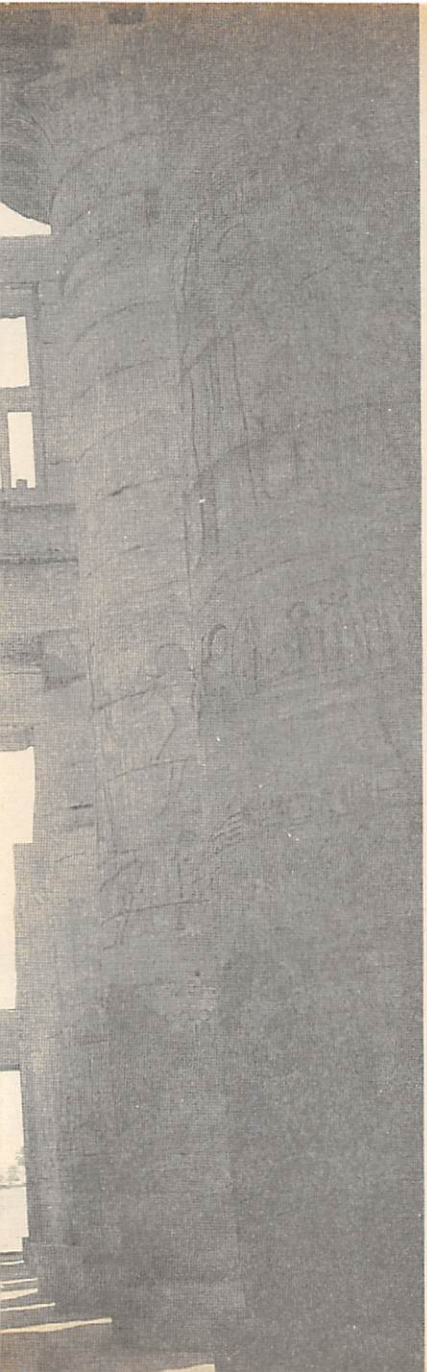
わたしがイムホッテプとしての生を終えた後、だれもイムホテップの真意を理解する者がいなかった。だから、どうしてこのような建造をしたかということは、すっかり忘れ去られてしまったのだろう。そしてわたしは何千年もの時をへだてて、この地に帰ってきたのである。

しかし、それはただ単にそのことに感動するためではなかろう。ポアの秘儀会得を物理的に助けるポア装置を日本にも導入しろという示唆なのではなかろうか？　確かに、日本にはこの種の装置はないのだから。この実現はこれからのオウム真理教の課題の一つになるに違いない。

第二章 古代エジプトの贈り物







幸福へと導く驚異のエネルギー

最近、オウム真理教の信徒の間で、何かと話題になっているのが〝プルシャ〟である。プルシャは、それを身につけるだけで、自分の潜在意識にアプローチすることができたり、生命エネルギーを強めたりできる素晴らしいものだ。

ほとんどの人は、プルシャを手にしただけで体が熱くなるという。これは、プルシャの神秘的なエネルギーによって、体内で自然にトゥモが起

こるためである。トゥモは、「熱のヨーガ」のプロセスである。熱のヨーガとは体内で熱を発生させ、それに伴って体温までも上昇させてしまうという段階である。だから、プルシャを手にした人が、体が熱くなると表現するのも、もっともなことである。

また、プルシャによって至福感に満たされるという声も多い。プルシャの持つヴァイブレーションが、心に直接働きかけて心を幸福に導くのだ。

なぜ、プルシャはこんな驚くようなパワーを持っているのだろうか？それをこれからお話ししよう。

アメン大神殿の列柱室

プルシャという名は、サンスクリット語のプルシャ（真我）からきている。それを持つ人の真我が、独存の状態に入れるように、という願いが込められている。

そもそもわたしが、このプルシャを作ろうと思い至ったのは、実はこのエジプト訪問がきっかけだった。前章でも書いたように、サッカラのジェセル王の階段ピラミッドの前に立ったわたしに、過去世の記憶が甦ったのだ。事の詳細については前章を読んでいただきたいが、階段ピラミッドは念力が込められたレンガで造られていた。そして、その念力によってピラミッドは清らかな上昇傾向のエネルギーを発していたのである。

このピラミッドが造られたのは、紀元前二六〇〇年ごろのこと。現代に至るまでに、ゆうに四五〇〇年以上もの、長い長い年月が経っているのだ。

にもかかわらず、念力から来る強いエネルギーは衰えていない。——この事実に、わたしは目が覚める思いだった。そして、念力を込められる〝何か〟を作り出すことができないだろうか、という考えに至ったの

だ。それを利用すれば、弟子や信徒の修行を飛躍的に進歩させることができるはずだ。

神秘のパワーはヒヒイロカネを超えた！

と、いうわけで、わたしは帰国してからプルシャを作るべく実験を始めた。目標は、

① 修行者が肌身離さず身につけることができること

② プルシャのパワーが、持つ人に大きな恩恵を与えること（例えば修行の進歩、幸福をもたらすことなど）

③ 壊れにくい材質であること

④ パワーを強めるために、わたし自身が修法して念力を込められること

⑤ しかもそのパワーがヒヒイロカネ（神秘的なエネルギーを持った石）以上で、ヒヒイロカネの欠点をも克服すること

以上のようなことである。

そして最終的には、粘土とある原素（この原素名は、オウム真理教外で悪用されないように秘密！）を混合することにした。そして、その材

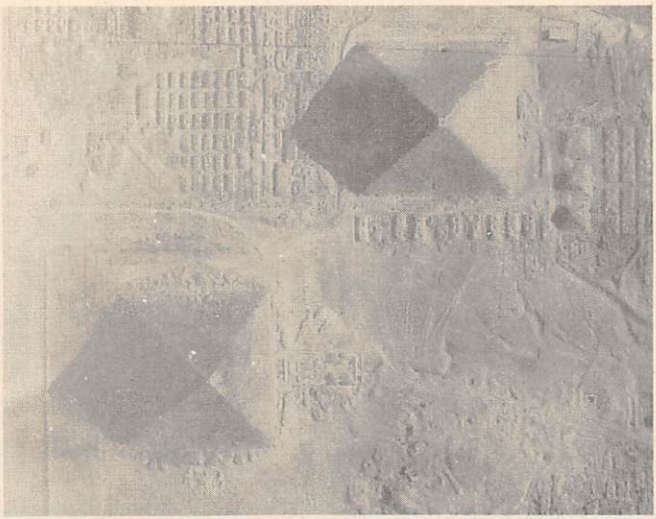
料に（これは水も含めるが）わたしが二日間かけて修法し、強力な念力を込めた。それから形成して焼き、完成となる。ちなみに、形成する前の材料は神秘のセラミック、ハーンと呼んでいる。

オウム真理教では、これまでにもヒヒイロカネという神秘石を修行の一助として利用してきた。ヒヒイロカネも念力によって、パワーを持つのである。

しかし、プルシャの場合は、ヒヒイロカネと違って小さい分子レベルで念力が加わるからであろうか、ヒヒイロカネとは比べものにならないほどの力を持っていたのだ。そのことはすぐに証明された。また、ヒヒイロカネは一カ月で力を失うが、プルシャに関しては、今のところそのような報告は寄せられていない。

潜在意識をつかめ

先に挙げた中に、潜在意識にアプローチするという効果があるが、わたしはこれが一番重要なことだと確信している。特に、悟りを望んでいる人にとっては——。なぜなら、悟



クフ王（上）、カフラー王（下）のピラミッドを俯瞰する

りを開くためには、潜在意識へのアプローチが不可欠であるからだ。

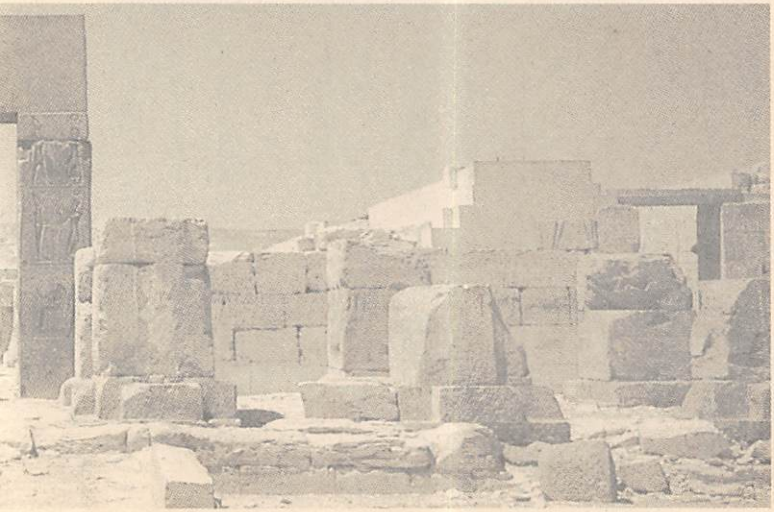
潜在意識へアプローチするというのは、どういうことなのか、少し触れておこう。

わたしたち人間は、潜在意識とそれを覆っている顕在意識という、二つの意識を持っている。普通わたしたちは顕在意識でいろいろなことを考えていると思っている。しかし、顕在意識を働かせているものは別にある。顕在意識を働かせるように指令を出しているもの——それが潜在意識なのだ。

ヨーガの修行では、瞑想することによって自分の潜在意識をつかむことを試みる。最初は、全くといっていいほど潜在意識に近づくことはできないが、最終的には顕在意識を崩壊させて潜在意識だけを使える状態を目指すのである。

その理由は、指令で動いている顕在意識をいくら操作しても無意味、指令を出している潜在意識に働きかけなくてはならないからである。

自分の潜在意識を知ることによってのみ、自分自身を把握できるのである。自分自身を把握できれば、自



分がどこで引っかかっているのか理解できる。ひいては、この無明の世界から抜け出し、ニルヴァーナへと入ることもできるようになるのだ。これが悟りのプロセスなのだ。

顕在意識は悟りの障害

文章にしてしまうと、潜在意識へアプローチするというのは簡単そうに感じてしまうのだが、実際はとても大変な作業だ。ほとんどの人は悪戦苦闘している。

わかりやすくするために、ごく低

次元の例を挙げてみる。ここに「今川焼」があったとしよう。甘い物に目がないA君は、目の前にある今川焼が食べたくてたまらない。本当は食べたくてたまらないのだが、「自分は修行者だ。今川焼などに心が動いていることを知ったら、グルや仲間は何と言うだろうか」ということが頭から離れない。そして、たとえ今川焼を勧められても、即座に「いいえ、欲しくありません」と言ってしまう。

この周囲の状況を考える働きは、顕在意識のものだ。反対に今川焼を欲求しているのは、潜在意識のものである。A君は、顕在意識が働いて「今川焼はいらない」と言った。ところが、この段階で潜在意識の欲求が消えたわけではない。心の奥底に残っているものだ。本人が気がつかないにしても。

だから、A君は、今川焼をいつ食べてもよい状態であって、しかもグルも仲間もいなかったら、平気で今川焼を食べてしまうだろう。潜在意識の欲求が残っているがゆえに——。

このように、顕在意識は潜在意識の働きをごまかしている。ごまかすだけで、根本的に潜在意識を変える

ことはできない。こんな顕在意識が、悟りの大きな障害となるのである。

今川焼を食べないようにしたかったら、第一に、自分の潜在意識を知ることだ。そして、もし今川焼を欲求しているのがわかったら潜在意識に直接アプローチして、その欲求を消すことを考えるのである。その方法としてはマハー・ムドラーやジュニアーナ・ヨーガがある。この修行によって、潜在意識の濁りのようなものを一つ一つ消していけばいい。最後に潜在意識が透明になったとき、意識はコーザル世界へと入り、ついには悟りを開くことができる。

暴かれる潜在意識の煩悩

このように、悟りの第一歩は潜在意識にアプローチすることだ。顕在意識を崩壊させることなのだ。

この点、プルシャを身につけた途端、その人の顕在意識が消えて、潜在意識が表面に出てくるので、何も知らない人はびっくりしてしまう。わたしは他人の潜在意識が手に取るようにわかっているので大丈夫なのだが……。

B君は、プルシャを持ってから五日後、わたしのところにやってきてこう言った。

「尊師、性欲が強くなって、我慢できません。限界です。どうしたらいいでしょうか？」

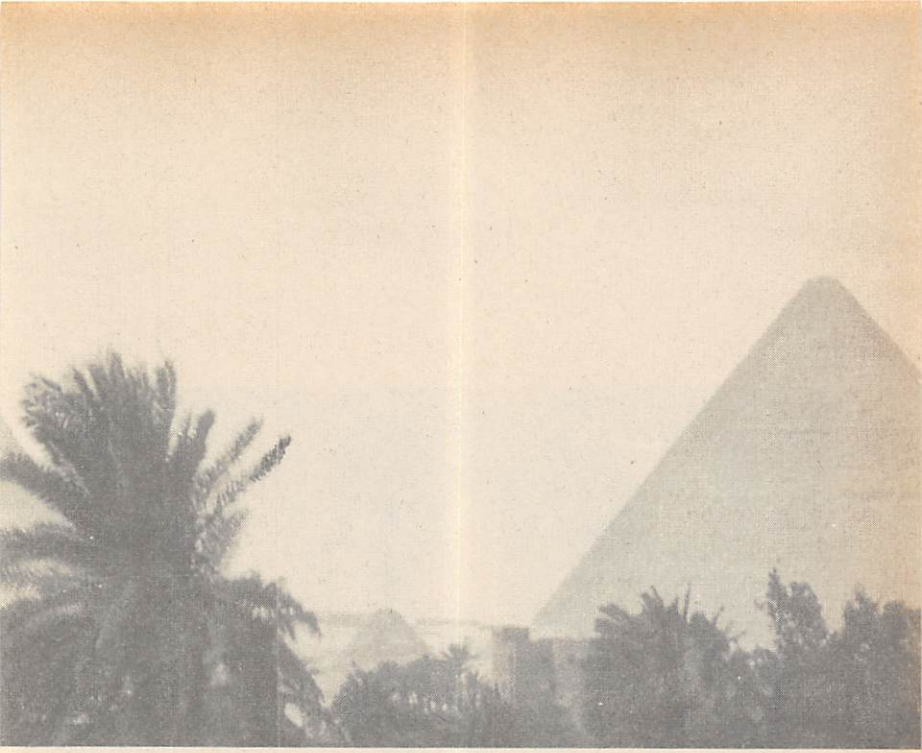
わたしは言った。

「それが君の潜在意識にある欲求なんだよ。今まで顕在意識が理性という形で邪魔をして、表面に出ていなかっただけなんだ。しばらく修行に専念しなさい。そして潜在意識のレベルで性欲を消してしまいなさい。」

今、彼は修行に打ち込んでいることだろう。自分の潜在意識を知った、ということは——もちろん、潜在意識全体とすれば氷山の一角にすぎないが——彼を大きく成長させることだろう。

C君の場合は、わたしの前でひた隠しにしていた名誉欲が突然出てきてしまった。本人は、今のところ自分の潜在意識が表面化したことに気づいていないらしい。他人から見ると精神分裂のような状態だ。しかし、わたしは彼がどうなるか黙って見守っておこうと思う。おそらく、精神的に堕ちるところまで堕ちて、そして

プルシャの材料ハーンに念力を込められる尊師



彼は新しく生まれ変わることだろう。このとき、彼は力を発揮できるようになっているだろう。

そうそう、こんなことも起こった。わたしの弟子の一人であるD君が、プルシャをもらったわずか二日後、黙って実家へと戻ってしまったのである。わたしの弟子であるからには、当然生活上厳しい制約がある。その制約に耐えられない、という気持ちが、プルシャによって一気に高まってしまったらしい。このことは、彼が電話で伝えてきたことである。わたしに言わせると、彼には性格的な

弱さがあるため、プルシャが今生での解脱が無理だということを彼に教えたのだ。

さて、これらの潜在意識へのアプローチの他に、幽体離脱をしたとか、アストラル世界を見たとか、疲れを感じなくなったとかいうプルシャの体験例が数多く寄せられている。わたしがエジプトで得たヒントは、日本で大きく開花したようである。

プルシャは、まだまだ未知の力を秘めているような気がする。これからも、使用者からどんな報告が届くか、楽しみである。

第三章 コプト教の秘儀

秘儀を伝える異端のキリスト教

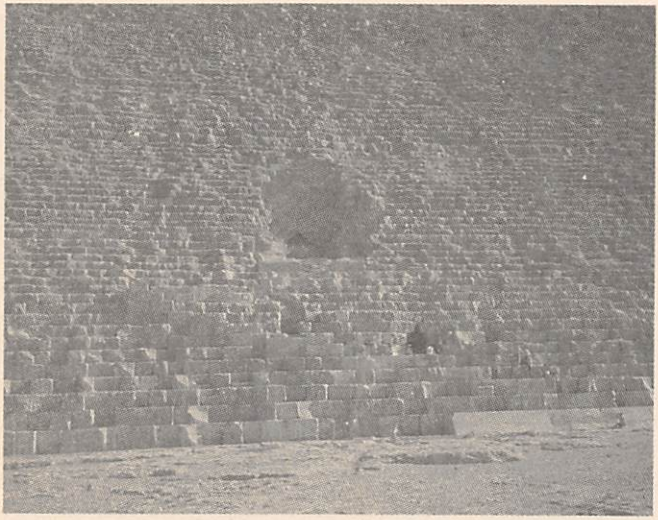
前章で述べたプルシャは、わたしがエジプトで得た秘儀の一つだといっていいだろう。エジプトで得た秘儀は、まだまだたくさんある。これから書こうと思っている「コプト教の秘儀」もその一つである。

コプト教は、原始キリスト教ともいわれているものだ。すぐ隣の国、イスラエルで興った初期のキリスト教は、コプト教としてエジプトへと入ったのである。

時期的には、古代エジプトの衰退後で、一時期は大きな勢力を持っていた。しかし、七世紀にイスラム教徒（アラビア人）が侵入、コプト教に取って変わった。

しかし、今でも一部にコプト教徒が残っている。コプト教徒は、エジプト南部、上エジプト地域に多いようである。

はっきりいって、このコプト教はキリスト教としては、異端である。四五一年以後、ビザンティン帝国教会から分離し、独自の発展を遂げてきたからである。しかし、このこと



クフ王の大ピラミッドの入り口

からわたしは、かえって本来のキリスト教の教義を伝えているのではないか、という気がしていた。

確かに現在、世界中にキリスト教は広まっている。しかし、このキリスト教では、魂の向上・霊性の向上に関する具体的な技法が欠如しているのだ。「信ずる者は救われる」では話にならない。自らが神に近づけなくてどこに宗教的な意味があるのだ、とわたしは言いたい。

残念ながら、仏教だってキリスト教と同じだ。というのは、後世になるにつれて次第にレベルが下がり、

形骸化してしまっているのだ。

しかし、サキャ神賢（釈迦牟尼）の入滅後、一番初めに編纂された『阿含経典』には、サキャ神賢の教えがよく残っている。わたしは、わたし自身が解脱した後、この経典がクンダリニー・ヨーガによる解脱のプロセスを示していることに気づいた。クンダリニー・ヨーガは、わたしが知り得る限りでは最高の解脱法である。それほど、初期と後期では教義に大きな差が出ているのだ。

したがって、わたしが現代のキリスト教よりも原始キリスト教であるコプト教の方に興味を持ったのも当然のなりゆきであった。

リトリートがあった！

わたしは、最初にアスワンにある、セント・シメオン修道院の遺跡を訪れた。ナイル河畔から、しばらくの間熱い砂漠の砂の上を歩いていく。コプト教の修道院としては、大きい方なのだそうだ。

修道院は高い周壁も内部の建物も、みな薄茶色のほこりっぽいレンガでできていた。十三世紀の終わりごろ

から、ここに住むコプト教徒は姿を消していったらしく、ここが廃墟になってから久しい。ところどころ建物は崩れているものの、リトリート（個室）がいくつもあるのが認められた。

リトリートがあった――、このことはわたしにある期待を抱かせた。それは、コプト教には個室修行があったのではないか、という期待である。

個室修行とは、ご存じの人も多いように、長期にわたって外界との接触を断ち、修行に明け暮れる修行方法である。最もきつい修行の一つで、それだけにそれに耐えて修行を続行できるなら、かなりの効果が期待できる。

オウム真理教でも、これまでに最終段階の個室修行によって三名の解脱者（八七年八月当時）が誕生しているのだが、このコプト教の修道院に個室があったという事実は、その個室を修行のために使ったのではないか、という可能性が残されるのである。そしてもし、個室修行があったとしたら、自らが修行して自らの霊性を高めるという、オウム真理教の修行体系に近いかもしれないのだ。

アストラル・ヨーガこそキリストの教え

このときからわたしが抱き続けていた疑問は、エドフという町で解けた。この町の岩山にある、古代エジプト末期の貴族の墓（ネクロポリス）へと足を運んだ折、すぐ近くにあったコプト教会の神父から話を聞くことができたのだ。

「あなた方コプト教の修道士は、リトリート修行用個室を持っていますか？　その個室とは、ただ修行するための場所です。そして、修行中外部との接触を断つのです。」

わたしは聞いた。神父は、

「はい、持っています。」

と、きっぱりと言った。そして続けた。

「わたしは、ここにきて五年になりますが、初めの二年間、わたしは個室修行をしました。」

「では、コプト教で最高のレベルにまで到達することのできた人には、どういう状態が訪れるのですか？」

「いつも神と共にあり、いつも神と話すことができるようになります。」

わたしには、この神父がそのレベ

ルからはほど遠いことが一目でわかった。しかし、この「いつも神と共にあり、いつも神と話すことができる」という状態は、オウム真理教の修行に代表される真の修行法でないと至ることができないものだ。となると、コプト教は真の修行法を持っていたとはいえないだろうか。現在それを実践できる人物がいるのかどうかは疑問であるのだが……。

ところで、「いつも神と共にあり……」というのは、神々がおられる上位アストラル世界に自由に出入りできるということである。オウム真理教の修行でいえば、そう高いレベルではないのだが、生半可な修行では到達できない。

これらのことを考え合わせると、コプト教は他の宗教に比べたら、正しい修行法を持っていた。しかし、その最終段階はアストラル世界に自由に出入りできるようになるまで、

ということができるのではないだろうか。

となると、オウム真理教の方が最終の解脱まで行くことのできるシステムを持っているので、優れているわけだ。

コプト教、チャクラ開発の秘儀

ただ、この神父の話から、わたしはわたしが今まで見過ごしていたことがあるのに気がついた。いうまでもなく、修行に関してのことである。

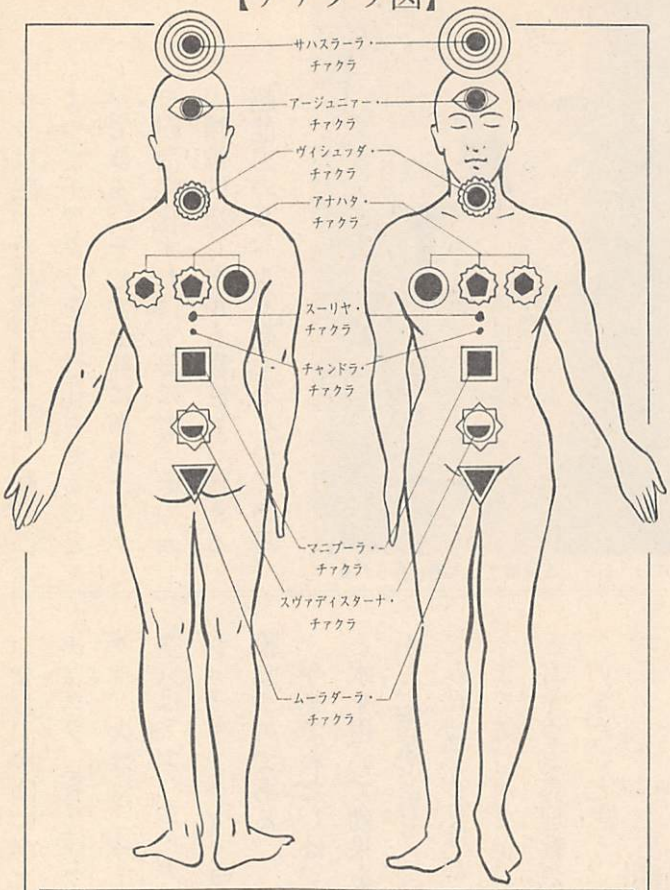
神父の言葉の中に、こういうものがあったのだ。

「昔のコプト教徒は、儀式にキャンドル、すなわち火と香りのエッセンス、そして賛美歌による音、息吹による空気、そして水を用いていました。」

なぜ昔のコプト教がこれらを用いていたのか、わたしにはすぐわかった。水・香・火・空気・音は、チャクラを開発するのである。しかもそれぞれ違ったチャクラを——。

チャクラとは、人間の体内にある霊的なセンターである。主なチャクラは七つあるのだが、普通の人のチャ

【チャクラ図】



—チャクラ—

チャクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。訓練によって開発されるのである。

また、チャクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

超能力もこのチャクラが司っているのだ。

クンダリニー・ヨーガを象徴する太陽が見られる

クラは眠った状態だ。しかし、修行によってチャクラを活性化させることができる。そして上部にあるチャクラが活性化すればするほど、その人の精神的なレベルも霊性も、使える超能力のレベルも高くなるのである。

なお、水はスヴァディスターナ・チャクラ、香りはムーラダーラ・チャクラ、火はマニプーラ・チャクラ、空気はアナハタ・チャクラ、音はヴィシュッダ・チャクラを開発するのに役立つのである。

今までわたしは、経験から音と火と水を用いて効果を上げてきた。しかし、空気と香りについては、言われてみれば「なるほど」と思うのだが、今まで気づかなかった。今後はぜひともオウム真理教の修行に取り入れていきたいと思う。これもわたしがエジプトで得た秘儀の一つとなろう。

ルクソール大神殿の彫像の台座に刻まれたレリーフ。

付け加えておくならば、コプト教の儀式で開発されるチャクラの中では、喉のヴィシュッダ・チャクラが最高である。ヴィシュッダ・チャクラが開発されたとき、「神の声」を聞くことができる。このことからも、コプト教での最高レベルが、ここまでであることがわかるのである。

シャクティーパットがキリストを超える！

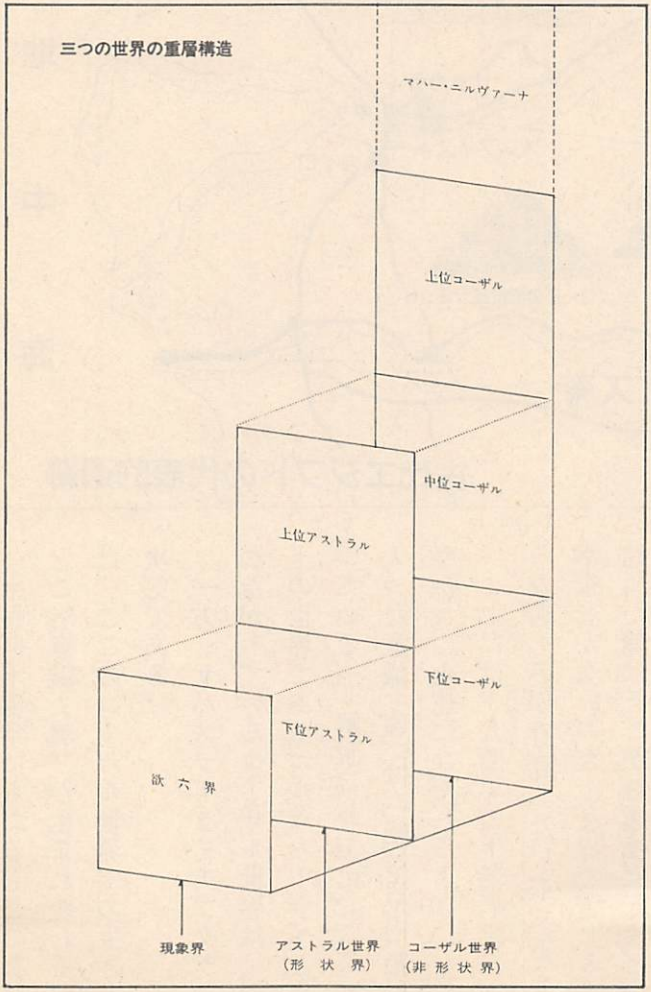
では、ヴィシュッダ・チャクラ以上、つまりアージュニャー・チャクラとサハスラーラ・チャクラを開発するにはどうしたらよいのだろうか？実は、この二つのチャクラを開発するには、水や香りのような物質は何の役にも立たないのだ。この二つのチャクラのためには、不断の修行による努力とグルのイニシエーション

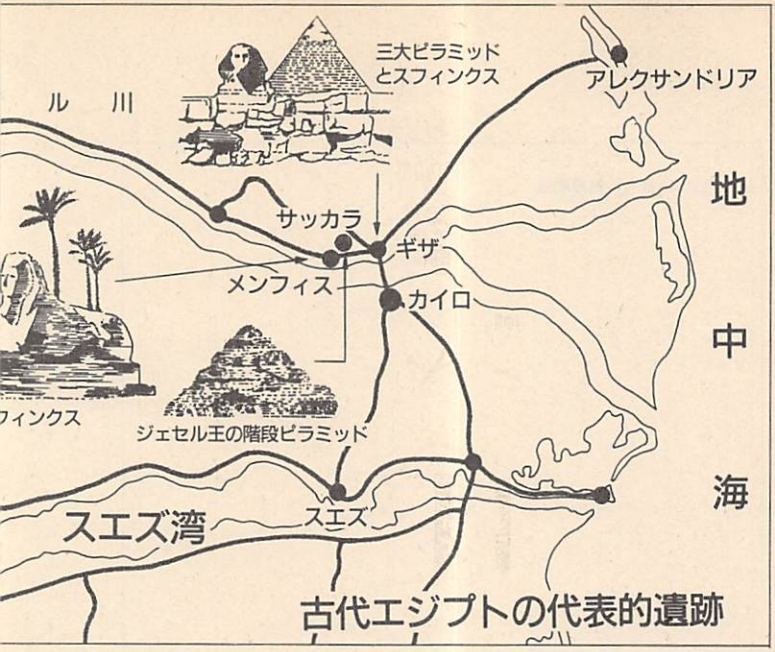
（秘儀伝授・エンパワーメント）があるのみ。特にシャクティーパットによるイニシエーションが不可欠となる。これがわたしがシャクティーパットを重視しているゆえんだ。

アージュニァー・チァクラとサハスラーラ・チァクラに話を絞ってみよう。

この世は粗雑な次元の物質で構成されている世界、アストラル世界は微細な物質で構成されている世界である。いうなれば〝有〟の世界だ。それに対して、コーザル世界は光によって構成されている〝空〟の世界である。アージュニァー・チァクラとサハスラーラ・チァクラは、このコーザル世界に通じているのである。もしこの二つのチァクラが開いて、このコーザル世界につながることができたならば、意識だけがこの世界を自由に動けるのである。

それは、死んで肉体から抜け出した後も全く変わらない。コーザル世界へそのまま飛び込める。わたしたちは意識となって、コーザル世界で自由な生活を楽しむことができるのである。なお、アージュニァー・チァクラとつながるコーザル世界では、

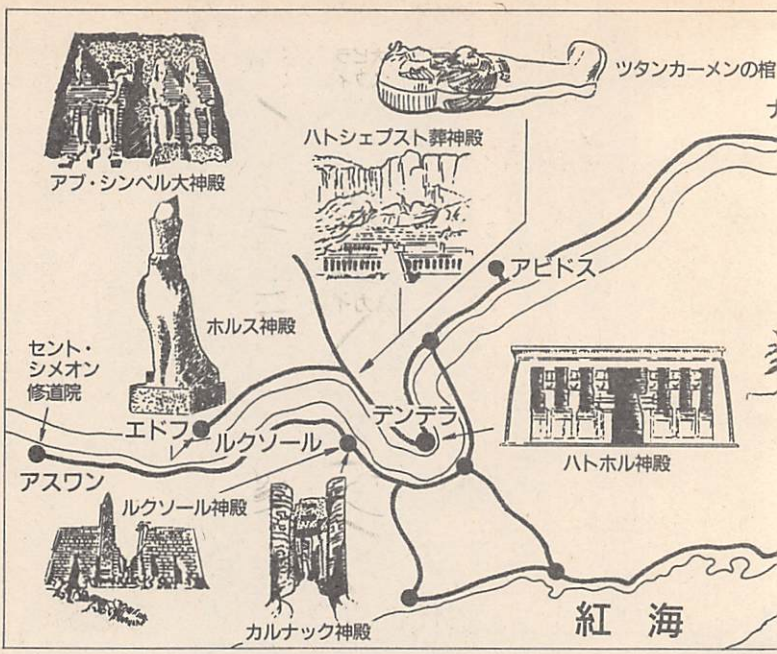

三つの世界の重層構造
マハー・ニルヴァーナ
上位コーザル
中位コーザル
上位アストラル
下位コーザル
下位アストラル
欲 六 界
現象界
アストラル世界
（形 状 界）
コーザル世界
（非 形 状 界）



一生が何十億年にもなる。この次にどこへ意識（魂）が生まれ変わるかは、ここのコーザル世界での生き方次第である。

一方、サハスラーラ・チャクラとつながっているコーザル世界は、至上の世界であるニルヴァーナへと続いている（＝解脱）。ゆえに、ここに入った意識（魂）は「絶対自由・絶対幸福」に永遠にひたれるようになる。

ここには、人間界の生老病死のような苦しみが存在しないのである。幸福しかないのだ。苦界で苦しみを知った魂はそこから抜け出そうと修



行の道へと入り、ニルヴァーナを目指す（詳しくは『生死を超える』・オウム出版刊　参照）。わたしは、すべての魂がニルヴァーナへと入ることを願っているのだ。それを助けるために、わたしは何回でも人間界に生まれ変わるつもりだ。そして、一番最後の魂がニルヴァーナへと入るのを見届けたとき、わたしはわたしの意識をニルヴァーナへと移そう。

※　ニルヴァーナはステージに応じてさらに世界が分かれている。その最高の世界をマハー・ボーディ・ニルヴァーナと呼んでいる。

第四章 宿命通は時空を超えて

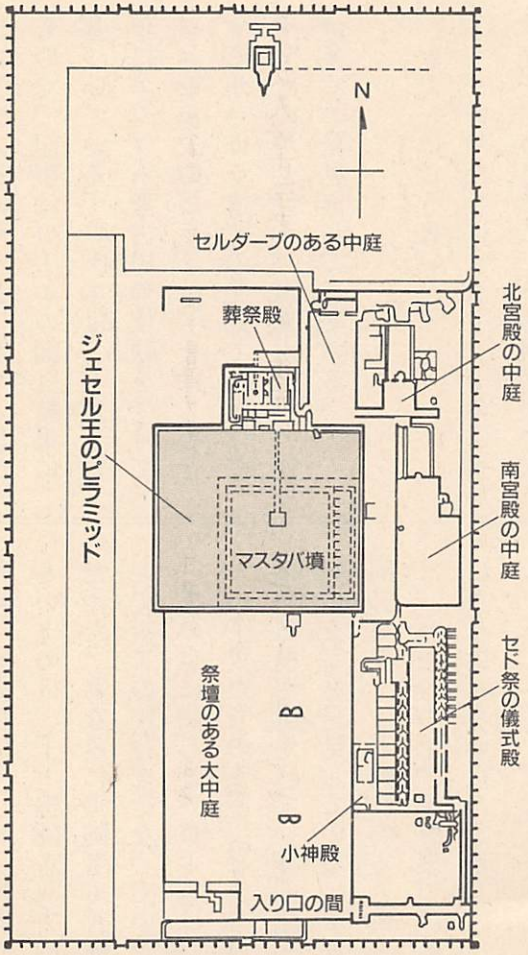
現代考古学が立証した、ピラミッド＝ポア装置説

『クォーク』という科学雑誌の十二月号に、「新発見！　ジェセル王の『黄泉の迷宮』」と題された記事が載っていた。一九二六年以来六十年間フランス人考古学者が発掘、復元に取り組んできた成果を初めて公開する、と書かれている。

わたしも、前にジェセル王のこのピラミッドについての一文を書いていたので、『クォーク』の記事を興味深く読んだのだった。

一番の関心事は、なんといっても、わたしが書いたこととどれだけ一致しているかということだ。なぜなら、わたしの場合、わたし自身が遠い過去に生きていた時のことを思い出して書いたからである。エジプト古王国時代第三王朝時代ジェセル王に仕えていたイムホテップだったころのことだ。要するに、それは修行によって得た超能力の一つである宿命通によって思い出した過去の記憶だったわけで、考古学上の証明の仕方とはかけ離れているのである。

一方、『クォーク』の記事は、ジャ



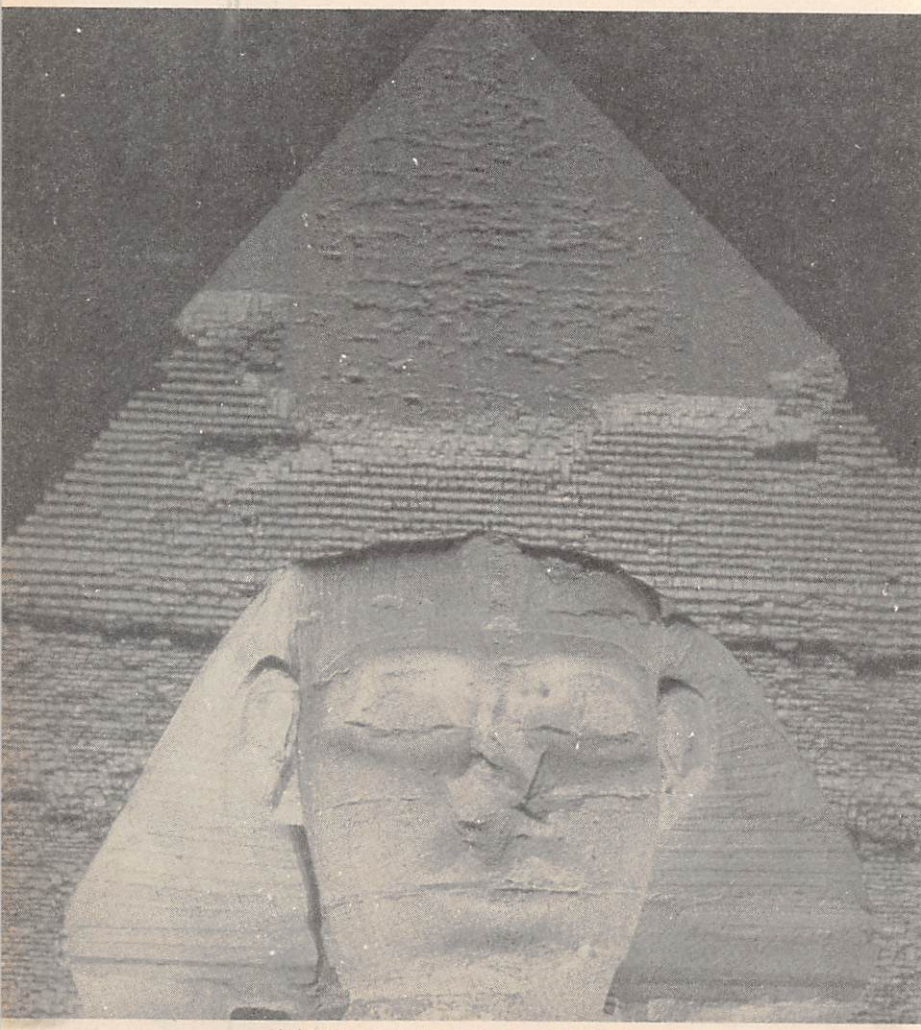
ジェセル王のピラミッド

ン・フィリップ・ローエの活動をフランドランという人がリポートしたもので、記事はローエの調査結果に基づいている。ローエは、一九二六年にエジプト考古局の依頼を受けて、ジェセル王のピラミッドをはじめとするサッカラ遺跡の発掘と復元に着手したのだという。以来六十年、彼は多くの発見をしてきている。

わたしはこう書いた。

――一方わたしはピラミッドの建造にもとりかかった。王が死ぬときに、王妃や子供たち、そして高官たちを一緒にポアさせるためである。王と同時に肉体を捨て、高い世界へ行くというのは、王・追随者双方の希望だった。ちなみに追随者も神殿においてポアの修行を行なっていた――

この点に関して、ローエはジェセルの子供たちの玄室（ピラミッド内にある柩が置かれている部屋）と王妃の玄室を発見している。これらが、同じピラミッド内にあるということは、わたしのポア説を裏づけることになりはしないだろうか。



ギザの大スフィンクスとカフラー王のピラミッド

解脱の証明
――「神」としての崇拝

イムホテップ、つまり当時のわたしが、現世でのわたし同様に解脱者であったことを示す資料もある。ローエの言葉を引用しよう。

「イムホテップが神と崇められていたのをご存じですかな？　彼は医術書のようなものまで書いていましてね。それを読んだギリシャ人たちが、彼を医術の神アスクレピオンになぞらえたのです。もっともわたしが一九二六年に、ジェセル王の台座にイムホテップの名を見たとき、その肩書はこう刻まれていました。『下エジプトの大臣、王宮管理人、名門貴族、ヘリオポリスの大神官、建築家、石器彫刻家』。いやはやすごいものですな。」

解脱者は、神のような力を持っている。イムホテップも神と崇められていたとしたら、わたしが書いたとおり、「秘儀を会得し、成就していた」というのが真実であったことがわかるだろう。

もう一つ、今のわたしにそっくりなのは「何でも屋」であるということだ。しかも「何でも屋」でありながら、器用貧乏とはならず、それぞれの分野でスペシャリストになっているのだ。

わたしが何をやっているのか、と改めて聞かれても困るけれど、読者の皆さんの目につくだけでも「文章」「宗教」「ヨーガ」「音楽」「大宇宙占星学」……等挙げられるだろう。でもこれはほんの一例で、実際にはほとんどの分野に首を突っ込んでいるのである。（これは、オウム真理教

のサマナになって、わたしのそばで修行生活をしたらわかります。ぜひ、来てください。〉

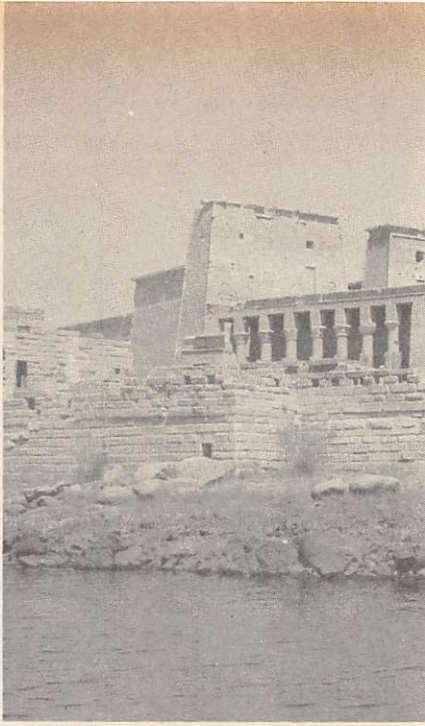
なお、イムホテップ時代のわたしも、今のわたしも解脱していたから、このような力を発揮できるのである。あなたも、もしこのような「何でも屋」になり得る能力が欲しかったら、解脱することだ。功徳を積み、修行を真剣に行なえば、必ず解脱できるのである。

アストラルの〝永遠の家〟

〈第一章のわたしの言葉より〉

ピラミッドなどを使って宇宙を再現したのはどうしてだろうか？

それはこういう理由なのである。この世にあるものは、すべてがこの世と同時にアストラル世界に存在している。例えばここに一冊の本があっ



イシス神殿

たとする。このときあなたのアストラル・ボディがアストラル世界へと行ったら、そこでも同じ場所に同じ本があることに気づくのである。

――アストラル世界は、この世と同時に存在する異次元なのだ。この世に宇宙を再現しておけば、アストラル世界にポアした後に、その宇宙の法則にのっとった新人生を送れるのだ。なぜなら、これらがアストラル世界の家となるのだから。（中略）これこそ気配りの見本だといえよう。

以上は、イムホテップだったわたしが、どうしてピラミッドとそれに付随する建物をああいう配置で造ったのかという理由である。

ローエの研究では次のようになるそうだ。

「王が死んだ後も、その生前同様に王のカー（生命の力の本質とでもい

うべき精霊）に食事を供し、手厚く世話をしてあの世で楽しく暮らせるよう、何かと面倒をみてあげなくてはならないわけだ。王の墓に納められる財宝も、つまりはそのための供物だった。

周壁で囲われた墓所の中には〝南の家〟〝北の家〟（エジプト人にとって墓はまさに永遠の〝家〟であった）と呼ぶ建物や葬祭殿が築かれた。」

なんと似通った記述であろうか！もちろん使っている言葉は違っている。が、その心は見事なくらい一致しているではないか。

わたしは言った。

「ピラミッドはアストラル世界の家となるのだから」

それに対して、

「エジプト人にとってピラミッドはまさに永遠の家であった」

というのである。

これによって、解脱者の宿命通の確かさを理解していただけたと思う。人間に過去世があるということも、またそれを詳細に思い出すということも、決して絵空事ではないのだ。

ルクソール神殿正面　ラムセス2世の彫像とオベリスクが偉容を誇っている

アストラル・ボディは光を超えた！

ところで、せっかくの機会だから、この宿命通という超能力についてお話ししておこう。

わたしが初めて宿命通を獲得したときは、次のようなプロセスをたどった。

あの日もわたしは瞑想をしていた。瞑想は深く深くなってゆき、三昧の状態が訪れた。すると、わたしのアストラル・ボディが肉体を抜け出した。

肉体を抜け出したアストラル・ボディは、まばゆいばかりの光の方向へと飛んでいった。そこには光源がある。どうも、アストラル・ボディは光源へと引き寄せられているようなのだ。

光源が間近に迫った。それでもアストラル・ボディはそのまま飛び続ける。

――そして、とうとう光源を突き抜けて、光源の裏に出たのだ。その瞬間だった。わたしが宿命通を得たのは！

それから、一定のテンポでリズムが聞こえてきた。同時に、眼前に映画のコマ送りのように、ヴィジョンが見え始めた。かなり速いテンポだ。

そのヴィジョンは、わたしの過去世の一つの情景であった。過去世のわたしもヴィジョンの中に見いだせた。そのときは、その過去世でのわたしが、どんな人間だったか、どんな仕事をし、どんな生活をしていたのか、はっきりわかるのである。熟知している。すでに宿命通がついているので、ヴィジョンを見たときに、それに気づくのだ。

以後、わたしが過去世を思い出すときは、いつも一定のテンポのリズムが聞こえるところから始まる。いずれも三昧に入ったときである。そして、回数を重ねるにしたがって、わたしはいくつもの過去を思い出していっているというわけなのである。

イムホテップのころの過去世も、わたしがこのようにして思い出したうちの一つだった。

なお、わたしだけでなく、今ではオウム真理教の数多い解脱者が、この宿命通を得ているということもつけ加えておくことにしよう。

第五章

ハトホル神殿にヨーガの源流を見た！

覆されたヨーガの歴史

カイロからナイル川に沿って六〇〇キロほど南下したところに、デンデラの遺跡がある。ここには、ハトホル神殿と呼ばれるプトレマイオス朝末期の神殿が、保存状態もよく残されている。そして、その神殿は、もっと古い時代のものを再建したのだということが、地下室にある碑文からわかっているのだという（『古代エジプトの神々の象徴』という本によると、古王国時代からハトホル女神がここで祭られていたそうである）。

わたしが初めてここを訪れたのは、ルクソールからカイロへの帰途で、砂漠地帯の過酷な一日が暮れようとする間際であった。午後五時半、閉門されるわずかに三十分前だ。

時間がなくても、また薄暗くなってきていても、わたしはどうしてもハトホル神殿を見ておきたかった。それは、ここに天体図のレリーフがあったからである（もっとも、ここの天体図の本物は海外流出、今は複製品がはめ込まれているのであるが）。

アメン大神殿の閉花式パピルス柱の前に立つ彫像

わたしは占星学の研究もしている。そこで、古代エジプトの天体観を知っておくというのも、何らかのヒントになるかもしれないと思ったのであった。

ところが、この神殿に足を踏み入れたわたしは、全く予期していなかった大発見をすることになるのである。もう、天体図のレリーフなどそっちのけになってしまったほど。そこにはいったい何があったのか!? どんな秘密が隠されていたのか!?

なんと、古代エジプト時代のこの

フィラエ島のイシス神殿

神殿で、わたしはクンダリニー・ヨーガと全く同一の象徴をいくつも見いだしたのである。これは、クンダリニー・ヨーガの発祥の地はインドではなかった、インドよりさらに古い歴史を持つ古代エジプトにもあったのだ、ということを物語っている。これは、従来の通説が覆されてしまう重大な発見だ。

まず、わたしは列柱室で柱に三本の蓮の花が彫られているのを見つけた。列柱室とは、太い美しい柱が、何本も整然と並んでいる部屋で、古代エジプトの建築様式の特色の一つ

となっている。

三本の蓮の花――これは、紀元前三〇〇〇年ごろに上エジプトと下エジプトが統一されるずっと以前から、上エジプトの象徴とされていたものである。

「三本の蓮は、ヨーガの三つの気道を表わしているのではないだろうか。」

わたしは、ふとこう考えた。蓮の花はサハスラーラ・チャクラの、ひいてはヨーガの象徴である。それが、三つの気道（スシュムナー気道・イダー気道・ピンガラ気道）という、クンダリニー・ヨーガで最も重要な気道と同じ数で表わされているのだ。

しかし、このときはまだ、漠然とそんなことを考えていただけだった。だが、細い階段を降りて、真っ暗な地下室へと入ったわたしは、懐中電灯の光に浮かび上がったヘビのレリーフを見つけ、衝撃を受けた。ヘビは蓮の花から天に向かって立ち昇っているのだ。これはクンダリニーだ。

クンダリニーはヘビで表現されている。おそらく、尾てい骨にクンダリニーがとどまっているとき、あたかもヘビがとぐろを巻いているかのように霊視されるからであろう。し

ハトホル神殿のレリーフには、古代エジプトに花開いた
クンダリニー・ヨーガ文明の証が随所に見られる

かも、クンダリニーが上昇するとき、それはヘビがシュッと跳び上がる——ちょうどそんな感じなのだ。最終的にクンダリニーは、頭頂のサハスラーラ・チャクラを突き抜け、魂とともに天（ニルヴァーナ）へと向かう。これをポアと呼んでいる。

蓮の花から天に立ち昇るヘビ——これだけの、たったこれだけの絵で、クンダリニー・ヨーガのクンダリニーの動きが語り尽くされている。なんということだ。古代エジプトにはクンダリニー・ヨーガがあったのである。これは間違いない。わたしは、ここに至ってその確証を得たのだった。

あっ、ビバリータ・カラニーだ！

次にわたしは上の階へと上がった。わたしの当初の目的であった天体図が天井にはめ込まれた部屋があった。

天体図——？　もう天体図のことなど構ってはいられなかった。なぜならば、天体図のすぐ横に、ヨーガの逆転の体位〈ビバリータ・カラニー〉の図があったからだ。ビバリータ・カラニーは、霊的覚醒を促す、ヨー

ガ最高の秘儀の一つなのである。

そして、次なる部屋。壁に死と再生のプロセスが絵物語のように描かれているではないか！　そのプロセスを追ってゆくと、ヨーガの影響を色濃く受けている『チベットの死者の書』の内容にそっくりであることに気づくのであった。

エジプトには、クンダリニー・ヨーガがあった。このことをわたしに知らせるために、シヴァ大神はエジプトへ行くように示唆したのだろうか。おそらく、そうに違いない。

なおエジプトの神々や王のレリー

フ、像にも、クンダリニー・ヨーガの象徴が表われていることにも気づいたので、書き加えておくことにする。

① 額のアージュニァー・チァクラの位置にあるヘビ（これはクンダリニーがアージュニァー・チァクラまでを活性化させたことを表わしている）

② 頭上にある太陽（クンダリニーが頭頂を突き抜けたときに見えるコーザル世界を表わしている。コーザル世界はまぶしく光り輝く太陽のように見えるのである）

どんどん暗くなってきてしまった。はるか彼方に広がる砂漠に陽が落ちてしまったのだ。わたしは、もうハ

トホル神殿を去らねばならなかった。それは、なんともいえず、残念なことであった。

誕生殿のヒエログリフ

わたしは、ここで古代エジプトにヨーガがあったという思いがけない発見をした。これで十分満足しなければならないはずだった。しかし、後ろ髪を引かれるというか、得体の知れない心残りがあった。ハトホル神殿は、まだ何かをわたしに訴えようとしている！　少なくともわたしにはそう思われた。

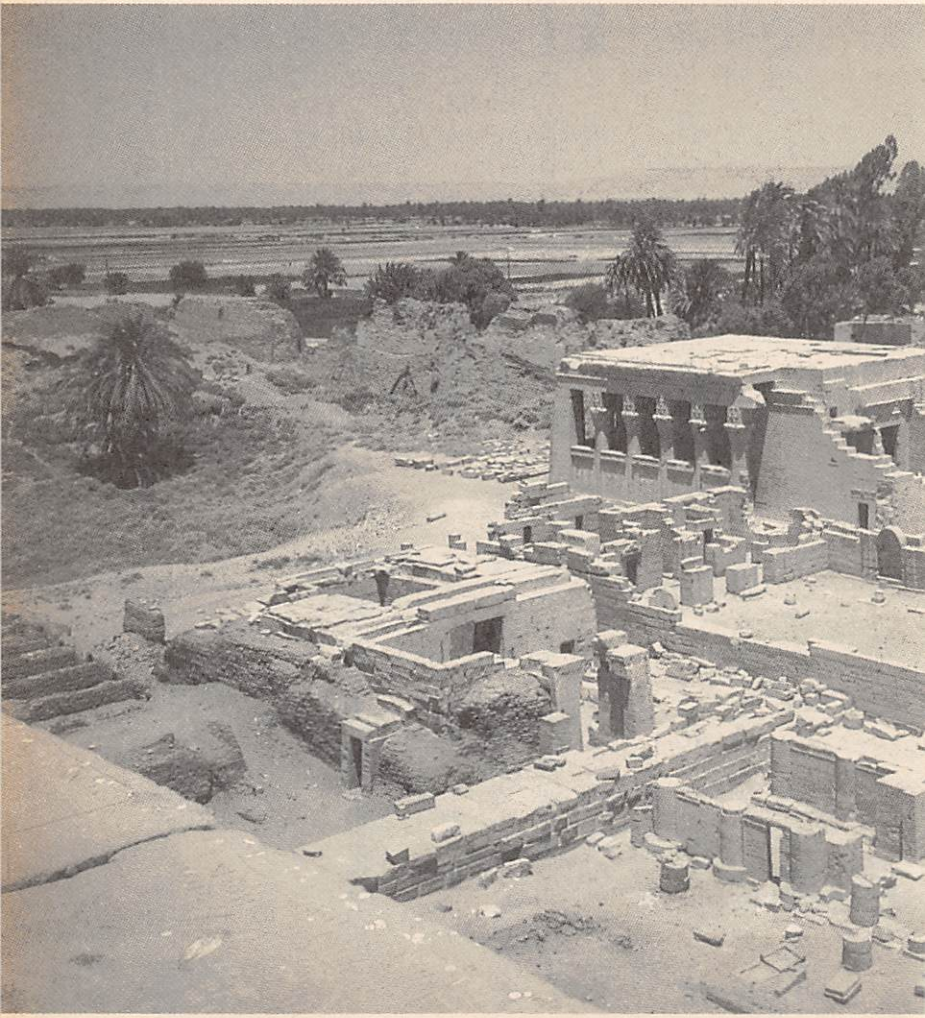
そこで、カイロに到着してから、

ハトホル神殿の南外壁レリーフ

またもやハトホル神殿への旅の計画を立て、手配をした。日中五〇度にもなる夏のエジプトで、再び往復一二〇〇キロの陸路の行程。わたしは大分疲れてきていたが、身体のことなど気にしていられなかった。何としてでも、もう一度ハトホル神殿へ行かなければならない、と思いつめていたのだから。

二度目に訪れたハトホル神殿。門を入ったところで、わたしの足は無意識のうちに止まってしまった。シヴァ大神の意思が働き始めたのか。このように、運命に導かれるような動きをすることが、わたしにはよく

第五章



ハトホル神殿から誕生殿を臨む

ある。

わたしが立ち止まったすぐ右側に、誕生殿があった。これは、ローマ支配時代に建てられたと見られているそうだ。わたしは周壁に囲まれた内部へと入ってみた。

ところが、見るも無残に破壊されてしまっているのだ。聞くところによると、後世になってコプト教徒が破壊したのだという。

しかし、ここに何かがあるはずだと信じたわたしは、今度は周壁の外側へ回った。

「あった！」

あまり目立たない壁の外側に、破壊からまぬがれてヒエログリフ（聖刻文字）が刻まれていたのである。

象形文字は何を訴えるのか

ヒエログリフは、古代エジプトで使われていた文字である。象形文字に属していて、神聖文字とも呼ばれているものだ。この文字体系ができ上がったのは、初期王朝時代（前三〇〇〇～二六五〇年ころ）のことで、以後紀元後三世紀頃に至るまで、実に三千年以上もの長い間使われ続け

ていたのである。

わたしがひかれたからには、この壁のヒエログリフに何か秘密が隠されているのだ。けれども、わたしに古代エジプトのヒエログリフが何を意味しているのか、とうていわかりっこない。だいたい、古代エジプト語なんて、とっくの昔にこの世から消え去ってしまっているではないか。

「しかし、待てよ……。」

そのとき、わたしの頭にあることがひらめいた。

「これは象形文字だ。つまり絵なのだ。もし後世の人間に読んでもらいたかったら、言葉や文章として残すより、だれもが一目見て理解できる〝絵〟の方へ重点を置く方が合理的ではなかろうか。もしわたしだったら絶対そうする。古代エジプト人もそうしようとしたのではなかろうか。ボイジャーやパイオニアが宇宙人にメッセージを伝えようとして絵を用いているように……。」

そう考えると、今までの疑問が解ける点がいくつかある。

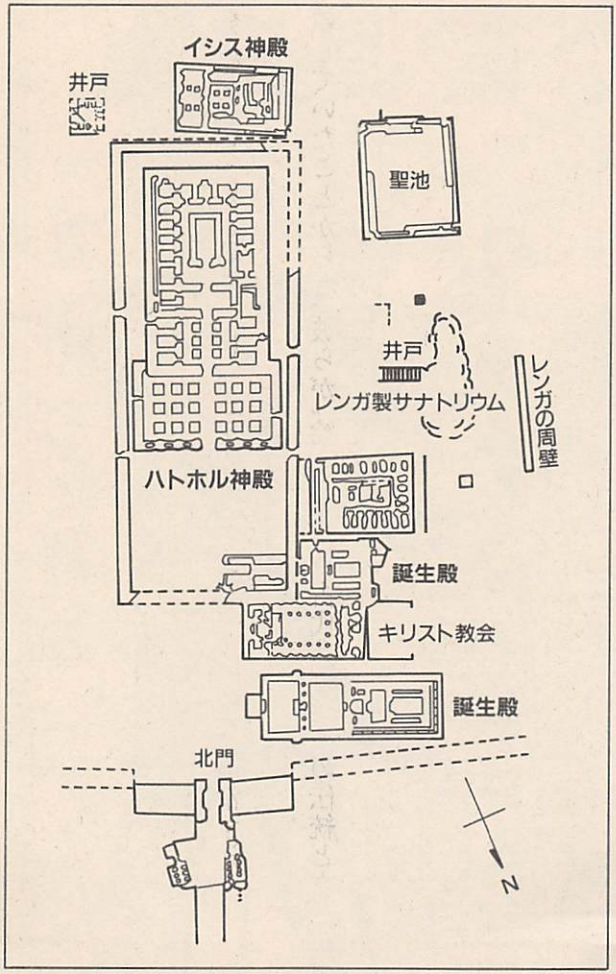
まず、神殿のレリーフや石棺など半永久的に保存する物にヒエログリフを彫ったこと。これは時代や民族

を超えて、絵から古代エジプト人が伝えんとしたことを感じ取ってほしいと望んだのでないかと思う。

また、ヒエラティック・デモティックと呼ばれる、より簡単な筆記体も発達していったというのに、三千年以上もの間面倒なヒエログリフに固執していたことからも、彼らが〝絵〟として残そうとしていたことがうかがわれる。

とすると、この誕生殿のヒエログリフは、わたしに何を訴えかけているんだろう。特に、この誕生殿が建てられたのが、プトレマイオス朝滅亡後のローマ支配時代だとしたら、ヒエログリフで刻まれたメッセージはせっぱつまったものであるはずだ。なぜなら、間もなく古代エジプトはエジプトから姿を消す運命にあるからだ。

古代エジプトの伝統と文化が失われる前に、後世へのメッセージを残したのだとしたら、どんなメッセージなのか？　何がわたしを呼んだのか？　次章では、引き続きこのことを考えてみたい。驚くべき事実をお伝えすることができよう。



ハトホル神殿配置図

第六章 ハトホルの壁に刻まれた秘儀

ヒエログリフは語る

わたしがハトホル神殿のヒエログリフ（聖刻文字）に何を見たか――。では、早速始めよう。

エジプトでハトホル神殿を再び訪れた理由については、前章ですでに触れた。要するに、神殿をあっさりと離れるという気になれず、多少の無理を押しての再訪を実現させたということだった。

わたしがこのような行動をとるときには、必ず何らかの重要な進展が待ち構えているものであるが、果たして今回も同様であった。ハトホル神殿の外壁に彫られているヒエログリフが、解脱に至るまでのヨーガ各ステージの秘儀を如実に表わしているという、驚くべき事実を発見したのである。

ご存じのように、古代エジプト語は古代エジプトの滅亡と運命を共にした。したがって、この世から消えて長い長い年月が経っている。もちろん、今まではわたしにとっても無縁な、しかし何となく古代のロマンを感じさせる、という絵文字の一種

こんなところにもクンダリニー・ヨーガ文明の証が……。スカートの端の太陽から七つのチャクラの光が射している

にすぎなかったのだ。

ところが、「ハトホル神殿にはまだ何か謎が隠されている」という強い思いが抑え難く、もう一度足を運び、すべてが氷解したのである。

わたしを呼んでいるヴァイブレーションはここから出ている！　そこには、ヒエログリフが刻まれた外壁があった。外壁の他の部分は後世のコプト教徒・イスラム教徒らによって破壊され、見るも無残な姿をさらしているというのに、どういうわけかヒエログリフの部分は完全な形で残されていた。目に見えない不思議

な力が働いていたとしかいいようがない。

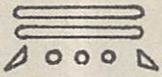
ヒエログリフの一文字一文字を追っていたわたしはびっくりした。なんと、それは下から上に向かって、ヨーガのプロセスが〝絵〟として表わされているではないか！　しかも、それぞれのステージでの秘儀まではっきりと付け加えられている。

古代エジプト人が、これだけの文化遺産を遺していたとは――。日本において、わたしが歴史上初めて解明したことを、何千年もの昔のエジプト人は知っていたということになる。

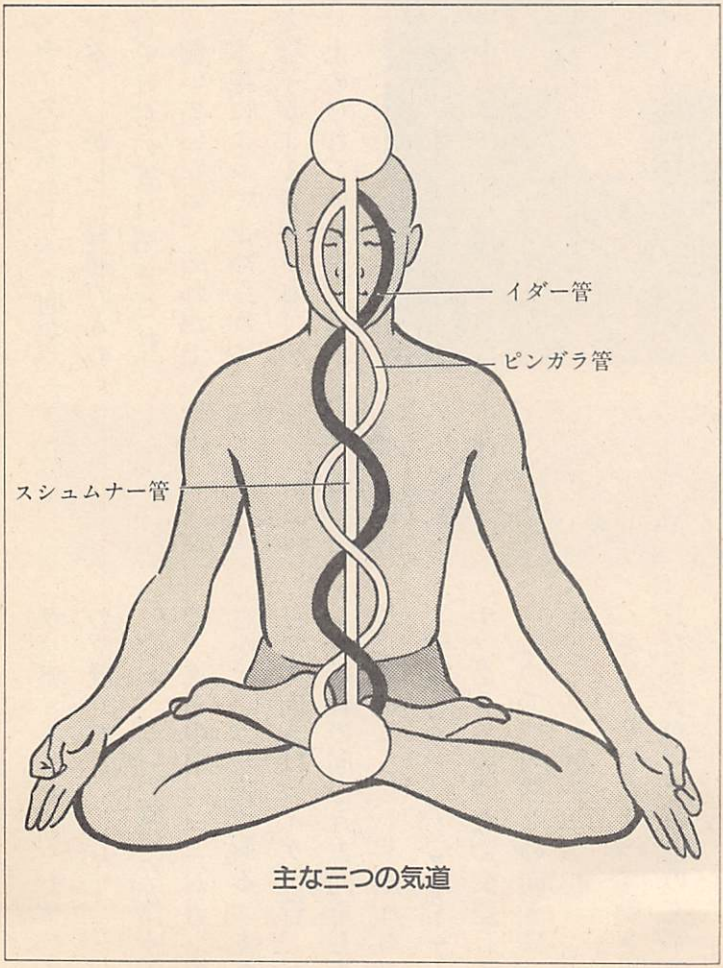
古代エジプト人は、後世の人々のためにヨーガを伝えるべく、ヒエログリフを選んだのだ。自分たちの文明がいずれ消えていってしまうという、絶望的な未来を予知した彼らは、ヒエログリフに一縷の望みを託したのだ。どんな思いを込めてヒエログリフを刻んだか。堅い石材に刻んでいったか――それは想像に難くない。

それは、三管の覚醒に始まった

それでは、問題のヒエログリフを下から、つまり下位のステージから順にご紹介しよう。皆さんも、わたしが常々述べてきたヨーガと完全に一致しているという事実に必ずや驚かれるに違いない。

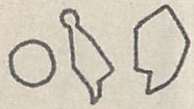
まず最初に来るのが図①の文字である。これは、まだ修行に縁のない普通の人間の状態を表わしている。

三角は、尾てい骨のところにあるムーラダーラ・チャクラの象徴である。ムーラダーラ・チャクラは霊視すると三角形に見えるのである。このことについては、わたしも『超能力・秘密の開発法』（オウム出版）という本に書いたことがある。

三つの丸は、イダー管・ピンガラ管・スシュムナー管という三つのエネルギーの通り道だ。それらは、ムーラダー



主な三つの気道

ラ・チァクラから上へと向かっている。しかし、普通の人の場合それらの管は閉ざされ、全く働いていない。それが上の二本線によって止められている様子がよく表現されている。止められている場所はスヴァディスターナ・チァクラの位置である。



なお、三つの管は左がイダー管、真ん中がスシュムナー管、右がピンガラ管である。また、三角の向きは、イダー管、ピンガラ管の向かう方向をも表わしているらしい。それらの二管は、スヴァディスターナ・チァクラでいったん交差しているので、当然この向きに上昇しているからだ。

さて、修行によって動き出した三管が、その上の文字で

パシェドゥの墓壁画
ここにもホルスの目が見られる
その横の鳥は隼の姿のホルス神

表わされている（図②）。

左からピンガラ管、スシュムナー管、イダー管となる。ピンガラ管とイダー管の位置が逆転するのは、先程述べたとおり、スヴァディスターナ・チャクラで二管が交差しているからである。二管は、この後も各チャクラを通過するごとに交差している。

③

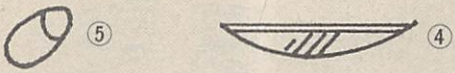
◆神々の世界へ

さて、スヴァディスターナ・チャクラのステージを超えて、マニプーラ・チャクラのステージへと入ったらどうなるか。

図③は、ホルスの目と呼ばれるものである。ホルスとは、死と再生を司る神で、日本風

の言い方をすれば第三天界にいる夜摩天のことである。これは、このステージが天界へと通じているということを意味している。ちなみに、スヴァディスターナ・チャクラのステージは、人間界と動物界へと通じているものである。

ホルスの目の上に彫られている舟は第三天界のレベルを過ぎた時点で、真の菩薩となって解脱へ向かう舟に乗ることができたということだろう



（図④）。

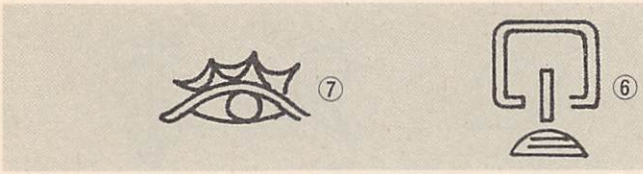
図⑤は、ちょっとわかりづらかった。しかし、少しずつ向きの違う同一の形が他の場所にも見られ、それらの状態をも含めて類推すると、修行の進むスピードを表わしているらしい。

この場合、楕円が真っすぐに上を向いていない。ということは、いろいろな障害があって、解脱へと向かうスピードが抑えられていることを表わ

しているのだろう。

図⑥は、同じマニプーラ・チャクラのステージでも第四天界の兜率天の住人（菩薩）が、天界をぶち抜いてアストラル世界へと入っていくところである。この人たちは大乗の修行者となっているので、自分だけでなく、多くの人も連れていけるよう、乗り物らしき絵が描かれている。

目はマニプーラ・チャクラの象徴だ（図⑦）。それが王



⑦　⑥

冠を載せたらどうなるか。それはもう、マニプーラ・チャクラのステージでは最高の状態ということになる。この状態では、すべてが思いのままになるという力がついていることだろう。天界の種類でいったら、第六天界である。

以上でマニプーラ・チャクラのステージは終了だ。その上はアナハタ・チャクラのステージとなる。

解脱への分岐点

図⑧楽器は、実によくアナハタ・チャクラのステージを表現しているといえよう。ここでは、イダー管・ピンガラ管・スシュムナー管の三管を風が通り抜けるとき、その音が音楽のように聞こえるのだ。したがって、楽器本体の方の三つの円は、三つの管を表わしているということになる。

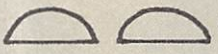
魂――図⑨は当然魂だと考えられる。というのも、このアナハタ・チャクラのところに人間の魂が存在しているからである。

図⑩の犬の顔は、修行や真理、またグルに対して犬のように従順にならなければならない、という示唆である。実際、このアナハタ・チャクラのステージには、一つの分岐点がある。それは、正しい解脱へと至れるか、あるいは大

アメン大神殿の列柱室

魔人や悪魔となって真理から遠く離れていってしまうか、そのどちらの道にも進む可能性があるということなのだ。

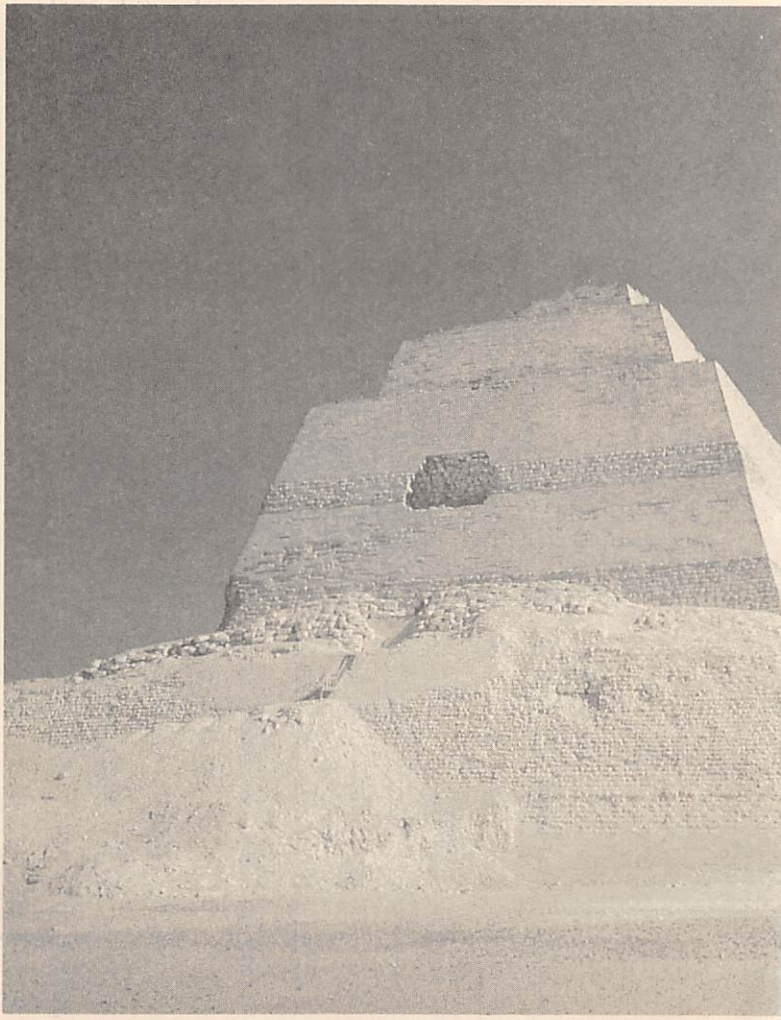
従順な心を持っていたら、解脱へ通じる道から外れることはない。大魔人や悪魔になってしまうのは、エゴが勝ってしまった場合なのである。



⑪

図⑪の二つの絵は、アナハタ・チャクラのステージになると、二つの世界に通じるということを示している。一つは、マニプーラ・チャクラのステージで通じたアストラル世界、そして新たに通じるのがコーザル世界なのである。

また、異性にもてるように



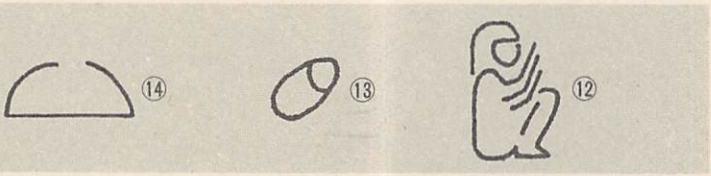
メイドゥームのピラミッド
クフ王のピラミッドなどと同じ真正ピラミッドだったが、外枠の石組が不完全なために崩れ落ちてしまった周囲の砂丘のようなものが崩れ落ちた石である

なるので、そのことも描かれている。このヒエログリフの場合は、男性中心のプロセスが表わされているので、異性の絵も女性となっている（図⑫）。

図⑬、これは前にも出てきた。スピードである。今回の場合も、上昇傾向ではあるが、ややスピードは抑えられ気味だということだ。

アナハタ・チャクラのステージでは、一定期間精神的に安定期に入る。精神的安定期には、その状態に安住しようとするので、修行の方は進歩しづらくなる。

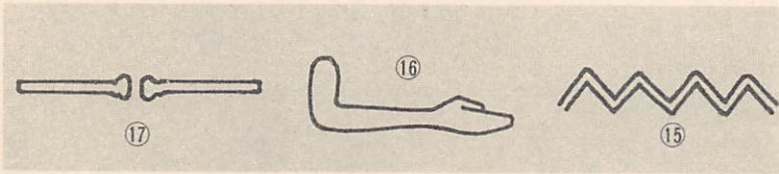
図⑭の絵は、他の箇所でも時間がかかることを表わすときに出てくるのだが、ここでも同様に考えていいだろう。つまり、この期間、修行は進歩しづらくなり、かなりの時間をそこで費やすということである。



古代エジプト人の高き霊性

さて、次に精神的不安定期に入っていく。

図⑮の線がそれを表わしている。精神的安定期に修行の進歩が見られなかったので、この不安定期はむしろ歓迎すべき兆候である。さらに上のプロセスへと進む準備をしているともいえるのだ。



手の図（図⑯）は、アナハタ・チャクラの象徴である触覚を表わしている。

人間は修行段階で破っていかなければならない結節というものを持っている。全部で三つ、それぞれブラフマ結節・ヴィシュヌ結節・ルドラ結節という。ルドラ結節は、シヴァ結節という名でも呼ばれている。

図⑰は、最初に破らなければならないブラフマ結節であ

る。

結節はもともと中央に隙間があるのだが、破れるときにはボンッという大きな音がして崩壊する。

エネルギーが弱い人は、結節を破ることができずにUターンしてしまうので注意が必要だ。

ところで、古代エジプト人がヒエログリフに示している結節の位置は、わたしが経験的に知っていた位置と違っていた。それぞれ、次のような位置にある。

▼古代エジプト
・アナハタ・チャクラ
・ヴィシュッダ・チャクラ
・アージュニャー・チャクラ

▼わたしや他の日本人の場合
・マニプーラ・チャクラ
・アナハタ・チャクラ
・アージュニャー・チャクラ

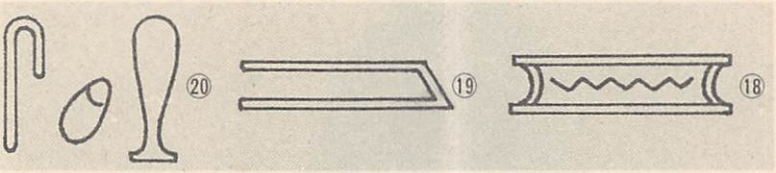
このことで気づくのは、現代の日本人よりも古代エジプト人の結節の位置が高いということである。これは、古代エジプト人の霊性の高さを

表わしているのかもしれない。

ヴァイブレーションの世界へ

さて、結節が破られた後はどうなるのだろうか？　実はまたもや大きな二重の壁にぶつかってしまうのである。

この壁を突き破らなければ、もちろん次の世界へと入っていけない。次の世界とは報身の世界のことである。そこが、ヴァイブレーションの世界であることを図⑱のジグザグ線



が表わしている（この宇宙観については、『マハーヤーナ・スートラ』に詳しく書いてあるので参照していただきたい）。

まあ、普通の人だったら、そこまでは行けないだろう。

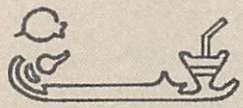
図⑲も行き止まりを示している。もうこのレベルになると上へ進むのがとても大変だ。しょっちゅう、つまずいてしまうのである。

他にも図⑳のような絵がこ

の段階に見られ、このステージの難しさを表わしている。これらは、土台がしっかりしていず不安定だとか、伸び悩んで落ちるだとか、スピードが落ちるだとか——なかなか大変なことらしい。

ただ、図㉑は精神的には安定しているということを示している。

上昇が難しいこの段階をクリアすることのできる秘儀の


㉒

㉑

特別イニシエーションが、ここに忽然と姿を現わす。水のイニシエーションである（図㉒）。

右側にある水を飲むことによって、クンダリニー・エネルギーを強めるのである。ここでのクンダリニーは、現代のわたしたちがヘビをクンダリニーの象徴としているのと全く同様にヘビで表わされている。

新たなる贈り物

実際に水のイニシエーションは効果があるのか？　オウムでは今まで水のイニシエーションを用いていなかったのだが――。

そこで、早速それを試してみることにした。水は、ただの水ではなく、わたしが修法しながらエネルギーを込めた〝超純粋甘露水〟にしよう。なぜなら、古代エジプトでもイニシエーションは解脱者が与えたはずであろうし、当然水には解脱者のエネルギーが注入されていただろうからである。

さて、希望者の何人かに水のイニシエーションを行なってみたところ、さすがに抜群の効果を上げた。もちろんクンダリニーも強化されたのだが、それだけではなかったのだ。修行者の水・火・風という三つのエレメントを浄化しつつ強化する、という働きのあることがわかったのである。

特に、風エレメントの強化というのは、このステージを終えて、次のステージへと入っていく重要なポイ

エジプト博物館蔵の石棺
頭上の太陽、ヘビ、聖水など、いずれもクンダリニー・ヨーガ文明の証だ

ントだ。なぜなら、風エレメントの強化が、第二の結節であるヴィシュヌ結節を破る必須条件だからだ。

このようにして水のイニシエーションの必要性を知ったわたしは、弟子や信徒の皆さんがこのイニシエーションを受けることができるようにシステム化した次第である。古代エジプトからの贈り物第二弾とでもいうことができよう。

この〝超純粋甘露水〟――実をいえば、このわたしでさえその素晴らしい力の恩恵にあずかっている。シャクティーパットでエネルギーをロス

したときなど、超純粋甘露水が回復を助けてくれるのだ。

今、わたしはオウムのニューヨーク支部にいるが、日本からわざわざ超純粋甘露水を持って行ったほどである。皆さんも、これを効果的にご自分の修行に取り入れて、成就を期していただきたいと思う。

追記

◆香りのイニシエーション

ムーラダーラ・チャクラと密接な関係のある〝香り〟を使ってクンダリニー覚醒を促せないか、という試みも成功した。クンダリニー覚醒の他に、次のような効果が確認された。

・クンダリニーの上がる回数が多くなる。

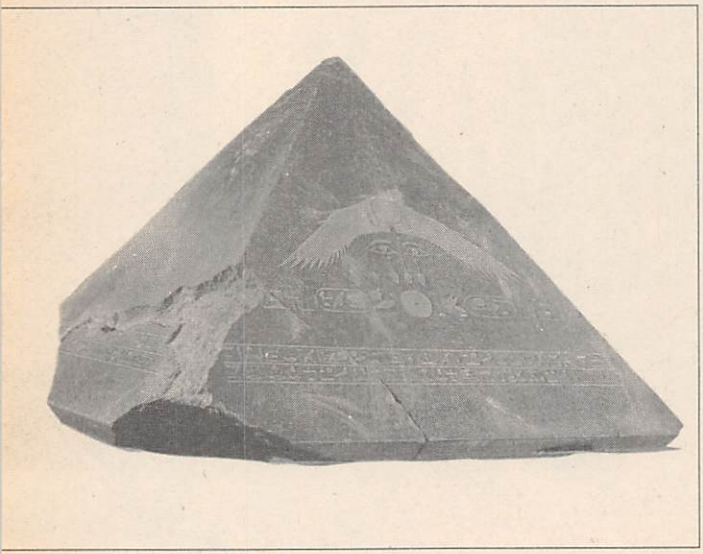
・意識やアストラル世界がはっきりとし、見えるヴィジョンも鮮明になる。

・地のエレメントを強める。

以上のことから、香りのイニシエーションは、初心者や修行の壁に突き当たっている人たちに上昇のきっかけをもたらすものと考えられる。

香りのイニシエーションは、オウ

ム科学班の協力によって〝プルシャ型たまて箱〟として最高の形で完成を見た。いつでも手もとに置いて効果的に利用することができよう。



第12王朝、アメンエムハト3世のピラミッドの頂上に置かれていたキャップ・ストーン
他の遺跡と同様に、ここにもクンダリニー・ヨーガ文明の象徴が刻まれている

第七章

古代エジプト文明に潜むクンダリニー・ヨーガの秘密

結節を崩壊せよ

さて、いよいよヴィシュヌ結節を破らんとするところからだ。

ここでもう一度、結節とは何かということについて説明しておこう。結節はクンダリニーの通り道であるシュスムナー管にある壁のようなものだ。最初にクンダリニーが覚醒したというレベルでは、この壁に邪魔されて少しずつしかクンダリニーの上昇が見られない。しかし結節が破られると、一気に多量のクンダリニーが上昇するのである。解脱するためには、多量のクンダリニーが頭頂に集められなければならないので、結節は必ず破っておく必要があるのである。

さて、前章でも述べたように、人

アティの偽扉
偽扉はマスタバなど墓の壁につけられたもので、死者がこの偽の扉を通して供物を受け取ると考えられていた

間は結節を全部で三つ持っている。下部に位置するものから順に名を挙げると、ブラフマ結節、ヴィシュヌ結節、ルドラ結節（シヴァ結節）となる。このうち、最下部のルドラ結節を破るところについては、前回すでに触れている。

古代エジプト人もわたしたち現代日本人も、同じように、これら三つの結節を持っているわけだが、面白いことにその位置が違っている。古代エジプト人が、ブラフマ結節はアナハタ・チャクラに、ヴィシュヌ結節はヴィシュッダ・チャクラに、ルドラ結節はアージュニャー・チャクラの位置に持っていたのに対して、わたしたちはマニプーラ・チャクラ、アナハタ・チャクラ、アージュニャー・チャクラにそれぞれ持っているのである。つまり、古代エジプト人の方

が、結節の存在する位置が高いというわけだ。

この点を考えると、古代エジプト人は、わたしたちに比べて恵まれていたといえるだろう。なぜなら、結節が高い位置にあればあるほど、そこに突き当たるのが遅くなり、遅くなった分だけ力を蓄えておくことができるからである。

ところで、まだ何の結節をも破った経験のない人が、どのように結節を破ればよいかということを心配するかもしれないが、その必要はない。大切なのは、いかに真剣にプログラムに沿った修行を進めるか、また、イニシエーションを受けていくか、なのである。これらによって必要なエレメントが強まったときに、自ずと結節は破られていくものなのだ。

今回のヴィシュヌ結節を破るためには、特に風エレメントの強化が中心となる。したがって、イニシエーションでいったら、「シャクティーパット」と「祝福」、そして、水のイニシエーションが最適であろう。

神々の声を聞け

それでは、このヴィシュヌ結節が破られたときには、どのような変化が訪れるのかお話ししよう。

まず、ナーダ音が聞こえるようになる。ナーダ音については、『マハーヤーナ』でも度々紹介されているので、ご存じの方も多いだろう。アストラル世界を形成している音のことなのである。

ナーダ音には低レベルのものから高レベルのものまで、数え切れないほどの種類があるのだが、修行が進めば進むほど、上位アストラル世界のレベルの高いナーダ音が聞こえるようになってくる。

レベルの高いナーダ音が聞こえるようになったとき、修行が飛躍的に進む。というのも、上位アストラル世界が、コーザル世界へと通じているので、瞑想中に、そのナーダ音に集中することによって、コーザル世界へと飛ぶことができるからである。

また、サマディ（三昧）にも入りやすくなる。わたしはサマディに入るときには、いつもナーダ音に集中

するところから始める。ナーダ音に集中しているうちに、わたしの真我は肉体を離れ、アストラル世界、コーザル世界へと飛んでいく。そして、コーザル世界へとどまっているときもあるし、コーザル世界をも飛び越してマハー・ニルヴァーナ（大完全煩悩破壊界）に飛ぶこともあるのである。

ナーダ音に続く主だった変化としては、神々の声を聞くことができるようになる、ということが挙げられよう。ヴィシュヌ結節が破られると、天界の住人の声は無論のこと、より高い世界におられる神の声を聞くことも可能だ。要するに、声による示唆を受けられるということなのだ。

昔、モーゼやイエスがヤハウェの声を聞いたのも、ヴィシュヌ結節を破っていたからである。また、わたしがシヴァ大神の声を聞くことができるのも同様の理由からである（これはヴィシュッダ・チャクラの世界である）。

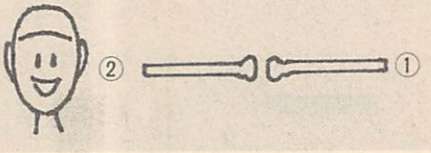
守護神の妨害

それでは、ヴィシュヌ結節を破っ

たところから、さらに先へと話を進めよう（図①）。

次に、自分の守護神の顔が見えるようになってくるのである（図②）。

守護神は、段階に応じて三回入れ替わるのであるが、女の守護神がついているときには修行者の性格も女っぽくなり、男の守護神がついているときには男っぽくなる。面白いところである。



最初、守護神は修行の手伝いをしてくれるありがたい存在だ。しかし、次第に邪魔をし始める。それは、守護神がその人の修行の進歩に嫉妬するからなのであって、いつま

古代エジプト人がパピルスに綴った、死後の世界を伝える「死者の書」

でも守護神を大事にしていてはひどい目に遭ってしまう。注意が必要だ。

例えば最初につく守護神は、修行者がマニプーラ・チャクラのレベルである天界を越えて、アストラル世界へ入っていくころになると邪魔をし始める。最初の守護神は天界の住人（神霊）であるので、修行者が自分たちのレベルである天界よりも高い世界へ行ってしまうことに対して嫉妬するのである。

具体的にどのような邪魔をするのだろうか。修行者のタイプによって方法はまちまちなのだが、修行の環境を悪化させるだとか、執着を持ちそうなものを与えて修行への関心をそぐといった種類のものが最も多いように思われる。それらは、家族が修行に猛反対だったり、異性が近づいてきたりという形で、現実化するのである。心当たりの人はいないだろうか。

では、第二番目の守護神はどういう邪魔をするのだろう。ヴィシュヌ結節が破られた後の段階で見えるのは、実はこの二番目の守護神である。

この段階では、上位アストラル世界である形状界（色界）の住人が守

護神となるので、修行者がアストラル世界を越えて、上のコーザル世界へ入っていくころになると、その修行の進歩に嫉妬して邪魔を始めるのである。

具体的には、アストラル世界のイメージを使っての邪魔だ。ここで一番多いのは、生命に対する愛着を増すようなヴィジョンを見せることだろう。生命に対する愛着がある限り、最終解脱は不可能である。

ついでなので、これから先のことについても述べておくことにしよう。

修行がアージュニァー・チァクラを過ぎるレベルに達すると、守護神は三番目の守護神へと替わる。この三番目の守護神は、今までの守護神とは全く違っている。混乱を避けるために他の言葉を使った方がよいのかもしれない。――「肉体を持たないアストラル世界のグル（報身のグル）」なのである。

このグルは、いずれかの前世で、その人のグルであった人だ。その心は止滅（心の働きが止まった状態）しているので、それまでの守護神のような感情もなく、邪魔をすることなどあり得ない。速やかに、最終解

クフ王の大ピラミッド

脱にまで導いてくれようとするだろう。

なお、稀なことではあるが、極めて修行上の素質のある人には、アストラル世界ではなく、コーザル世界のグル（本性身のグル）がつくこともある。

思うがままの願望成就

それでは、話を元に戻して、守護神が見えるようになったら次にどうなるか説明していこう。

図③は、アージュニァー・チァクラそのものである。アージュニァー・チァクラを霊視すると、まさにこの形をしている。

修行ステージがこのアージュニァー・チァクラのレベルにまで進んだとき、ヒエログリフは上位アストラル世界の女性が現われるとしている（図④）。

上位アストラル世界の女性は、修行者にいろいろなものをくれようとする。いろいろなものとは、現世的な物資、地位や名誉、超能力等、ありとあらゆるものだ。「こんなに高い世界にまでよくぞ到達した」と心から喜んでのプレゼントなのである。

④

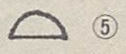
③

だから、自分の欲しいものをすべてもらっていたら、それこそ現世の願望でかなわぬ願望はないということになる。

キリスト教のヨハネの黙示録に、「666で表わされる偽イエスがこの世を支配する」

という記述があるのだが、キリスト教系の秘密結社であるフリーメーソンのある関係者は、こう言っている。この数字は六番目のチャクラであるアージュニャー・チャクラを表わしているのではないか、と――。

現世的な望みが思いのままになるとしたら、当然この世を支配することも十分に可能である。666がアージュニャー・チャクラを表わしているといっても、あながち間違いだとはいえないだろう。


⑤

このように、現世的に考えたら素晴らしい力を、アージュニャー・チャクラのステージで得ることができるのである。

しかし、最終解脱まで到達したい修行者は、何一つここで望んではならない。もし、何かを手に入れてしまったとしたら、それが引っかかりとなって修行がストップしてしまうだろう。図④右下に「落とし穴」という意味で、半円が示されている（図⑤）。

魂の飛翔のとき

さて、同じくアージュニァー・チァクラのステージで、二人の女性の絵が登場する（図⑥）。

この絵は、イダーとピンガラの両気道の象徴だ。ムーラダーラ・チァクラから出発したイダー気道もピンガラ気道も、アージュニァー・チァクラで終点を迎えるのである。これはとりもなおさず、修行の終わりが近いことを意味している。残るスシュムナー気道が、頭頂のサハスラーラに通じ、クンダリニーがそこに集中したときに解脱が訪れる

のである。

ところで、どちらの絵も球状のものを持っている。これは、イダー気道とピンガラ気道を完全に浄化しきって終点に導くことのできた功徳の現われだ。

この功徳とともに、最終プロセスに入っていく。

図⑦は、魂の飛翔である。自由自在にアストラル世界やコーザル世界へと飛ぶことができるようになるのである。

⑦

二つに一つ——仏陀か転輪王か

ところが、だいたい時を同じくして、アナハタ・チャクラのステージと同じように、

精神的な動揺に直面しなくてはならなくなる。それがジグザグ線で示されている（図⑧）。

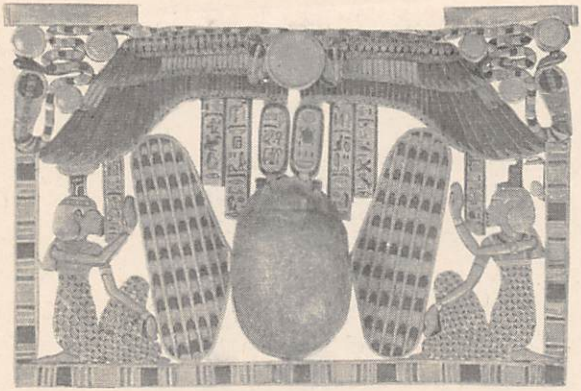
この動揺は、現世的に王となるか、あるいは仏陀となるかの選択を迫られることから起こるものである。

ここでいう王とは功徳を背景とした転輪王のことで、一般的な王とは違っている。だから、ここで王となっても、仏陀となっても、どちらも素晴らしいことなのである。が、転輪王となった場合、当然来世でも生まれ変わってこなければならない。魂の進化ということを考えたら、仏陀への道を選んでおくべきだろうとは思うのだが、中には転輪王となることを選ぶ人もいるのである。転輪王となった人の修行ステージは、いったんここで止まる。一方、仏陀となることを選んだ人は安定期へと入る（図⑨）。

⑨

⑧

ここでは、スピードを表わす楕円形がだいぶ横を向いて



ツタンカーメン王のスカラベの首飾り
死者の心臓の上に置かれたスカラベは再生を意味する

⑫

⑪

⑩

いる。このことから、この時期の修行はゆっくりと進むことがわかる（図⑩）。

それが過ぎると、今度は大いなる飛翔が待ち受けている。魂は、とても高い次元にあるコーザル世界の最上部へと飛んでいけるようになるのだ（図⑪）。

アストラルの危険な誘惑

ところが間もなく、アスト

ラル世界の女性が障害物として修行者の前に立ちはだかる。アストラル的な性欲を試されるのである（図⑫）。

女性の下に描かれている虫のようなものが修行者だ。この虫は、「スカラベ」と呼ばれ、古代エジプトでは太陽を東から西へと運ぶ「太陽神ケペル」の象徴であった。もともとは、ふんころがしの一種だ。

どうして「ふんころがし」が神様の象徴にまで昇格したのかを考えてみると、意外な古代エジプト人の想像力を知ることができておかしくなる。「ふんころがし」がせっせと、馬や牛や羊などの糞を丸めて転がしていく姿と、太陽神ケペルが大空で太陽を運んでいる姿を結びつけているのだ。

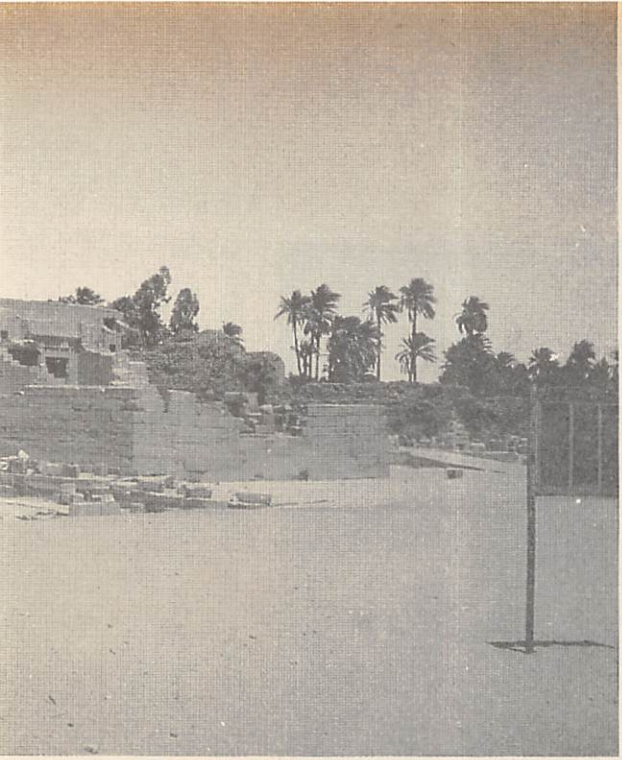
ここで、修行者がスカラベによって表現されているのも、二重、三重の意味が含まれているようである。

まず第一に、クンダリニー・ヨーガの成就の瞬間には、非常にまぶしく輝く太陽が見えるということ。次に、このレベルに達している人は、すでに神のような神通力（超能力）を持っていること。

ネフェルタリの墓壁画　右はヘビに囲まれた太陽を戴くイシス女神

そして、これは全くわたしの私見ではあるが、「ふんころがし」がせっせと糞を運んでいく様子は、「精進」という言葉がぴったりで、これも修行者と結びつくのではなかろうか。

それでは、アストラル世界の女性



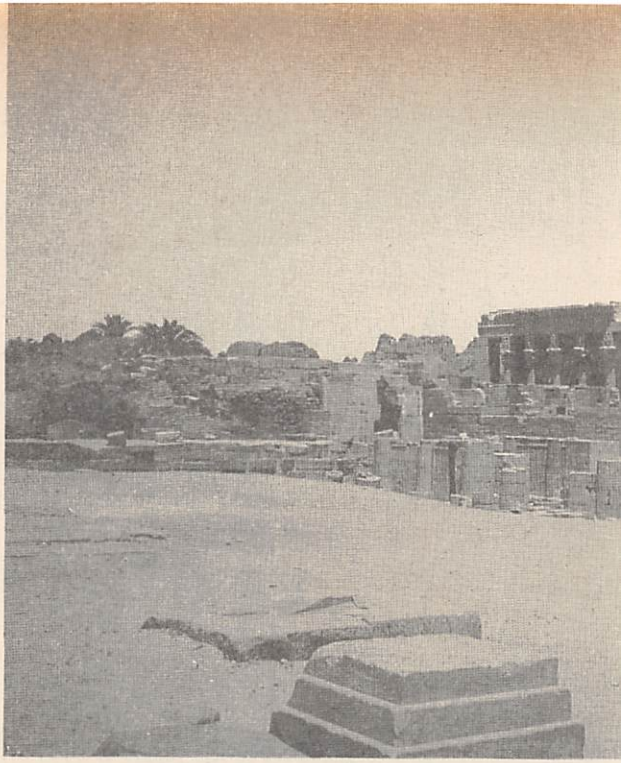
がどのような障害になるのかお話ししよう。

例として、サキャ神賢の場合を挙げてみようか。

サキャ神賢がブッダガヤーで悟りを開く前のことである。サキャ神賢が菩提樹の下で瞑想をしていると、悪魔が近づいてきた。悟りを開かせないようにと、もくろんでのことである。

悪魔は、美しい自分の娘三人をサキャ神賢のアストラル世界に差し向け、魅力的な姿態で誘惑させた。

だが、偉大なサキャ神賢は、全く動じることなく瞑想を続けた。そして、とうとう悟りを開くに至ったのである。



他の修行者の場合も同じようなものだと思ってよい。真理に逆らおうとする悪魔が、アストラル世界で女性を使って誘惑させるのである。女性の場合は逆に男性が現われる。アストラル世界の異性は、大変なまめかしい。何というか、まあ、多次元的な魅力をもって迫ってくるのである。その刺激といったら、この世の比ではなく、よほど意志の力が強くないと耐えられないだろう。

もしも、誘惑に負けてしまって性的な関係を持ってしまったら、その快楽の世界へと没入してしまって、修行の方はなおざりになってしまうであろう。

オウムの師・正師方の中でも、ク

ンダリニー・ヨーガの成就者は全員このアストラルの性的誘惑を経験し、打ち勝ってきたのである。中には、誘惑に負けてしまった人もいたのだが、わたしがグルとしてついていたので、ザンゲさせることによって立ち直らせてある。

仏典では、悪魔の誘惑の後、すぐに悟りを開いたことになっているが、本当はもう少しクリアしなくてはならないステージが残っている。

さらに話を進めよう。

最後の大難関

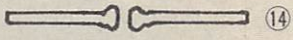
またしても、ジグザグ線で表わされる不安定期がやってくる（図⑬）。

この時期、魂は完全にコーザル世界に入っているので、コーザル世界の影響をダイレクトに受けてしまう。コーザル世界には、根本煩悩である「貪・瞋・癡」が存在しているので、そのデータによってすぐに心が揺れてしまうので

ある。

はたから見ていると、全く動じているようには見えないのだが、本人にとっては最後の大難関である。とてもつらいところだ。

また、ものすごく睡眠時間が長くなったり、あるいは、反対に全く眠れないという日も続く。このことは数々の心配をわき起こさせる。例えば、こんな調子が果てしなく続くのではないかとか、自分は堕落してしまったのではないか、という心配である。

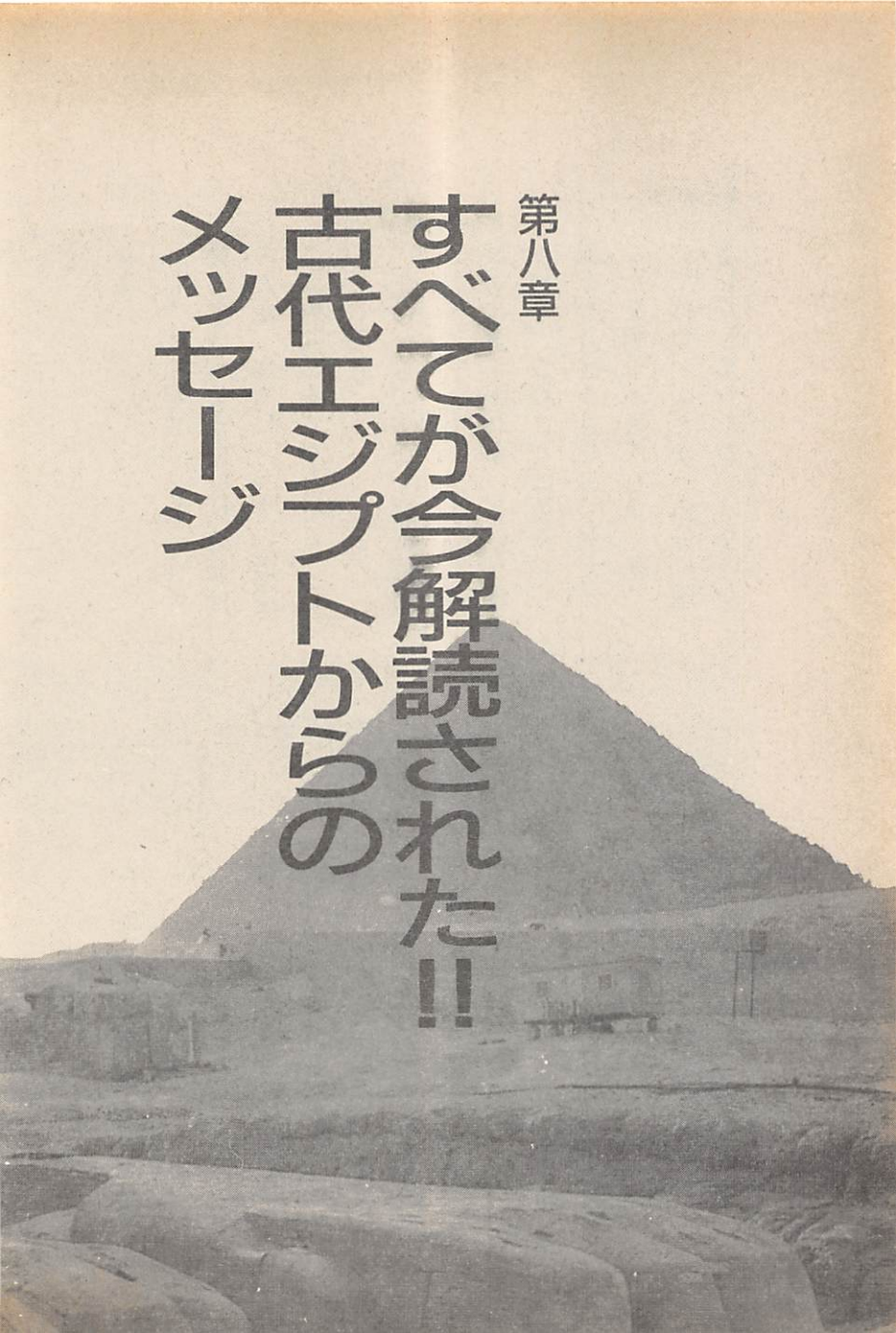


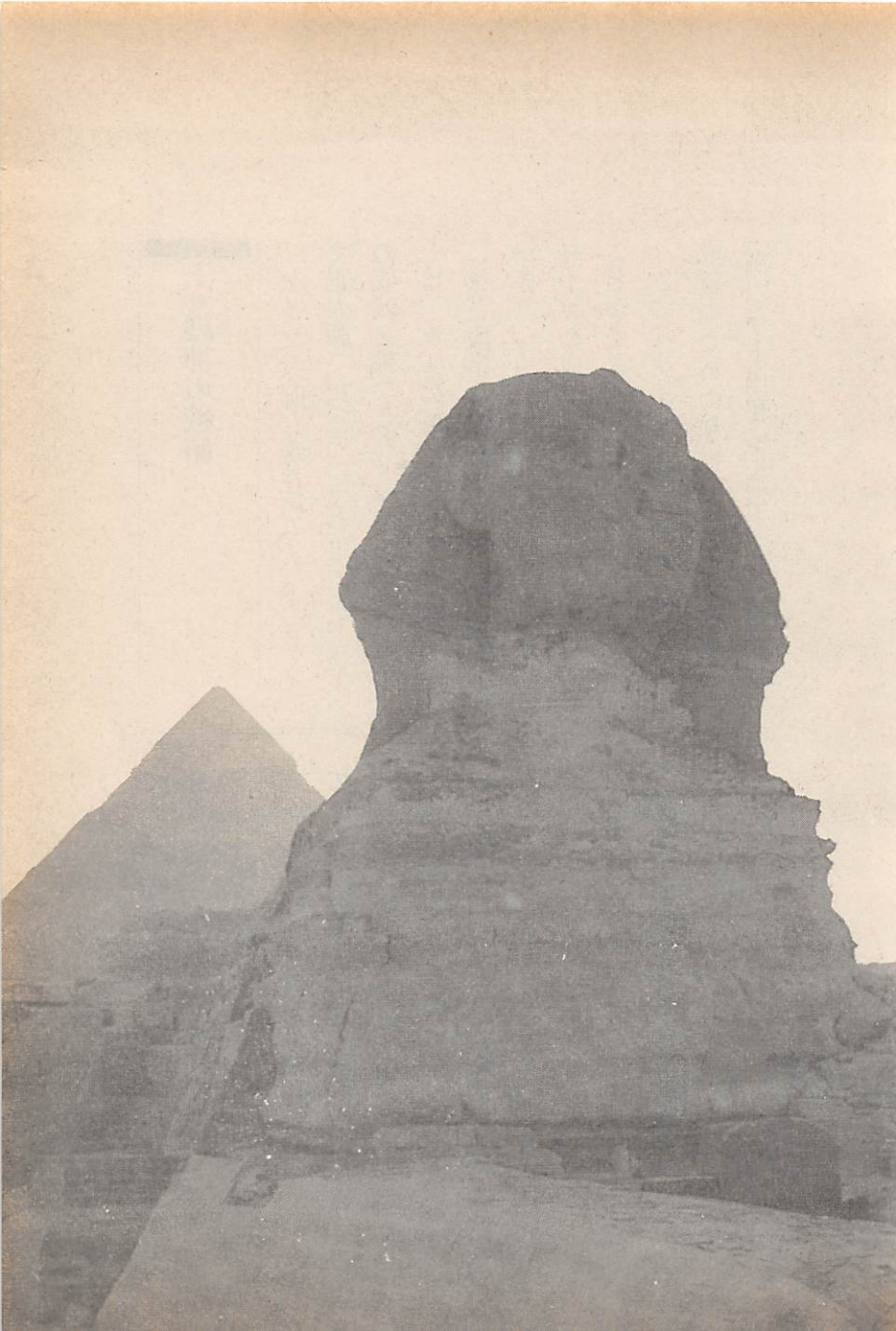
ところが、この、先の見えないような状態は、時期が来るとバチッという感じで、一瞬にして消え去ってしまう。それは最後の結節であるルドラ結節（シヴァ結節）が破られたときだ（図⑭）。

あとは、ほんの少しで念願の成就、クンダリニー・ヨーガの成就へと到達することができるのである。

第八章

すべてが今解読された!!古代エジプトからのメッセージ





守護神の嫉妬

ケイマ大師（現在のマハー・ケイマ正大師）がついにマハー・ムドラーの成就を果たした。マハー・ムドラーとは、グルの導きによって、速やかに第三段階の成就を得る方法である。つまり、これによってジュニアーナ・ヨーガの成就と全く同じ状態を得ることができるということになる。

さて、ケイマ大師によると、この成就のための極厳修行中、前章の「エジプトの秘儀を解く」に書かれていた、守護神についての項が大変参考になったそうである。

一言に極厳修行といっても、この成就までに二カ月もの期間を費やしている。言葉では言い表わせないほどの、「このまま涅槃してしまおう」とまで思いつめたほどの、苦しみの中でもがいていたこともあったのだ。

そうした追いつめられた状態の中で、

「ああ、この低次元のヴィジョンは守護神が邪魔をするために見せているんだ。」

とか、

アメン神像

「煩悩がこんなにもわき起こってくるのは、守護神のせいに違いない。守護神を観想した途端にこうなったのだから。」というように、察しがつき、気持ちが少し落ち着いたのだそうだ。

ちなみに、彼女の邪魔をしていたのはヴィシュヌ結節が破られた後の段階でつく〝二番目〟の守護神である。ご多分に漏れず、クンダリニー・ヨーガの成就というアストラル世界中心のレベルから、アストラル世界を越えて上のコーザル世界に入っていこうとしていた彼女に嫉妬したがために、その守護神は邪魔をし続けたのであった。

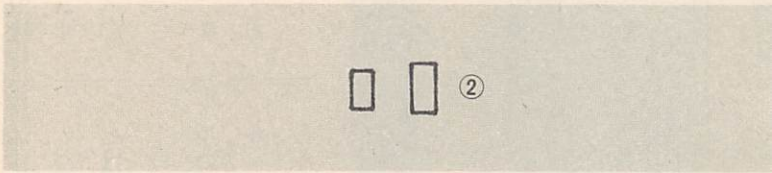
大乗の修行の始まり

それでは、今回は最後の結節であるルドラ結節（シヴァ結節）が破られたところから、話を始めることにしよう。

図①は、欠けがないことを表わす円が十字を背負ってい

る。これはまさに、ルドラ結節を破り、成熟して欠けのない人格となった修行者が、他人のカルマを背負えるようになったことを表現している。

他人のカルマを背負えるようになったとき、まさにこのときこそが本当の意味での大乗の修行がスタートするのである。そして、ここで他人のカルマを背負えるようになっているからこそ、クンダリニー・ヨーガの成就者はシャクティーパットを行なうことができるのである。



さて、その後次のレベルへと移るまでにかかる期間が、人によって長短があることを図②が示している。イメージの浄化が進んでいる人は早く通過できるし、反対に遅れている人は長い期間を必要とする、ということである。

イメージの浄化とは、コーザル世界のデータがアストラル世界で作り上げているイメージを消していくということだ。

または、アストラル世界の浄化ともいう。これは、クンダリニー・ヨーガの成就のための重要なプロセスの一つで、心を〝空〟の状態にすることを目的としている。〝空〟は、クンダリニー・ヨーガの次に位置する、ジュニアーナ・ヨーガまたはマハー・ムドラーの成就の土台となっていく。

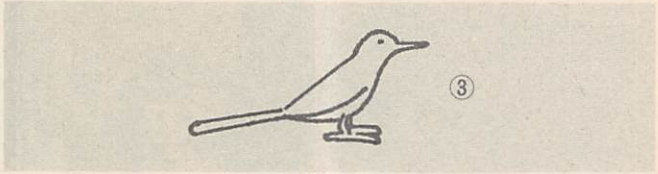
なお、ここでいうアストラル世界とは、現象界の裏側にある低位アストラルを指している。上位アストラルの浄化には、さらに上のアストラル・ヨーガの修行を待たなくてはならない。

ラムセス2世神殿

クンダリニー・ヨーガの成就

さて、アストラル世界が浄化されきったとき、いよいよ待望のクンダリニー・ヨーガの成就が修行者に訪れるのだ（図③）。

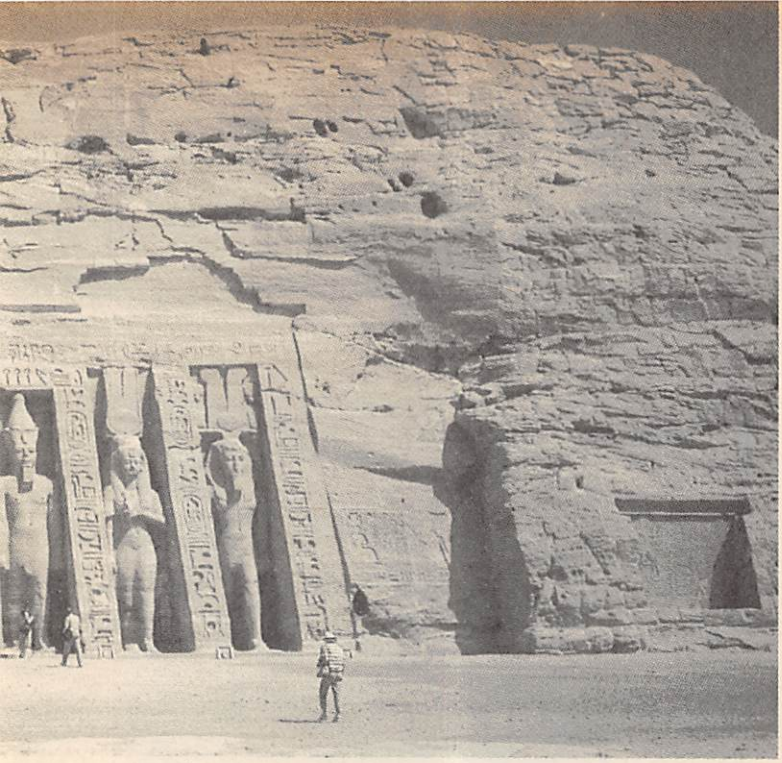
古代エジプトでは、魂は鳥によって表わされている。どうして鳥なのかというと、おそらく空中を自由に飛べる鳥と魂の自由さとを結びつけたのだろうとわたしは思う。



そして、魂に到達したということは、とりもなおさず魂が存在しているコーザル世界へ到達したということを意味するのであり、コーザル世界への到達こそがクンダリニー・ヨーガの成就なのだ。

したがって、クンダリニー・ヨーガを成就したオウム真理教の師・正師方は、少なくともこのレベルに達しているというわけなのである。今までにわたしが書いてきた「古代エジプトのイニシエーション」

ネフェルタリの墓壁画
古代エジプトでは、死者の魂はバーと呼ばれる鳥になると考えられていた



のすべての経験を終えて、クンダリニー・ヨーガの成就を得ているのだ。これは、各師・正師方の真摯な求道心と、莫大な功徳に支えられている。これは、実に偉大なことである。

ところで、成就を得たらもう終わりなのであろうか。そのレベルに安住してよいのだろうか。

いや、そうではない。成就とは、そこに達したということを意味しているだけで、その状態は、確固たるものとはなっていないのだ。ここで、エネルギーをロスしたり、功徳をす

アブシンベル小神殿

り減らしてしまったりしたら、心身のバランスを崩して魔境に入ってしまうのである。

そこで、クンダリニー・ヨーガを成就した後に、さらに修行を進めて、それを完成させなければならないのだ。完成させて初めて、安定した状態を得ることができるのである。

古代エジプトのヒエログリフの場合も、成就では終わってはいない。完成に導くプロセスも、ちゃんと示されている。それでは、今度は完成に導くプロセスを見ていくこととしよう。

六神通の完成へ向けて

成就後、順調に修行を進めていくと、次の図④が現われる。

ここから、いよいよクンダリニー・ヨーガ完成へと向けて、六神通の完成が始まるのである。確かに、これまでにも様々な神通力を身につけてきてはいるのだが、それらが完璧なものとなるのはこのレベルになってからなのである。

④

図④は、天耳通の完成を表わしている。天耳通は遠隔透耳とも呼ばれ、神々の声を聞いたり、遠く離れた場所の声

ルクソール神殿のレリーフ

を聞いたりできる能力である。例えば、東京にいながら札幌支部での話し声を聞いたりということで、これらはいったんアストラル世界を通り、現象界を震動させることによって聞こえてくるのだ。

もともと言葉はアストラル世界と切っても切れない関係にある。というのも、言葉のヴァイブレーションによって、アストラル世界ができ上がっているからである。マントラを唱えることが重要な修行の一つとなっているのも、この理由からなのだ。つまり、マントラのヴァイブレーションによって、アストラル世界にマントラの世界をつくるというわけである。その世界は、修行のレベルによって早い遅いの違いこそあれ、この現象界に降りてきて現実化する。例えば、「幸福になれますように」という意味のマントラを唱えていれば、現実でも幸福になれる、ということなのだ。

キリスト教と仏教の最終段階の違い

ちょっと話がずれるが、ここでキリスト教の祈りについて触れてみよ

う。

言葉によってアストラル世界が構成されることを前提とするならば、死後、天国へ行くことを願う功徳あるクリスチャンは、天国（＝天界）に転生することになろう。しかし、この場合は、最終的な目的が天界なのだ。ここにキリスト教の限界があるとはいえないだろうか。

天界へ転生する——これは信徒の皆さんだったらどういう意味を持つか、よくご存じのはずだ。確かに天界での一生は幸福に満ちあふれたものになろう。しかし、天界で過ごすうちに、どうしても功徳を消耗してしまうのだ。これは、天界での生活に満足してしまい、修行などしようとも思わないためで、天界での死後は天界以下に転生することは確実である。最悪の場合は地獄への転生だ。したがって、長い目で見たら、天界へ生まれ変わるということは、我々の魂にとってよかろうはずがないのだ。

その点、仏教の修行の場合はそんな次元をはるかに超えている。サキャ神賢やグルに帰依し、解脱によってニルヴァーナという絶対自由・絶対

幸福の世界へ入ることを願うのだから……。オウム真理教の立位礼拝で、「グルとシヴァ大神に帰依いたします」と唱えることも、修行の基礎ともいうべき帰依を培うとともに、解脱に導いてもらえるよう祈っているのである。グルであるわたしも、シヴァ大神も解脱を司っているので、帰依すること自体が解脱へとつながっているのである。

他心通の世界への入り口

さあ、話を元に戻そう。

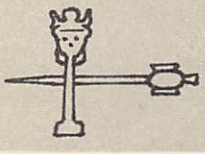
天耳通の次に完成する神通力が、次の図⑤に示されている。今度は他心通が完成することとなる。

他心通とは、他の人の心が手に取るようにわかるという神通力だ。それでは、この図がどうしてこの神通力を表現しているのかをお話ししよう。

これらの神通力を完成させ

ていく順番は、仏教の『阿含経典』にも記述がある。そして、それが見事に古代エジプトの場合と一致しているのだ。

ところが、その象徴は『阿含経典』には何の記述もされていない。こちらは全くわたしの経験から来ている。実は、わたしは図⑤とよく似たヴィジョンを他心通の世界に没入したときに見たのだ。色はグリーンで、形はだいたい次のようなものだった（図⑥）。そして、中には白い模様が透けて見えていた。このヴィジョンは、他心通の世界への入り口なのだろう。


⑦

⑥

宿命通——過去世を貫け

次に現われる図⑦では、人の心臓を剣が貫いている。心臓を剣が貫くというのは、いうまでもなく死を意味しているのだが、このレベルにまで来た修行者は、必ず瞑想中に死を体験する。死の体験によってカルマが清算され、そのこ

とが鮮明な意識状態をもたらす。そして、鮮明な意識状態を得たとき、心臓の中に存在しているコーザル世界へと入っていくことが可能となるのである。

コーザル世界とは、データだけが存在している世界である。ここに入っていくことによって、あらゆるデータを得ることができるのだが、そのため、自分や他人の過去世のデータをも知ることができるのだ。これが、この段階で完成する宿命通なのである。図の心臓を貫いた剣は、心臓（コーザル世界）の力によって、今生から無数にある過去世を貫いたという意味も併せ持っていよう。

この宿命通の完成は、修行者にとって特に有意義な神通力だと、わたしは思う。それは、宿命通が完成することによって、本当の平等心も身につくし、カルマの理論も理解できるようになるからだ。

この点を詳しく説明しておこう。本当の平等心が身につくというのは、無数にある過去世でいろいろな魂といろいろ関係を持っていたことを知るからである。ある魂と憎み合う敵同士だったこともあれば、その魂と

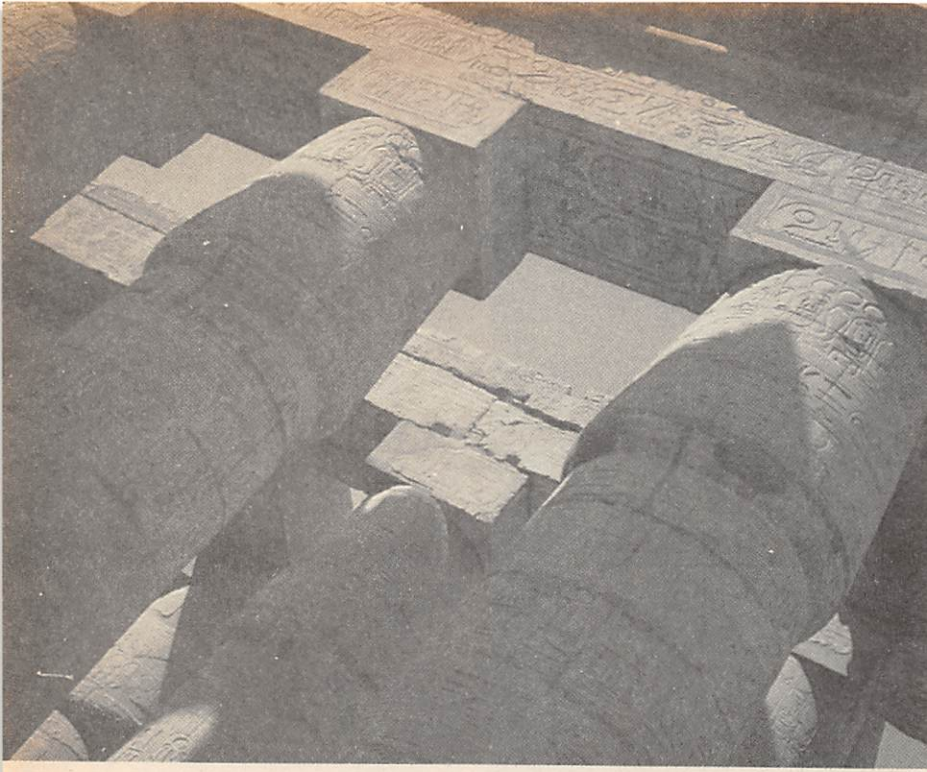
アブシンベル小神殿

母子だったり、恋人同士だったりしたこともあった。今生で自分に親切にしてくれている人に、過去世では欺かれ殺された。——こういうことを知ることによって、今生の人間関係もが幻影にすぎないことを悟り、すべての魂・人々を一時的な感情やシチュエーションに左右されずに、平等に見ることができるようになるのである。

また、自分が地獄の住人であったり、虫けらであった前世も当然知るようになるわけで、このことは、すべての生き物が自分と同じようにそれぞれ魂を持っているんだということを気づかせよう。そして、人間だけでなく、すべての生き物を平等に見ることができるようになろう。

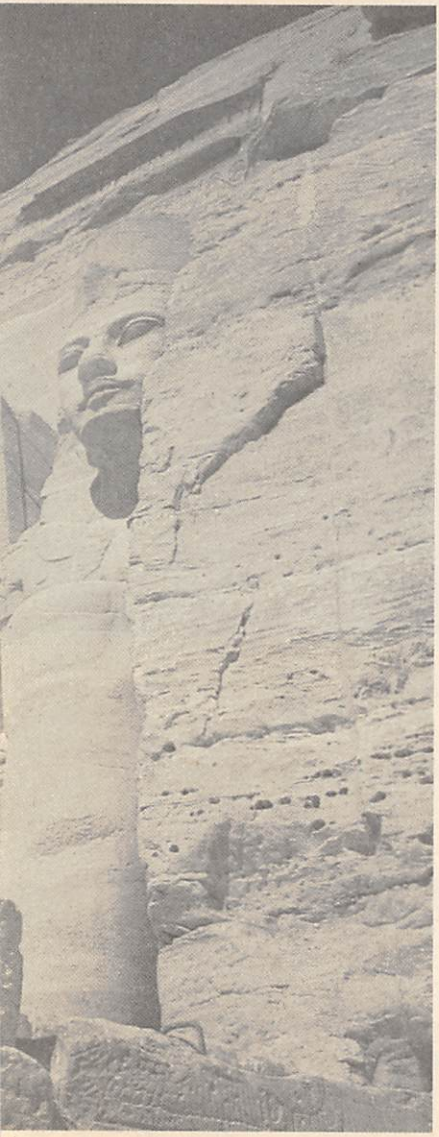
このようにして、本当の平等心ができ上がり、この平等心がクンダリニー・ヨーガの次に位置するジュニアーナ・ヨーガ、さらに上の大乗のヨーガの土台となっていくのである。

では、カルマの理論を理解するということは、どういうことなのだろうか。こちらの場合も、過去世を知ることにより、悪いカルマがどういう結果をもたらしているのか、良い



カルマがどういう結果をもたらしているのかをつぶさに見ることができ、それによってカルマの理論を完全に理解できるということなのだ。

ところで、あと一つつけ加えておきたいことがある。それは、時間の進み方を比べた場合、この現象界よりはイメージの世界であるアストラル世界のスピードの方が速く、アストラル世界よりも、データの世界であるコーザル世界の方が速くなっているのである。なぜなら、音優位のアストラル世界に対し、コーザル世界とは光優位の世界であり、音より



も光の方が速いからである。したがって、コーザル世界で多くの過去世を見ることも、あっという間にできてしまうのである。

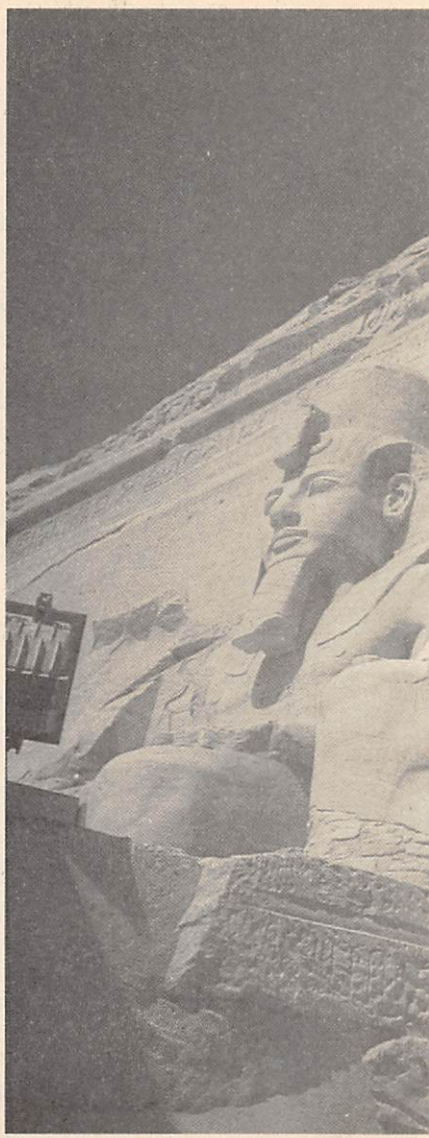
また、このレベルにまで来た修行者は、心が大変デリケートになっているので、アストラル世界やコーザル世界の時間が速く流れても、微妙なところにまで反応することができるのだ。

スポークが示す秘儀

では次に行こう。次は天眼通の完成となる。天眼通とは、透視および遠隔透視、そして未来を知る能力を含んだ神通力である。ヒエログリフの図では次のようになっている（図⑧）。

⑧

これは、アージュニァー・チァクラにある天眼の象徴である。霊視したときにこの形が見えるのであるが、下部の



真っすぐな棒は魂の通り道である。心臓にある魂がここを通ってアージュニァー・チァクラの位置にまで上昇する。上昇した魂は、そこで遠い場所での出来事や未来の出来事をヴィジョンとして見るのである。

ヴィジョンが見える秘密は、図の上部にある二本のスポークにある。——次に述べることは秘儀に属することだ——

この二本のスポークは、陰と陽、正と邪、正と負として表現されている二つのエネルギーのぶつかり合いなのだ。このエネルギーがぶつかり合って、未来や過去、この世の現象等を生み出しているのである。

そのため、片方のエネルギーだけ、例えば正だけの世界は存在しないということになる。正のあるところには必ず邪がある、陰のあるところには必ず陽がある——これが真理だ。

まあ、そのことを考えると、オウム真理教の動きがますます大きくなって、世界を聖なるヴァイブレーションで包もうとすればするほど、邪のエネルギーによる妨害も強くなっていくだろう。一生懸命にやって、邪のエネルギーを打ち破っていかなく

てはね。

なおサマナや信徒の皆さんの中で、アージュニァー・チァクラがピカッと光るのを経験した人も多いので、この現象とエネルギーがぶつかるときのスパークとの違いに触れておこう。

ピカッと光るのは、クンダリニーがアージュニァー・チァクラにまで上昇して、そこからスッと抜けるときに起こる現象だ。だから、それは単にそれだけのことでしかない。

ところが、スパークというのは、必ず宿命通の完成を通り越した後で、魂がアージュニァー・チァクラにまで上昇したときに見えるようになる、二つの正反対のエネルギーのぶつかり合いなのである。これが同じようにピカッと光っていながら、片方は何も見えない、もう片方は天眼通の完成だという理由である。

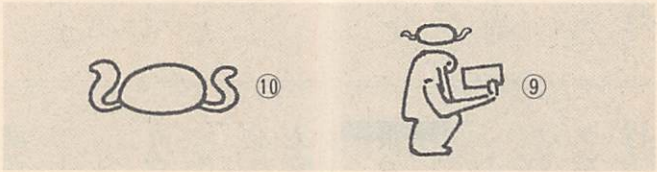
すべてを見通す力を得て

この図⑨は、クンダリニー・ヨーガの完成を目前にして、最後のイニシエーションをグルから受けている様子である。頭上にあるのは、クン

ダリニー・ヨーガ完成の象徴だ。完成を目前としたイニシエーションという雰囲気をうまく表わしている。

このとき、グルは何をイニシエートするのだろうか。この答えは、あえてここでは書かないでおこう。あなた自身がこの段階にまで来たとき、自分で確かめることができるからである。そのときまで楽しみに待ってみるのも修行の励みとなろう。

さて、いよいよ完成のとき



が来た。クンダリニー・ヨーガの完成なのだ。これは、ラージャ・ヨーガの成就の瞬間に見えた太陽に——この太陽は、実際には意思の光球なのであるが——クンダリニー・ヨーガの象徴であるヘビが巻きついた図として表現されている（図⑩）。

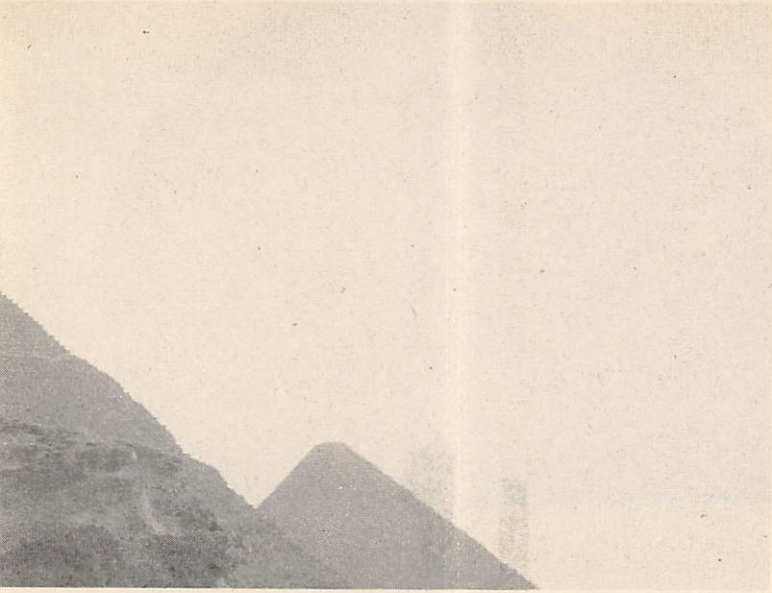
クンダリニー・ヨーガ完成時には、どんな神通力がつくのであろうか。それは、漏尽通の完成である。漏尽通は、すべてを見通す力とでもいえ

クンダリニー・ヨーガの象徴、太陽を取り巻くヘビの図柄は、古代エジプト人に好んで用いられた

ばよいだろうか。例えば、仏像や甘露水が、何というマントラによって修法されたのか、とか。弟子の状態だとか……。

弟子の話といえば、わたしにも不肖の弟子というか、困った弟子がいた。戒は破ってばかり、仕事はしない。わたしはマハー・ムドラーで引っ張ってやろうとしたが、どうしてもダメなので、リトリートに入れた。

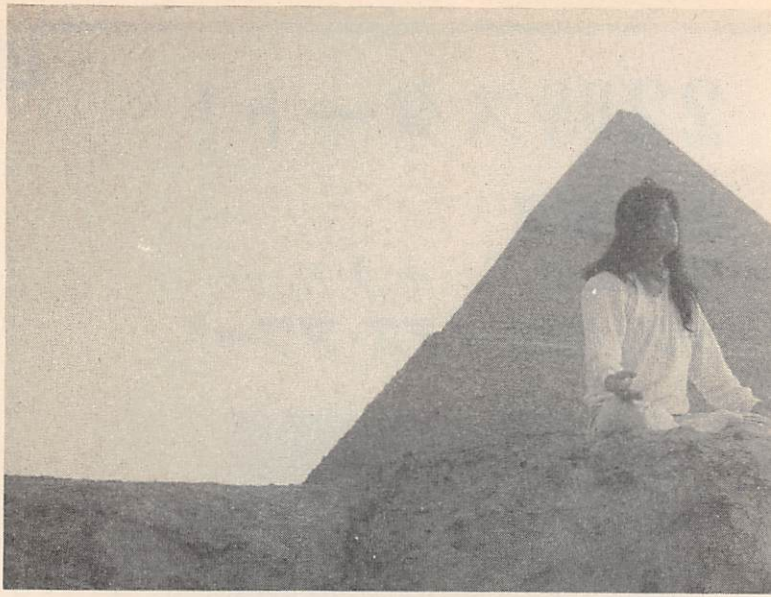
ところが、彼をリトリートに入れて何日間かが過ぎたとき、わたしは漏尽通によって彼をあきらめなければならないことを知った。わたしは



すぐに彼をリトリートから出し、グルとして彼を導いてやれなかったことをわびた。そして彼は一般の信徒へと戻った。

漏尽通は、救済者にとって活動するためにも、絶対必要な神通力であろう。

さあ、これで古代エジプトのクンダリニー・ヨーガのプロセスも最終地点にまで行きついたことになる。めでたし、めでたし……ではあるが、オウム真理教の場合、まだまだ先は長い。このあとジュニアーナ・ヨーガ、大乗のヨーガ、アストラル・ヨー



ガ、コーザル・ヨーガと続いているからだ。最終解脱のためにはどうしてもこれらのヨーガを完成させなければならない。グルとしては、皆さんにあくなき精進を望むところである。

編集付記

イシス、ハトホル、ラーなど、図⑩同様の象徴を頭に抱いた神は、エジプトに多く見られます。これらの神々は、神というよりはむしろ、クンダリニー・ヨーガの完成者、解脱者であったのです。

22時スタート！

ラジオ番組

Τῆς Βασιλειας》Hour

・テス・バシレイアス・アワー〃

エコー・オブ・モスクワ（モスクワ放送）

・中波（AM）720KHz　毎日23時から24時まで

・短波　毎日22時から23時まで

4月1日、

オウム真理教
"Ευαγγέλιον
エウアゲリオン

話題の有名人との対談、心を揺さぶる説法、
リスナーからの悩みに答える人生相談室……。
あなたの知らない麻原尊師と
オウム真理教の魅力がいっぱい。

あの麻原尊師の声が
あなたの耳を直撃！

絶賛発売中!!

麻原彰晃の世界 シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

PART-1
幸福に至る四つの実践

PART-2
尊師、麻原彰晃が斬る！

PART-3
真実！六道輪廻

PART-4
宗教にだまされるな！

PART-5
絶対の真理

PART-6
願望成就の秘法
安全で確実な願望成就の秘法とは？仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。
B6判　定価980円

PART-7
仏教真理 八正道
最終解脱者のみが語り得る八正道の真の意味合い。高い解脱・悟りへ至る道を、具体的に、現代でもすぐに実践できる方法として説き明かす。
B6判　定価800円

PART-8
仏教真理 六波羅蜜
大乗仏教における在家信徒の最も重要な修行法の一つ、六波羅蜜。この修行プロセスを着実に実践しさえすれば、在家でも必ず解脱へと至れる！高弟たちの体験談の特別付録付き。
B6判　定価800円

PART-9
尊師、聖地インドを行く

尊師がインドを行く。不思議な神秘の力によって、様々な過去の事実を明かされる尊師。第一部では、信徒と共に行かれた巡礼の旅の全記録を、そして第二部ではなんと、今まで部外秘だった直弟子用奥儀説法を満載！

B6判　定価750円

PART-10
仏教真理　五蘊無我

わたしたち本来のものではない五蘊（形状、容姿、感覚、表象、経験の構成、識別）を我と錯覚し、迷妄に苦しむ人間。この五蘊を証智し超越することによって、わたしたちは人間を超え、神に至れるのである。

B6判　定価650円

PART-11
自己を超えて神となれ！

――大人気を呼んだ尊師大学講演会特集――。東大、京大をはじめ、九一年の大学祭で尊師が若者に、現代における宗教の存在意義等について語られた模様を一挙掲載。

B6判　定価820円

PART-12
仏教真理　十二縁起

サキャ神賢が初転法輪でお説きになった「十二縁起の法」。魂の落下と上昇のプロセスを克明に描き、人間がこの世に生を受け、絶対的な自由の世界へ至る道程を明らかにする。

B6判　定価620円

PART-13
これが尊師！

B6判　定価570円

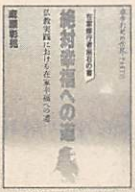
雑誌・テレビ・ラジオにと、今大人気の麻原尊師。尊師の人気の秘密は何か？雑誌社からの取材を中心に、様々な角度から尊師の魅力を探る。

PART-14
宗教の条件

B6判　定価570円

今、本物が明らかになる！真の宗教の条件とは？第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

PART-15
絶対幸福への道



B6判　定価620円

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

PART-16
麻原彰晃　方便品

B6判　定価720円

難解な仏典の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！釈迦牟尼の深遠な教えの真髄を、最終解脱者麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

● 全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版

本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL.03(3439)6043 振替 東京2-109325

営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL.03(5370)1598

眼ある人は目覚めよ!

タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著 B6判 550円

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

原始ヨーガ、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などすべての真理を内在した史上最強の法則。日本で初めて、サキャ神賢（釈迦牟尼）が説いた全体系が示される。

第一誦品　大宇宙の実相
第二誦品　真理勝者の救済計画

以下続刊

●ご注文は書店にお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版　本　社　〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL 03(3439)6043　振替 東京2-109325
営業部　〒168　東京都杉並区宮前3-8-11　TEL 03(5370)1598

衝撃の真実！キリストの大予言

再臨・裁き・終末

キリスト宣言PART2

神の審判のとき、この世は破滅する——『聖書』にまつわる破局の様相が、今ここに明かされる。イエス・キリストの大予言をいよいよ解読！

麻原彰晃 著

B6判 550円

●ご注文は書店にお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版 本社 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325

営業部 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03(5370)1598

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!

解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本 社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

MAHA YANA SUTRA

マハーヤーナ・スートラ PART 2

あの『マハーヤーナ・スートラ』の続編、
待望の発刊！

私は現代人に欠けているもの、それは絶対的真理の実践、
四つの預流支の実践だと考えている。
この『マハーヤーナ・スートラ PART2』は、
まさにその目的のために編集された経典である。
オウム真理教は伝統的な仏教、
ヨーガを根本とした教団である。
特にこの仏教の教えについては、後世に作られた
仏陀釈迦牟尼の教えてないといわれている大乗経を排し、
あくまでも仏陀釈迦牟尼の口から出たといわれている
原始仏教の教えをとっている。
そしてこの教えの実践は、
まさに現代の多くの悩みを解決する妙薬と言わざるを得ない。
さあ、あなたは真の灯明を見た。
この灯明を生かし、
あなたの心に真理の灯明を点火していただきたいと思います。

麻原彰晃

麻原彰晃 著

定価2100円（税込）

お経は読むためのものではない。
読んで、考え、実践するためのものである。

＜本書の構成＞

◆八つの功徳
南伝大蔵経『布施品』
尊師説法
体験談

◆四預流支
南伝大蔵経『預流相応』
尊師説法
体験談

◆八正道
南伝大蔵経『道相応』
尊師説法
体験談

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで（送料300円）
オウム出版　〒154東京都世田谷区野沢2-8-17　TEL03(3419)6043　郵便振替 東京2-161325

仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

イニシエーション

麻原彰晃著

この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、最高の修行法を伝授する。

本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀――ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、誕生した三五〇名の解脱者が証明する。

さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、農作物輸入自由化など、今日の世界と日本の動向を正確に予言している、驚くべき記述の数々！

◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。

◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。

◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。

◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

武田 健さん（東京都 学生）
「末法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県 警備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県 会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県 店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県 主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都 経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。

定価2163円 ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325

絶対幸福の鍵を解く

生死を超える

現実生活の苦悩から修行を志し、ついに解脱するに至った麻原彰晃尊師の貴重な体験をもとに、釈迦牟尼の「縁起の法」が、実はクンダリニー・ヨーガのプロセスそのものであったことを説き明かした名著「生死を超える」。

改訂

八十六年十二月発売以来、宗教、精神世界を持つ読者に絶大な支持を受け、解脱を目指す修行者にとって、手放すことのできない〝バイブル〟となっております。新たに八人の体験談をまじえて贈る全面改訂版。

麻原彰晃

◎誰にも書けなかった知られざる世界が今ここに！
◎真実を求めるあなた、人生の悩み、苦しみを乗り越えたいあなたに贈るヨーガ、仏教の真髄！
◎修行者二十一人の豊富な体験談も満載！

麻原彰晃著／B6判／定価1854円(本体1800円)

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)

●オウム出版 ●〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03(3439)6043/郵便振替：東京2-109325

超能力 秘密の開発法

人が修行によって"人間"を
超えようとするとき、
必ず人知を超えた"力"が身につく。
超能力のつかない修行などニセモノだ！
日本でただ一人の最終解脱者、
麻原彰晃が贈る究極の秘儀伝授。

B6判／320ページ
定価980円（本体951円）

お近くの書店にてお求めください。なお、直接弊社にお申し込みの場合は下記までお問い合わせください。

オウム出版
本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL 03（3439）6043　振替2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03（5370）1598

人間から神に生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

神通力者への道

成就者――それは高い智性、強靭な精神力、様々な神通力を備えたスーパー・ネイチャー。麻原彰晃尊師の指導のもと、オウム真理教の秘儀を駆使して、四人の男女が「普通の人」から「神通力者」に生まれ変わった！ドキュメンタリー・タッチで描く「神通力者」のすべて

神通力者への道

B6判　定価600円

神通力者への道2

B6判　定価550円

オウム出版
広報編集部編

オウム・ビデオ・ブックス

神通力者への道・神通力者への道②

実写にアニメを交えて送る
ドキュメンタリー・ビデオ同時発売中!!

製作／AUM［MAT］STUDIO／VHS／オールカラー／30分
定価1000円（消費税込み）

人間を超えた智慧と神通力を身につけた二名の
「クンダリニー・ヨーガの成就者」のスーパー・ストーリー。

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』

――主な内容――

◆ Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆ Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆ JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆ Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆ あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
◉成就者との対面および電話による悩み相談。
◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

至福の未来をあなたの手に

オウム真理教

AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。
日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。
素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか?

※資料請求券を貼付した八ガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

古代エジプトの秘儀を解く
資料請求券

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、"オウム真理教ネット"

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット"事務局
TEL 03-3335-4965

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『エジプトの秘儀を解く』読者係」までお送りください。

〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『エジプトの秘儀を解く』読者係」

◆各本支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098 (869) 7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

古代エジプトの秘儀を解く

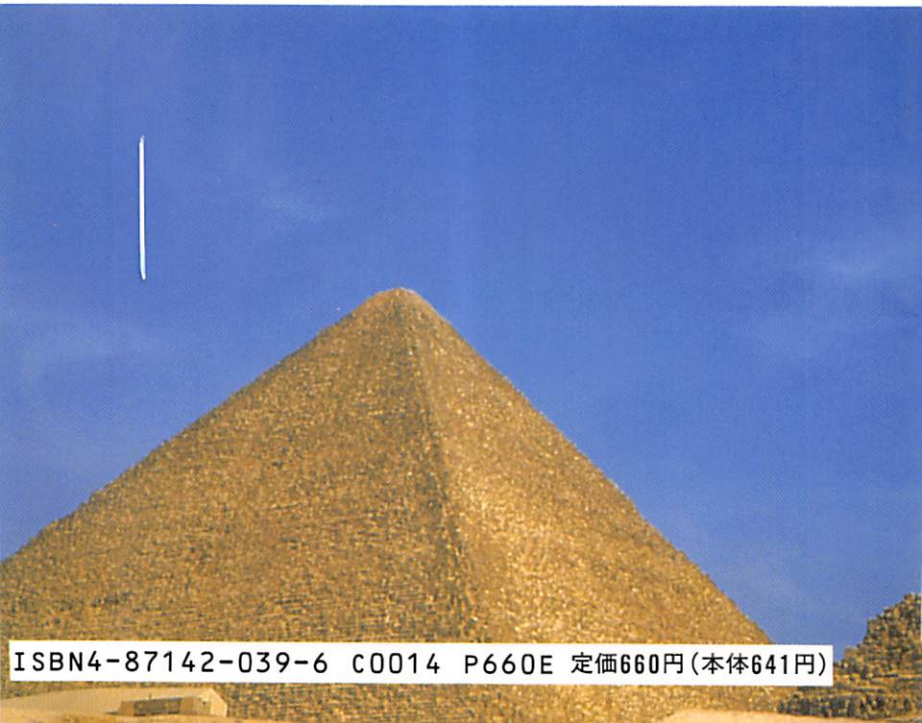
一九九二年四月二十六日　初版発行

定　価　六六〇円
著　者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
　　東京都世田谷区世田谷二―八―一七
　　郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二―一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© Shoko Asahara 1992
ISBN4-87142-039-6　C0014　P660E

古代エジプトの秘儀を解く



ISBN4-87142-039-6 C0014 P660E 定価660円(本体641円)